

御殿場市神山・駒門の遺跡群

第二東名建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

御殿場市

総論（沼津工区御殿場地区）

イザロ塚遺跡（第二東名No.156 地点）

宮ノ台遺跡（第二東名No.159 地点）

2014

中日本高速道路株式会社東京支社
静岡県埋蔵文化財センター

序

第二東名高速道路は、東名高速道路の混雑緩和を目的として計画・建設され、平成24年4月に御殿場ジャンクションから浜松いなさジャンクションまで開通した新東名高速道路であります。本書はこの第二東名高速道路建設に伴い、事前の発掘調査が実施された御殿場市内の遺跡の調査成果を報告するものです。

御殿場市内では調査対象地が5箇所あり、御殿場市駒門にある御殿場ジャンクションに至るまでの御殿場市南部での調査となりました。調査対象地一帯の地質は主に富士山の溶岩流・泥流等で構成されています。この第二東名高速道路の富士市から裾野市域までの路線は愛鷹山山麓で、ローム中の遺物・遺構を見出す調査が主でしたが、当該報告書ではまさしく富士山の裾野における調査であります。

そのうち宮ノ台遺跡では縄文時代晩期の土器群が富士山側火口噴出物である砂沢スコリアの直上層中から出土しました。また新富士火山旧期溶岩流直上の黒色土中にも縄文時代早期の土器が出土しています。これらのこととは、富士山の噴火活動が一時終息し、被災した遺跡周辺地域の植生を含めた自然環境が改善したことにより、私たちの祖先が生活のために進出したことを証明しています。

またイザロ塚遺跡でも新富士火山溶岩流直上の黒色土中に石器を見出すことができ、上記の様な先祖たちのたくましさを物語っています。

本書が、研究者のみならず、県民の皆様に広く活用され、地域の歴史を理解する一助となることを願います。

最後になりましたが、本発掘調査にあたり、中日本高速道路株式会社ほか、各関係機関の御援助、御理解をいただきました。この場を借りて厚く御礼申し上げます。

2014年3月

静岡県埋蔵文化財センター所長

勝田順也

例　　言

- 1 本書は静岡県御殿場市神山字大野原に所在するイザロ塚遺跡（第二東名No.156地点）、同市駒門字宮ノ台に所在する宮ノ台遺跡（第二東名No.159地点）の発掘調査報告書である。
- 2 現地調査は第二東名建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査業務として、中日本高速道路株式会社（旧日本道路公团静岡建設局）の委託を受け、静岡県教育委員会文化財保護課（旧静岡県教育委員会文化課）の指導のもと、財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所が実施し、平成23年度以降は、静岡県埋蔵文化財センターが同研究所の業務を引き継いで実施した。
- 3 イザロ塚遺跡及び宮ノ台遺跡の確認調査・本調査及び資料整理の期間は以下のとおりである。
- イザロ塚遺跡
- 確認調査 平成12年2～3月 調査対象面積8,960m² 実掘面積440m²
- 宮ノ台遺跡
- 確認調査 平成12年6～7月、10月、12月～平成13年1月、4～7月、平成14年6～7月
調査対象面積27,200m² 実掘面積1,848m²
- 本調査 平成12年11月～12月、平成15年9～10月、平成20年4～6月、
平成24年8月～平成25年3月
調査対象面積5,862m² 実掘面積4,715m²
- 資料整理 平成25年4月～平成26年3月
- 4 調査体制は以下のとおりである。
- 財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所
- 平成11年度
- | | | |
|--------------|---------------|------------------|
| 所長 斎藤 忠 | 副所長 山下 晃 | 総務部長兼常務理事 伊藤友雄 |
| 総務課長 杉木敏雄 | 経理専門員 稲葉保幸 | 総務係長 田中雅代 |
| 会計係長 大橋 薫 | 調査研究部長 佐藤達雄 | 調査研究部次長 佐野五十三 |
| 調査研究一課長 及川 司 | 調査研究二課長 遠藤喜和 | |
| 資料課長 大石 泉 | 主任調査研究員（沼津工区） | 前嶋秀張 調査研究員 望月由佳子 |
- 平成12年度
- | | | |
|----------------------|---------------|----------------|
| 所長 斎藤 忠 | 副所長 山下 晃 | 総務部長兼常務理事 伊藤友雄 |
| 総務課長 杉木敏雄 | 経理専門員 稲葉保幸 | 総務係長 田中雅代 |
| 会計係長 大橋 薫 | 調査研究部長 佐藤達雄 | |
| 調査研究部次長兼調査研究一課長 及川 司 | | 調査研究二課長 篠原修二 |
| 資料課長 大石 泉 | 主任調査研究員（沼津工区） | 前嶋秀張 |
- 調査研究員 望月由佳子 岩名建太郎 白鳥直樹
- 平成13年度
- | | | |
|----------------------|---------------|----------------|
| 所長兼副理事長 斎藤 忠 | 副所長兼理事 山下 晃 | 総務部長兼常務理事 今田徳幸 |
| 総務課長 木杉昭一 | 経理専門員 稲葉保幸 | 総務係長 山本広子 |
| 会計係長 大橋 薫 | 調査研究部長 佐藤達雄 | |
| 調査研究部次長兼資料課長 栗野克巳 | | 保存処理室長 西尾太加二 |
| 調査研究部次長兼調査研究一課長 及川 司 | | 調査研究二課長 篠原修二 |
| 調査研究三課長 飯塚晴夫 | 主任調査研究員（沼津工区） | 前嶋秀張 |

調査研究員 望月由佳子

平成14年度

所長兼副理事長 斎藤 忠

副所長兼理事 飯田英夫

総務課長 本杉昭一

経理専門員 稲葉保幸

会計係長 大橋 薫

調査研究部長 山本昇平

調査研究部次長兼資料課長 栗野克巳

総務部長兼常務理事 余田徳幸

総務係長 山本広子

調査研究部次長兼調査研究一課長 中嶋郁夫

保存処理室長 西尾太加二

調査研究部次長兼調査研究二課長 佐野五十三

調査研究三課長 篠原修二

調査研究四課長 足立順司 主任調査研究員(沼津工区)

前嶋秀張

調査研究員 鈴木秀樹 後藤正人

平成15年度

所長兼副理事長 斎藤 忠 副所長兼理事 飯田英夫

総務部長兼常務理事 余田徳幸

総務部次長兼総務課長 鎌田英巳

経理専門員 稲葉保幸

総務係長 山本広子

調査研究部長 山本昇平

調査研究部次長兼資料課長 栗野克巳

保存処理室長 西尾太加二

調査研究部次長兼調査研究一課長 中嶋郁夫

調査研究三課長 足立順司

調査研究部次長兼調査研究二課長 佐野五十三

主任調査研究員 前嶋秀張 笹原芳郎

平成20年度

所長兼常務理事 清水 哲 次長兼総務課長 大場正夫

総務係長 山内小百合

会計係長 杉山和枝 次長兼調査課長 及川 司

次長兼事業係長 稲葉保幸

保存処理室長 西尾太加二 東部総括係長 中鉢賢治

東部調査係長 笹原千賀子

中部調査係長 河合 修 西部調査係長 富樫孝志

調査研究員 木崎道昭

静岡県埋蔵文化財センター

平成24年度

所長 勝田順也 次長兼総務課長 八木利眞 調査課長 中鉢賢治

主幹兼事業係長 前田雅人 総務係長 龍みやこ

主幹兼調査第一係長 富樫孝志 第二係長 溝口彰啓 指導主事 大谷 隆

常勤嘱託員 永田悠記 長谷川哲也

平成25年度

所長 勝田順也 次長兼総務課長 南谷高久 調査課長 中鉢賢治

主幹兼事業係長 前田雅人 主幹兼総務係長 大坪淳子

主幹兼調査第一係長 及川 司 第二係長 溝口彰啓 主査 勝又直人 岩崎しのぶ

5 本書の執筆は第1・2章を勝又、第3章を岩崎が行った。

6 本書の編集は静岡県埋蔵文化財センターが行った。

7 現地調査及び資料整理にかかり、実施した委託事業の委託先は以下の通りである。

現地調査

No156地点

掘削業務 加藤建設株式会社

測量業務 株式会社フジヤマ

No.157地点

掘削業務 渡邊工業株式会社

No.158地点

掘削業務 渡邊工業株式会社

No.159地点

平成12年度

掘削業務 渡邊工業株式会社

測量業務 加藤建設株式会社

平成13年度

掘削業務 渡邊工業株式会社

測量業務 加藤建設株式会社

平成14年度

掘削業務 株式会社齋藤組

測量業務 株式会社静岡人類史研究所

平成15年度

掘削業務 真田建設株式会社

平成20年度

掘削業務 株式会社勝間田工業

測量業務 株式会社イビソク

平成24年度

掘削業務 株式会社関道建設

測量業務 株式会社シン技術コンサル

No.160地点

掘削業務 山久建設株式会社 確認調査その1・その2

測量業務 株式会社東京航業研究所 確認調査その1

大成エンジニアリング株式会社 確認調査その2

資料整理

出土黒曜石原産地分析 望月明彦氏（独立行政法人沼津工業高等専門学校名誉教授）

整理作業・保存処理業務委託 株式会社パソナ

8 発掘調査では以下の方々に御指導、御助言を賜った。厚く御礼申し上げる。

池谷信之・小崎 晋・設楽博己・中沢道彦（五十音順・敬称略）。

9 発掘調査の資料は、すべて静岡県埋蔵文化財センターが保管している。

凡例

本書の記載については、以下の基準に従い統一を図った。

- 1 本書で用いた造構・遺物などの位置を表す座標は、すべて平面直角座標第VII系を用いた国土座標、日本測地系（改正前）を基準とした。
- 2 宮ノ台遺跡の調査区の方眼設定は、上記の国土座標を基準に設定した。
Na159地点 ($X = -82400$, $Y = 37630$) = (A, 1)
- 3 出土遺物は4桁の通し番号（=遺物番号）を付して取り上げた。報告書中の挿図番号とは同一でない。
- 4 挿図の縮尺は各図に示したスケールの通りである。
- 5 色彩に関する用語・記号は、新版『標準土色帳』（農林水産省技術会議事務局監修1992）を使用した。
- 6 土層名について、イザロ塚遺跡は第2章第3節の基本土層柱状図（第12図）、宮ノ台遺跡は第3章第3節の基本土層柱状図（第24図）に表示した名称を用いる。
- 7 下記の図については国土地理院発行地形図を複写し加工・加筆した。

第1章第2節 周辺遺跡位置図（第4図）	1 : 50,000地形図「御殿場」
第2章第1節 イザロ塚遺跡位置図（第9図）	1 : 25,000地形図「裾野」
第2章第1節 イザロ塚遺跡周辺旧地形図（第10図）	1 : 25,000地形図「佐野」
第3章第1節 宮ノ台遺跡位置図（第17図）	1 : 25,000地形図「御殿場」「裾野」
第3章第1節 宮ノ台遺跡周辺旧地形図（第18図）	1 : 25,000地形図「御殿場」「佐野」

石材一覧表

和名	英名	標準資料略号	和名	英名	標準資料略号
ガラス質黒色安山岩	glassy black andesite	GAn	斑レイ岩	gabbro	Ga
輝石安山岩	pyroxene andesite	An(Py)	ホルンフェルス	hornfels	Hor
黒曜石	obsidian	Ob	硬質砂岩	hard sandstone	HSS

黒曜石产地一覧表

略号	産地	略号	産地
AGKT	天城柏崎群	SWHD	御訪星ヶ台群
KZOB	神津島恩馳島群		

遺物

	敲打痕		磨面
---	-----	---	----

目 次

序・例言・凡例

第1章 総論

第1節 調査の経緯	1
第2節 御殿場市の位置と環境	3
第3節 調査・整理の体制・方法・経過	11
第4節 各確認調査地点の結果	15

第2章 イザロ塚遺跡 (No.156地点)

第1節 イザロ塚遺跡の概要	19
第2節 調査の体制・経過	23
第3節 調査の成果	23
第4節 イザロ塚遺跡調査のまとめ	29

第3章 宮ノ台遺跡 (No.159地点)

第1節 宮ノ台遺跡の概要	30
第2節 調査の体制・経過	34
第3節 調査の成果	39
第4節 宮ノ台遺跡調査のまとめ	81

附編 自然科学分析の成果

宮ノ台遺跡 (第二東名No.159地点) 出土黒曜石产地推定結果	84
--	----

写真図版

抄録・奥付

挿 図 目 次

第1章 総論	第9図 イザロ塚遺跡位置図	20
第1図 御殿場市位置図	第10図 イザロ塚遺跡周辺旧地形図	21
第2図 遺跡周辺表層地質概要図	第11図 イザロ塚遺跡周辺地質図	22
第3図 遺跡周辺表層地質概要凡例図	第12図 イザロ塚遺跡基本土層図	24
第4図 周辺遺跡位置図	第13図 イザロ塚遺跡 テスツビット配置図	25
第5図 確認調査実施地点位置図	第14図 イザロ塚遺跡土層柱状図 (1)	26
第6図 No.157・158地点調査範囲位置図	第15図 イザロ塚遺跡土層柱状図 (2)	28
第7図 No.159・160地点調査範囲位置図	第16図 遺物実測図	29
第2章 イザロ塚遺跡 (No.156地点)		
第8図 No.156地点と イザロ塚遺跡相関図	第3章 宮ノ台遺跡 (No.159地点)	
18	第17図 宮ノ台遺跡位置図	31

第18図	宮ノ台遺跡周辺旧地形図	32
第19図	宮ノ台遺跡周辺地質図	33
第20図	宮ノ台遺跡調査区及び テストピット配置図	35
第21図	4区・5区拡大図	36
第22図	6区拡大図	36
第23図	宮ノ台遺跡 工期別調査区配置図	38
第24図	宮ノ台遺跡基本土層図	39
第25図	宮ノ台遺跡 土層堆積状況図（1）	40
第26図	宮ノ台遺跡 土層堆積状況図（2）	41
第27図	縄文時代早期土器分布図	44
第28図	縄文時代早期遺物分布拡大図	45
第29図	縄文時代土器実測図（1）	46
第30図	縄文時代晚期遺物分布図	48
第31図	縄文時代晚期土器分布図	49
第32図	1区土器出土状況拡大図	50
第33図	縄文時代土器実測図（2）	51
第34図	縄文時代土器実測図（3）	52
第35図	縄文時代土器実測図（4）	53
第36図	縄文時代土器実測図（5）	55
第37図	縄文時代土器実測図（6）	56
第38図	縄文時代土器実測図（7）	57
第39図	縄文時代土器実測図（8）	58
第40図	縄文時代土器実測図（9）	59
第41図	縄文時代石器 器種別・石材別分布図（東側）	63
第42図	縄文時代石器 器種別・石材別分布図（西側）	64
第43図	縄文時代石器実測図（1）	65
第44図	縄文時代石器実測図（2）	67
第45図	縄文時代石器実測図（3）	68
第46図	縄文時代石器実測図（4）	69
第47図	縄文時代石器実測図（5）	70
第48図	中近世以降遺構配置図	73
第49図	溝状遺構実測図（1）	74
第50図	溝状遺構実測図（2）	75
第51図	溝状遺構実測図（3）	76
第52図	土坑実測図（1）	77
第53図	土坑実測図（2）	78
第54図	土坑実測図（3）	79
第55図	近世遺物実測図	80
第56図	浮線文系土器出土遺跡分布図	81
第57図	内面口唇部の施文模式図	82

目次

第1章 総論		
第1表	周辺遺跡一覧表（1）	7
第2表	周辺遺跡一覧表（2）	8
第3表	調査・資料整理体制一覧表	12
第4表	現地調査・資料整理期間一覧表	13
第3章 宮ノ台遺跡（№159地点）		
第5表	縄文時代早期土器観察表	47
第6表	縄文時代晚期土器観察表（1）	60
第7表	縄文時代晚期土器観察表（2）	61
第8表	縄文時代晚期土器観察表（3）	62
第9表	縄文時代晚期石器一覧表	71
第10表	中近世溝状遺構計測表	72
第11表	中近世土坑計測表	72

挿写真目次

土器接合作業	13
土器実測作業	13
石器図版作成作業	13
遺構図版作成作業	13
№157地点TP 2	17
№158地点TP 1	17
№160地点TP 3	17

写真図版目次

イザロ塚遺跡

図版1 調査区遠景（南東より）

　　調査区遠景（北より）

図版2 TP2 北壁

TP3 北壁

TP9 北壁

TP11 北壁

TP4 北壁

TP4 尖頭器出土状況（1）

TP4 尖頭器出土状況（2）

TP4 出土尖頭器

宮ノ台遺跡

図版3 1区北 全景

　　1区南 J12・K12グリッド

　　遺物出土状況

図版4 2区 全景

図版5 3区 全景

　　3区 3・4・5号溝状遺構完掘状況

図版6 4区 全景

　　5区 全景

図版7 6区 全景

　　TP70～73 完掘状況

図版8 TP27 遺物出土状況

　　TP27 遺物出土状況拡大

図版9 TP39 基本土層

図版10 1区 遺物出土状況

　　1区 遺物出土状況拡大（1）

　　1区 遺物出土状況拡大（2）

　　6区 遺物出土状況（1）

　　6区 遺物出土状況（2）

図版11 6区 10号溝状遺構 完掘状況

　　6区 8号土坑 検出状況

　　6区 8号土坑 完掘状況

図版12 繩文時代早期 土器

　　繩文時代晚期 浅鉢

図版13 繩文時代晚期 浅鉢

　　繩文時代晚期 深鉢

　　繩文時代晚期 深鉢

　　繩文時代晚期 壺

　　繩文時代晚期 双口鉢

　　繩文時代晚期 東海系土器

　　その他の繩文時代晚期土器

図版16 繩文時代晚期 剥片石器

　　繩文時代晚期 石核

図版17 繩文時代晚期 碾石器

　　繩文時代晚期 台石

近世金属製品

第1章 総論

第1節 調査の経緯

1 第二東名高速道路建設に伴う埋蔵文化財の取り扱いの経緯

当該遺跡群の発掘調査は第二東名高速道路建設に伴う事業である。この第二東名建設が東名高速道路等の混雑緩和対策のため、国の道路審議会において建議されたのは昭和62年のことである。第四次全国総合開発計画の閣議決定、国土開発幹線自動車道建設法の一部改正等の後、平成元年1月に開催された第28回国土開発幹線自動車道建設審議会において、神奈川県横浜市から愛知県東海市に至る第二東名高速道路が計画された。この基本計画の策定を受けて、静岡県は第二東名建設推進庁内連絡会議を平成元年12月に設置した。この会議には静岡県教育委員会文化課が参加している。平成3年には第二東名の基本計画に係る文化財等を含む環境影響調査が実施され、他の公共事業及び地域開発計画との調整が図られた。この結果、駿東郡長泉町から引佐郡引佐町までの都市計画決定が告示された。

当該計画に係る埋蔵文化財の分布状況の把握作業は、この環境影響調査と並行して実施されている。第二東名建設に関する調査の指示を受けた日本道路公団は、文化庁に平成4年2月17日付で通知。また同年5月11日付で日本道路公団東京第一建設局長から静岡県教育委員会教育長宛てに、第二東名建設予定地内の埋蔵文化財の分布調査が依頼された。そして同年8月27日付で日本道路公団東京第一建設局静岡調査事務所長から、静岡県教育委員会教育長宛てに「第二東海自動車道の埋蔵文化財包蔵地の所在の有無について」の照会がなされた。

これらを受けて静岡県教育委員会は、平成4年9月29日に関係する市町村教育委員会担当者を招集し、第二東名路線内の埋蔵文化財踏査連絡会を設け、第二東名路線内における埋蔵文化財の所在を市町村教育委員会に照会した。寄せられた回答について更に協議を深め、その結果を平成5年3月18日付で静岡県教育委員会教育長から日本道路公団東京第一建設局静岡調査事務所長宛てに回答している。この時点で調査対象箇所は136箇所、調査対象総面積が1,453,518m²である。

その後、日本道路公団に対し、平成5年11月19日付の長泉町から引佐町までの施工命令が出された。これを受けて日本道路公団東京第一建設局、静岡県土木部高速道路建設課、静岡県教育委員会文化課が当該路線内の埋蔵文化財調査の進め方等について協議を開始した。調査対象範囲の確定、個々の遺跡の取り扱いにつき検討を加えるとともに、日本道路公団が財團法人静岡県埋蔵文化財調査研究所に対して、発掘調査実施の委託を行うことを確認している。しかし膨大な調査量を短期間で消化するための調査体制の整備について大きな課題となっている。

平成6年度は静岡県教育委員会文化課が当該路線内の調査対象箇所の状況調査を実施している。またパーキングエリアやサービスエリア建設予定地の踏査を関係市町村教育委員会に依頼している。平成4年度末に示された調査対象箇所及び調査対象総面積はこれらの状況調査・踏査結果等を集成・再検討され、調査対象地点133箇所、調査対象総面積1,286,759m²となった。なお当該年度中に建設省の依頼を受けて、長泉町から御殿場市までの踏査を行い、調査対象地点のリストアップがなされている。

平成7年には路線の一部で幅杭の打設が開始され、埋蔵文化財の発掘調査について具体的に調整が可能な環境となり、同年12月13日に日本道路公団静岡建設所と静岡県教育委員会文化課は「第二東名開通埋蔵文化財連絡調整会議」第1回会議を開催した。その後、この会議を通して埋蔵文化財に係る取り扱いの詳細の協議が可能となっていく。

平成8年9月24日付で日本道路公団静岡建設局（静岡建設所が改組）及び静岡県教育委員会は、埋蔵文化財の取り扱いに関する確認書を締結し、同月25日付で財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所を加えた三者により、第二東名建設に係る埋蔵文化財調査の実施についての協定書を締結した。年度後半に静岡県西部地区から確認調査が実施され、平成9年度に至っては長泉町から引佐町までの調査対象地点で、本格的な調査が開始され始めている。

一方、長泉町から御殿場市までの第二東名建設に係る調査開始の指示が、平成9年1月31日付で日本道路公団に出され、同年12月25日付で施工命令が出されている。

平成10年9月2日付で日本道路公団静岡建設局長から静岡県教育委員会教育長宛てに「埋蔵文化財包蔵地の所在の有無について」の照会がなされている。平成6年度に既に調査対象地点が提示されていたが、この照会により、関係する市町村教育委員会に対して平成10年9月25日付で再踏査の依頼を行うと同時に、同年10月2日に踏査に関する打合せが行われた。関係市町村教育委員会からの踏査結果の集成・検討を行い、同年12月17日付で静岡県教育委員会教育長から日本道路公団静岡建設局長宛てに回答している。この踏査結果では調査対象地点21箇所、調査対象総面積108,734m²が計上された。この長泉町から御殿場市までの区間における発掘調査についても、財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所が実施することとする協定の変更は、平成11年3月5日付のことと、その後複数回の協定変更を実施している。

一連の第二東名に係る埋蔵文化財の発掘調査は、関係諸機関との協議の結果、基本的に当該高速道路本線及びサービスエリア・パーキングエリア、排土処理場については財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所が担当し、工事用道路及び取付道路部分については、所在する当該市町村教育委員会が担当することとなった。であるが調査遺跡の増加に伴い研究所の調査体制の整備が急務となり、本線部分の発掘調査についても一部市教育委員会が実施することになった。

このような経緯において、当該報告書で扱う御殿場市域における第二東名建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査は、№156地点から№160地点まで合計5箇所で実施されている。調査の実施については当研究所が担当している。用地買収等の進展を受けて、平成11年度に№156地点の調査が着手された。特に遺物が多く出土した№159地点では断続的に調査が行われ、平成15年度を最後に調査は一時中断した。その後、平成23年度に御殿場ジャンクション以東の事業化を受けて協議を再開された。平成24年7月から平成25年3月にかけて№159地点の最後の調査が実施されている。

なお平成23年4月より財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所の事務を、静岡県埋蔵文化財センターが継承し、調査等にあたっている。

第2節 御殿場市の位置と環境

1 地理的環境

御殿場市は北緯35度12~21分、東経138度43~59分付近、静岡県の東部地方に位置し、面積は約194.85km²を測る。御殿場市の北~北東側は駿東郡小山町と接し、東側は神奈川県足柄下郡箱根町と接する。南側は裾野市と接し、西側は富士市、富士山頂付近では富士宮市と接する。

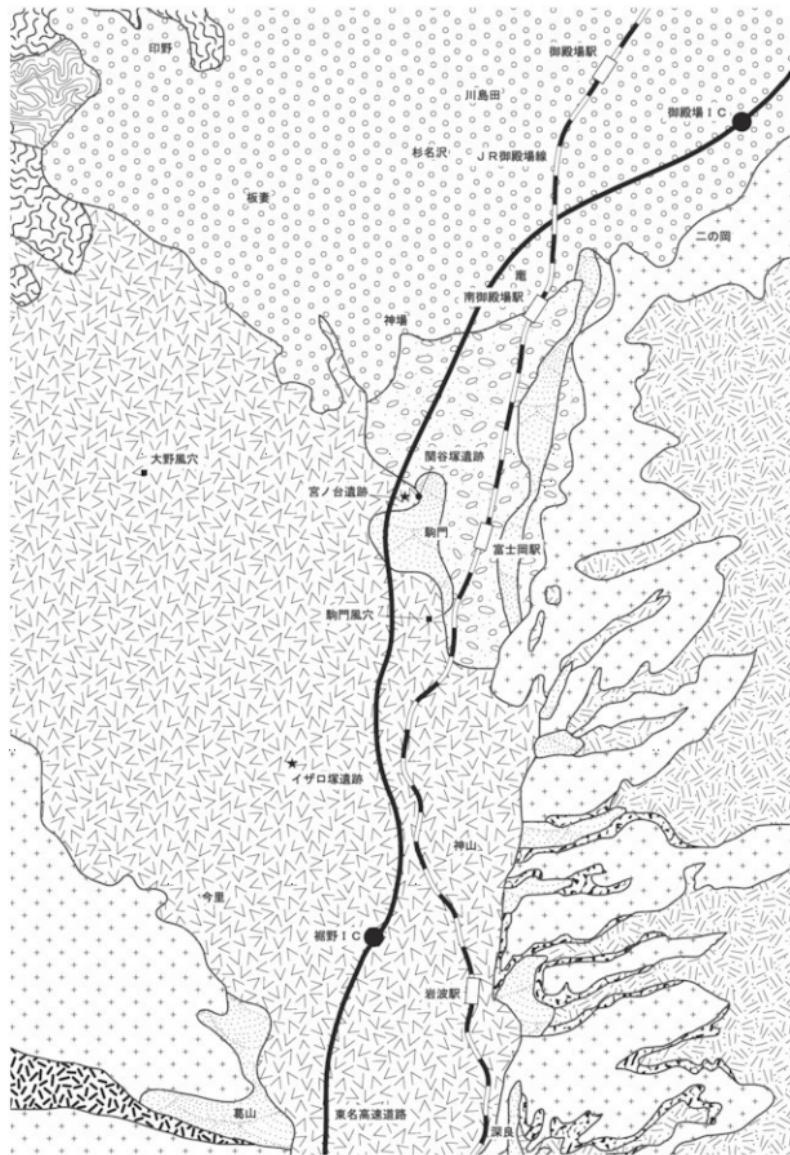
当該第二東名建設事業では、この御殿場市は東端に該当する。愛鷹火山地帯を巡った第二東名の予定線路は御殿場市神山付近から富士火山地へと移行する。そもそも御殿場市の地勢は東側の箱根火山地、西側の富士火山地、南西側の愛鷹火山地の間で成立した裾合谷に位置し、富士山東麓の広大な裾野と箱根火山を後背となす。市街地に流れる主な河川として、黄瀬川及び鮎沢川がある。両河川は御殿場市街地標高約450m付近を分水界となす。鮎沢川は北流して箱根火山地帯を巡り、駿東郡小山町・神奈川県足柄上郡山北町・開成町・松田町・大井町・南足柄市・小田原市を流れ、相模湾に注ぐ。神奈川県内においては酒匂川と名称が変わる。黄瀬川は裾野市・駿東郡長泉町・清水町・沼津市を経て、伊豆天城山を水源となす狩野川と合流し、駿河湾に注いでいる。

第2・3図には土氏による表層地質図（土1978）を参考に、遺跡周辺の表層地質の概略を示した。図でも理解されるように、この御殿場市域の表層地質は箱根火山及び富士火山に由来する。まず箱根火山は約40万年前には既に活動を行っており、該期には愛鷹火山も活動を行っていたらしい。当該箱根火山は芦ノ湖の成因で夙に知られるようにカルデラを形成し、現在は2つの外輪山と中央火口丘を持つ複雑な山容を示している。従来は単一の成層火山により箱根火山が形成されたとされていたが、最近の長井・高橋両氏の研究（長井・高橋2008）でも紹介されたように、箱根火山は単体の成層火山ではなく小規模な成層火山群により形成されたとする説が提示された。これによれば65~35万年前における玄武岩質の成層火山群の形成が箱根火山の端緒とされる。最初にカルデラが形成されたのは23~13万年前であり、それまでには御殿場市東側の箱根火山西麓は山伏峠火山体・深良火山体・丸岳火山体等の噴出物により既に形成されていたらしい。図にある箱根火山浮石流は東京軽石流と同質のデイサイト～流紋岩質火砕流堆積物と考えられ、強羅カルデラが形成された8~4万年前の噴出物とされる。

愛鷹火山は40万年前より活動を開始し、凝灰角礫岩を主体とする火碎物噴火から玄武岩質溶岩の噴出



第1図 御殿場市位置図



第2図 遺跡周辺表層地質概要図

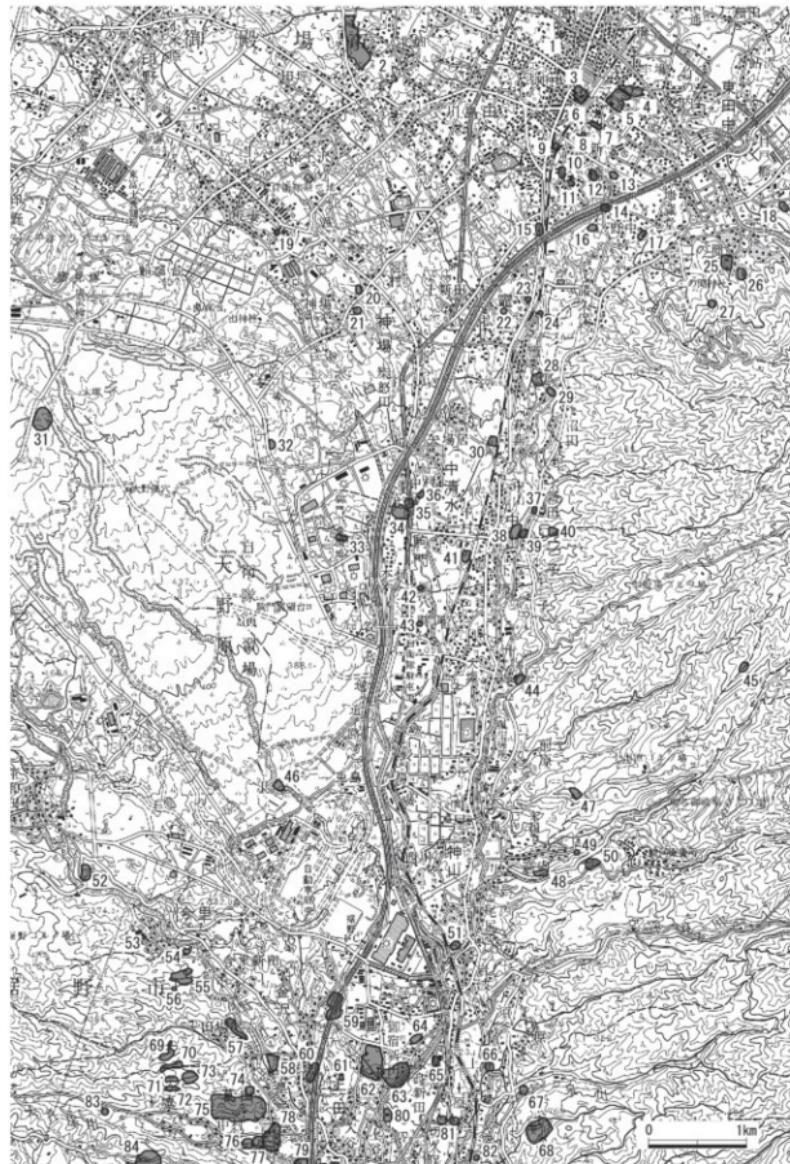
に移行した。火口は位牌岳に熊ヶ谷と呼ばれる、現在は南西側に開口する馬蹄形を呈した地形に比定される。15~13万年前には位牌岳南側から安山岩質~ディサイト質溶岩(桃沢溶岩流)の噴出が推定されている。黒岳溶岩円頂丘、袴腰岳溶岩円頂丘の形成及び長窓火砕流が愛鷹火山の最後の活動と考えられ、その年代は約10万年前と考えられている。

富士山は近年行われた北東部斜面でのボーリング調査の結果、小御岳火山以前の先小御岳火山の存在が明らかにされ、先小御岳火山、小御岳火山、古富士火山、新富士火山という4段階に分けられることが解明されている。先小御岳火山の活動は数十万年前と考えられ、愛鷹火山や箱根火山と同時期に活動していた可能性は高く、角閃石斑晶を含む安山岩~ディサイト質の溶岩流を特徴とし、活動末期には大量の泥流を発生させたと考えられる。この先小御岳火山岩類と小御岳火山岩類との間に風化した土壤層が認められたため、両火山の活動には休止期間を経たことが理解されている。小御岳火山は現在の富士山富士吉田口5合目にある小御岳神社付近に馬蹄形火口の痕跡を残す。この火山は富士火山噴出物により殆どが被覆されているが、浸食谷等に露出する地層面でも確認が可能とされる。この火山は玄武岩質安山岩の溶岩流を噴出している。各噴出物層間に時間的間隙は認められていない。古富士火山は10~1万年に活動したものと考えられている。新富士火山の噴出物で覆われているが、県内では富士宮市元村山、下栗倉に古富士火山由来の火山砂礫及び泥流層が認められる。また宝永火口でも山体の一部が確認される。古富士火山は玄武岩質溶岩及び噴火泥流が多く噴出してたが、この頃にはすでに箱根火山や愛鷹火山は活動を終えている。山頂は小御岳火山より高く、一時的に3,000mの高さまで達した可能性があるが、浸食や爆破作用により約2,700mまで低下したらしい。古富士火山はその活動末期2万4千~2万年前、1万5千~1万4千年前の少なくとも2回にわたり山体崩壊している。新富士火山は現在富士山の最新段階を形成し、1万7千~8千年前に大量の溶岩を噴出した活動を曠古とする。この溶岩は新富士火山旧期溶岩類に分類される。この旧期溶岩類はそれまでの古富士火山泥流により形成された火山麓扇状地を被覆し、さらにその裾野を拡大することになったとされる。溶岩類の層厚は50~200m程度と推定されるが、噴出口は山頂火口、北西~南東及び南方方向の割れ目噴火であったため、東側には薄く、南流した溶岩は愛鷹山の裾野を巡り御殿場~裾野~三島まで到達し、現在、三島溶岩流とも呼ばれ、富士山南東麓で流下した旧期溶岩流でも最古に位置付けられる。御殿場市内で件の溶岩流の認められるのは概ね神山、駒門、そして大野風穴付近である。この三島溶岩流と同じく玄武岩質溶岩流で旧期溶岩流であるのが裾野溶岩流Ⅰ、烟岡溶岩流で、前者は御殿場市南線に見られ、後者は玄武岩溶岩類の北東端部に認められる。約5,600~3,500年前には山頂火口・側火山の爆発的噴火や溶岩噴出期を迎える。新富士火山中期溶岩流に分類された溶岩流は裾野市・御殿場市境界付近に須山溶岩流、幕岩溶岩流が認められる。3,500~2,200年前は爆発的噴火期に位置付けられ、仙石スコリア・大沢スコリア・大室スコリア・砂沢スコリアが噴出している。特に砂沢スコリアは現在の宝永火口付近に存在したと考えられる側火口



第2・3図は土 謙一 1978「II 表層地質図」『北駿開発地域 土地分類基本調査 御殿場』
静岡県農地森林部農地企画課を参考にした。

第3図 遺跡周辺表層地質概要凡例図



第4図 周辺遺跡位置図

第1表 周辺遺跡一覧表（1）

No.	遺跡名	所在地	文化財の年代							備考
			旧石器	縄文	弥生	古墳	奈良	平安	中世	
1	萩原蛭塚	御殿場市萩原				○			○	
2	日見塚遺跡	御殿場市川島田			○	○				
3	棚宮地遺跡	御殿場市川島田						○		
4	中田遺跡	御殿場市新橋			○	○	○			
5	松ノ木田遺跡	御殿場市新橋			○					
6	長藤遺跡	御殿場市新橋			○	○				
7	日垣田遺跡	御殿場市新橋			○	○				
8	稻谷遺跡	御殿場市川島田								
9	永原追分C遺跡	御殿場市萩原					○			
10	永原追分A遺跡	御殿場市萩原				○	○	○		
11	永原追分B遺跡	御殿場市萩原				○	○	○		
12	ヒガサキ遺跡	御殿場市萩原				○				
13	大塚越前遺跡	御殿場市新橋				○	○			
14	大沢尻遺跡	御殿場市新橋				○	○			
15	静本田遺跡	御殿場市川島田			○	○				
16	大沢尻古墳群	御殿場市新橋			○					御殿場市唯一の石室
17	堀上遺跡	御殿場市新橋							○	
18	秋父宮別邸内遺跡	御殿場市東田中			○					
19	堀道遺跡	御殿場市板書			○					
20	俎遺跡	御殿場市寺塙			○					
21	北原遺跡	御殿場市神塙							○	
22	寺ノ上遺跡	御殿場市神塙			○					
23	杉名坂遺跡	御殿場市坂			○	○				
24	龜古墳	御殿場市坂			○					
25	二の岡神社遺跡	御殿場市東田中			○	○				愛宕神社境内
26	別当屋敷遺跡	御殿場市東田中			○					二の岡神社境内
27	二の岡神上遺跡	御殿場市東田中			○					
28	下がり遺跡	御殿場市萩原			○					
29	上の山遺跡	御殿場市坂			○					
30	カヌキワリ遺跡	御殿場市坂			○	○	○			
31	大野原遺跡	裾野市高山			○					
32	みなみさ官林遺跡	御殿場市寺塙			○					
33	堀クマヤ遺跡	御殿場市駒門			○	○	○			
34	宮ノ台遺跡	御殿場市駒門			○				○	○
35	閣屋塚遺跡	御殿場市駒門			○					
36	軽沢遺跡	御殿場市駒門			○					
37	陣場遺跡	御殿場市二子					○	○		
38	矢下遺跡	御殿場市二子			○					
39	浜射場遺跡	御殿場市二子			○					
40	二子丸山遺跡	御殿場市二子			○					
41	富士岡門遺跡	御殿場市小山			○				○	
42	二ノ木山遺跡	御殿場市駒門			○	○				
43	駒門風穴遺跡	御殿場市駒門			○					
44	川向遺跡	御殿場市大坂			○					
45	イシヤマミバ遺跡	御殿場市神山					○			
46	イダの塚遺跡	御殿場市神山			○				○	
47	神山牧場上遺跡	御殿場市神山			○					
48	平岩遺跡	御殿場市神山			○					
49	神山蛭塚	御殿場市神山					○			神山高内水神社境内
50	丸山遺跡	御殿場市神山			○	○				
51	南塙遺跡	御殿場市神山				○	○			
52	一本木丁子遺跡	裾野市川和田			○					
53	今里中田遺跡	裾野市今里							○	
54	今里御前森遺跡	裾野市今里			○		○			
55	櫛高遺跡	裾野市今里	○	○					○	○
56	今里遺跡	裾野市今里			○					
57	田疇沢薬山遺跡	裾野市薬山			○					
58	柳島遺跡	裾野市薬山			○					
59	金沢上川遺跡	裾野市木沢	○	○						
60	中里遺跡	裾野市薬山			○					
61	金沢手嶋山城跡	裾野市木沢						○		
62	坂下遺跡	裾野市御宿			○					
63	御宿新田遺跡	裾野市御宿			○					
64	六反田遺跡	裾野市御宿			○					
65	カラタケ遺跡	裾野市便良								
66	上丹屋敷古墳	裾野市便良原						○		土壙一部残存
67	南脇遺跡	裾野市便良			○					
68	城ヶ尾遺跡	裾野市便良			○					
69	龜山大塚・II遺跡	裾野市龜山	○	○				○	○	

第2表 周辺遺跡一覧表（2）

No.	遺跡名	所在地	文化財の年代							備考
			旧石器	縄文	弥生	古墳	奈良	平安	中世	
70	葛山大塚ヶ田遺跡	裾野市葛山	○	○						
71	葛山大塚ヶI遺跡	裾野市葛山	○	○						
72	葛山上條遺跡	裾野市葛山	○	○						
73	藤原道跡	裾野市葛山		○						
74	一色原道跡	裾野市葛山			○					
75	葛山城跡	裾野市葛山					○			裾野市史跡
76	半田荻山星数	裾野市葛山					○			埋場
77	葛山館	裾野市葛山					○			井戸・埋場
78	下条道跡	裾野市葛山	○		○					
79	宮原道跡	裾野市宮原			○					
80	中之島道跡	裾野市渕良			○					
81	西原台道跡	裾野市渕良			○					
82	松葉道跡	裾野市渕良			○					
83	上城山洪道跡	裾野市葛山	○							
84	南山I遺跡	裾野市葛山		○						

から噴出し、富士山東麓に多く堆積している。この爆発的噴火期には伊豆天城山からのカワゴ平軽石が飛来する。そして2,900年前に発生したのは富士山東麓部に大きな影響を及ぼした御殿場岩屑なだれである。古富士火山活動末期に発生した山体崩壊でも耐えた古富士火山山体が新富士火山期に大規模崩壊をおこした。これで生じた御殿場岩屑なだれ堆積物は標高1,000～500mの地域に現在も表層露出する。また、なだれ後に発生した泥流は御殿場泥流堆積物との名称で、標高500m以下の地域で御殿場岩屑なだれ堆積物を覆っている。この御殿場泥流堆積物は泥流相と河成相の2種に分類される。前者は褐色風化火山灰質、シルト質で角～亜角礫を含み、後者は砂質でシルトと粘土に乏しく、角～亜角礫を含みかつ層理が発達している。後者は特に河川沿いに多く見られ、前述の酒匂川や黄瀬川沿いに多く見られる。御殿場岩屑なだれ堆積物が降雨により浸食、御殿場泥流堆積物の泥流相もしくは河成相へ変化し、山体崩壊から200～300年間は2次泥流が発生し続けたと推定されている。これにより御殿場市域から裾野・長泉にかけての黄瀬川沿いの地域の新富士火山の旧期溶岩類は、御殿場泥流堆積物により厚く覆われるとなる。

2 歴史的環境

本項では御殿場市域における歴史的背景を述べる。第4図及び第1・2表は御殿場市南部から裾野市北部にかけての遺跡の位置及び、名称等を示している。

静岡県内には旧石器時代以降の遺跡が数多く確認されているのは周知のとおりである。人類の活動のもっとも初期である旧石器時代の遺跡は静岡県東部、特に沼津市から長泉町、裾野市にかけての愛鷹山南～東麓一带、三島市の箱根山西麓一帯に数多く存在する。近年、第二東名建設事業等により柵返道跡(55)、葛山大塚ヶII遺跡(69)、葛山大塚ヶIII遺跡(70)、葛山大塚ヶI遺跡(71)、葛山上條遺跡(72)、金沢上川遺跡(59)において旧石器時代の遺構・遺物が確認され、これらの遺跡は愛鷹山東麓に位置している。一方、箱根山西麓においては初音ヶ原遺跡、桧林A遺跡(以上、三島市谷田)、加茂ノ洞遺跡(三島市沢地)、生茨沢遺跡(三島市竹倉)等、県内でも著名な遺跡が多い。翻って御殿場市内を見てみると、旧石器時代の遺跡は現時点未確認である。市域の大半は富士山東麓に位置するため、古～新富士火山由来の噴出物等の厚い堆積により未発見という可能性もある。また御殿場市東縁に延びる箱根山西麓では、開発が少ないとにより遺跡自体の発見例が少ないと理由もある。従って今後、御殿場市域において旧石器時代の人々の生活の営みが発見される可能性を指摘しておく。よって現時点において御殿場市域における我々の先祖の営みを窺わせる資料は縄文時代以降のものである。

縄文時代の遺跡は御殿場市域でも箱根山西麓に多く見受けられる。二の岡神社遺跡(25)、二の岡水上遺跡(27)、宮ノ台遺跡(34)、関屋塚遺跡(35)、矢下遺跡(38)、浜射場遺跡(39)、二子丸山遺跡

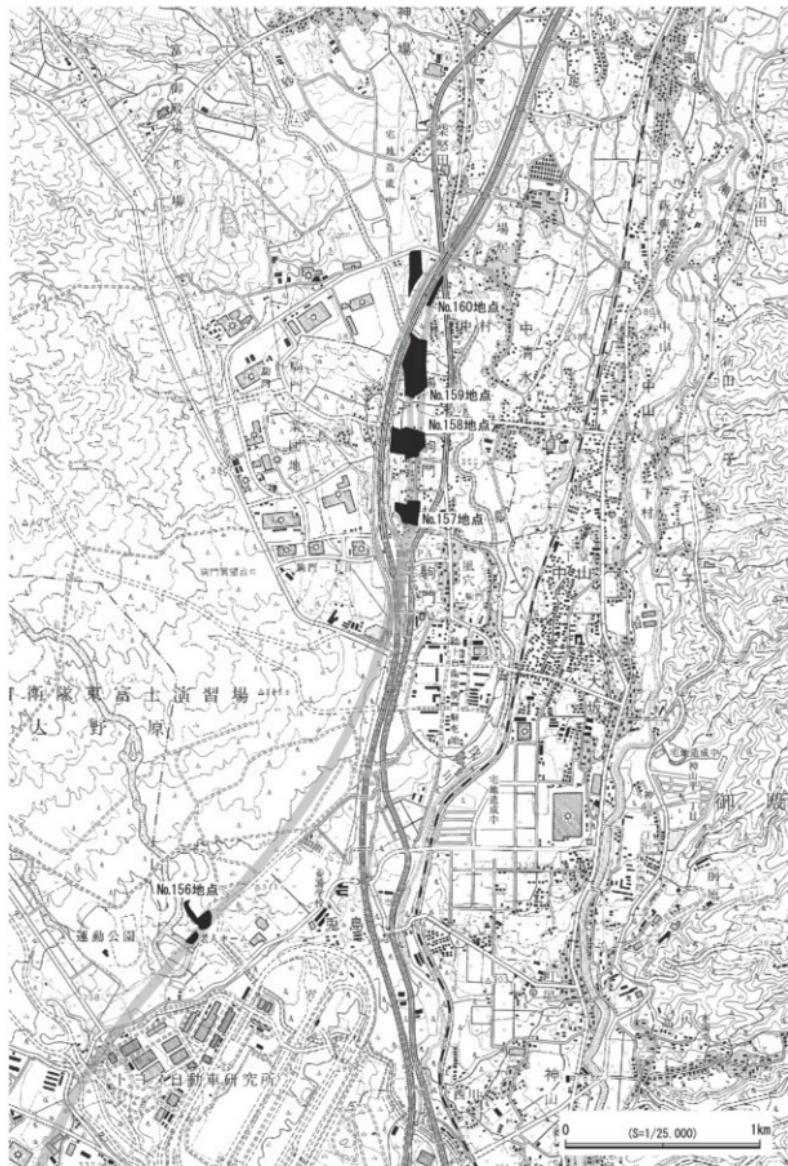
(40)、駒門風穴遺跡(43)、川向遺跡(44)、イザロ塚遺跡(46)、神山牧場上遺跡(47)、平岩遺跡(48)、丸山遺跡(50)等は縄文時代の遺跡とされる。関屋塚遺跡(35)は昭和53年の国道246号線バイパスの建設に伴い発掘調査が行われ、縄文時代晚期の土器・石器が出土している。前項で述べた新富士火山噴出物のうち、砂沢スコリア層の直上層中の出土で、県内でも稀有な晚期資料として知られる。この関屋塚遺跡及び宮ノ台遺跡は新富士火山旧期溶岩流である畠岡溶岩流を基盤とする舌状に突き出した地形に位置する。なお周辺遺跡位置図外、御殿場市深沢地区内には山ノ神遺跡、馬ノ背遺跡、丸岳遺跡、永尾東遺跡等、箱根山西麓に位置する縄文時代の遺跡が点在しており、御殿場市域東縁部にあたる箱根山西麓一帯に未発見の遺跡がある可能性を否定できない。

御殿場市内における弥生時代の遺跡は、馬見塚遺跡(2)、秩父宮別邸内遺跡(18)、堀田遺跡(19)、別当屋敷遺跡(26)、下がり遺跡(28)、みなそう官林遺跡(32)等が知られる。御殿場市深沢の永尾遺跡は箱根山西麓裾部に位置する集落遺跡で、弥生時代後期の焼失住居跡が確認されている。付近には秩父宮別邸内遺跡や堀田遺跡、別当屋敷遺跡等弥生時代の遺跡が比較的多い。一部湿地化していた御殿場市便船塚付近を水田として利用するためか。秩父宮別邸遺跡出土の壺は中期後半であるため、中期代の生業エリアの確定が今後なされよう。一方、新富士火山旧期溶岩流上のみなそう官林遺跡では有孔磨製石鎌が出土しているのも注目される。水田耕作に不向きな場所への人々の進出を窺わせる。

古墳時代の遺跡として、馬見塚遺跡(2)、中田遺跡(4)、松ノ木田遺跡(5)、大沢原古墳群(16)、俎遺跡(20)、寺ノ上遺跡(22)、竈古墳(24)、二の岡神社遺跡(25)、上の山遺跡(29)、堀ウマヤ遺跡(33)、軽沢遺跡(36)等が散見される。中田遺跡は御殿場市内で初めて発掘調査がなされた遺跡で、古墳時代の集落遺跡が確認されている。また市内で唯一石室が確認されているのは大沢原古墳群(16)である。江戸期からその存在を知られていた後期古墳群で、御殿場南高校郷土研究部により横穴式石室や埴丘の測量調査がなされている。

奈良時代から平安時代の遺跡は御殿場市街地での発見が多くなってくる。欄宣地遺跡(3)、長瀬遺跡(6)、日垣田遺跡(7)、永原追分C遺跡(9)、永原追分A遺跡(10)、永原追分B遺跡(11)、ヒガキ田遺跡(12)、大塚越遺跡(13)、大沢原遺跡(14)、浄日本田遺跡(15)等、御殿場市中心部付近にあたる新橋、萩原等に古代に比定される遺跡が出現する。特にJR御殿場駅南側に位置し、集落遺跡として知られる永原追分A～C遺跡では、墨書き土器・刻書き土器が出土している。そもそも御殿場市付近には平城京から東国を結ぶ官道である東海道が設けられ、御殿場市から小山町にかけての何処かに横走駅が設けられており物流の要衝であったといえる。横走駅は「日本三代実録」貞觀6年12月10日条を初見とし、菅原孝標女の「更級日記」には「…横走の間のかたはらに、岩壺といふ所あり…」との記載が知られる。「更級日記」における「横走の間」が11世紀代における駅家の後身で、「岩壺」が國天然記念物の駒門風穴を指すとの考え方から、御殿場市駒門の関屋塚付近に駅・閘を求める意見がある。そもそも横走駅には駅馬20疋、伝馬5疋が配備されており、相模国に向かう足柄峠、及び甲斐国への籠坂峠越えを想起すれば、重要な交通の分岐点であったことが想起される。現在、駅や古代東海道の遺構の確認には至っていないが、今後の調査に期待される。また、この地域には伊勢神宮の大沼鮎津御厨が置かれている。嘉祥3年7月29日神宮領注文に記載されたといわれる御厨のひとつで、田数は2町5反180歩あったらしい。御殿場市新橋鮎津神社付近か。

中世の遺跡としては、萩原経塚(1)、永原追分A遺跡(10)、永原追分B遺跡(11)、堀上遺跡(17)、北原遺跡(21)、宮ノ台遺跡(34)、富士岡駅遺跡(41)、イザロ塚遺跡(46)、神山経塚(49)が周辺に位置する。この御殿場市域は、古代に引き続き駿河国と相模国を結ぶ主要な交通路である足柄街道が機能し、政治・経済・軍事の各面で重要な位置を占め、当地方は鎌倉幕府との関係が深い大森氏、葛山氏所縁の地で知られる。葛山城遺跡(75)、半田萩田屋敷(76)、葛山館(77)が裾野市葛山に位置する。



第5図 確認調査実施地点位置図

葛山氏は駿河国の今川氏に従属する形をとり駿東郡の支配権を確立していたが、当該地域は立地的に甲斐国・武田氏、相模国・北条氏の攻勢の舞台となり、小山町足柄城跡、御殿場市深沢にある深沢城跡等古文献に名を残す城跡も少なくない。

以上、各時代の遺跡を概観したが、殆どの縄文時代遺跡は御殿場泥流により箱根山西麓での確認に留まるため、その時代の様相は判然としない。しかし弥生時代以降新橋、萩原、また深沢にかけて遺跡の増加が認められるため、大沼とも呼ばれた湿地帯等を生活基盤に取り込んだ結果とも考えられる。一方、御殿場市域でも南半部では箱根山西麓、黄瀬川沿いに遺跡は認められるも、新富士火山旧期溶岩類や縄文時代晚期の御殿場泥流等の堆積の影響も相俟って、人々の大規模な生活基盤の構築には時間を要したものと推定される。

第3節 調査・整理の体制・方法・経過

1 確認調査の対象地点

御殿場市南部における第二東名高速道路の計画路線及び確認調査対象地点は第5図に示す。愛鷹山東麓を東名高速道路と並行して北上する計画路線は、裾野市今里付近より北北東～北東へ緩くカーブを描き始める。東名高速道路も裾野市金沢から裾野インターチェンジ付近は緩く北東へカーブを描くが、裾野市北端から北へ延伸し、駒門パーキングエリアに至る。計画路線はこの駒門パーキングエリア南側で東名高速道路と交差し、東名高速道路の東側を北へ並進する。そして御殿場市駒門から神場にかけて東名高速道路と鋭角に接続し、ジャンクションとなる。御殿場市域における第二東名高速道路の計画路線は御殿場市神山からこの御殿場ジャンクションまでの距離約4kmである。この計画路線内は自衛隊東富士演習場や駒門工業団地に接し、また駒門付近にて農地・住宅地として利用されていた。路線の殆どが新富士火山の旧期溶岩流に由来する地形であり、南東～東へ傾斜する地形である。しかし駒門では部分的に砂礫質堆積物と件の溶岩流との地形の転換点が目視できる。

この計画路線内における確認調査を要すると判断された地点は、周知の埋蔵文化財包蔵地や、平成10年11月に実施された御殿場市教育委員会担当者による踏査結果等の検討によるものである。御殿場市域における計画路線内で確認調査を要する地点は5箇所を数え、地点名はNo.156～160地点とされた。

2 調査体制

御殿場市域における確認調査と本発掘調査は平成11～15・20・24年度に実施された。そのうち平成20年度までは財團法人静岡県埋蔵文化財調査研究所が調査を行い、平成24年度は静岡県埋蔵文化財センターが実施している。調査体制は第3表の通りである。なお調査拠点は沼津現地事務所及び三島整理事務所、長泉地区事務所等が充てられ、担当職員が現地にて調査に従事した。なお静岡県教育委員会・財團法人静岡県埋蔵文化財調査研究所、日本道路公团静岡建設局の三者により協議で、現地調査終了後に資料整理・報告書刊行へ移行する事が合意されていた。遺物洗浄や写真整理等については、基礎整理作業として事務所にて実施されている。

3 調査の方法と経過

確認調査の方法は、近接地にて過去調査された際に記録された土層の堆積状況を参考とした。御殿場工事区における計画路線の大部分は新富士火山旧期溶岩流上に設定されているため、裾野工事区までの愛鷹山・箱根山麓で見られる旧石器時代～縄文時代に位置付けられる休場層、スコリア層や黒色帶とは

様相の異なる土層、及び埋没地形を示すことを予め想定し、試掘坑（TP：テストピット）の掘削位置と掘削基数を決定している。試掘坑は2～5m四方で、表土付近は重機掘削で掘削した後、人力掘削・精査へと作業を移行している。土層の堆積状況は図面・写真（6×7モノクロ・6×7カラーリバーサル・35mmネガカラー）等で記録した。また現地の状況により工事立会も併せて行っている。本調査は以上の確認調査の結果を受け、表土は基本的に重機で掘削し、包含層等は人力で掘削した。遺物の取り上げ等はトータルステーションを用い、株式会社シン技術コンサルの「遺跡管理システム」上でデジタルデータとして保存した。土層堆積状況や遺物出土状況は図面・写真等で記録している。なお各地点の調査では掘削業務委託、測量業務委託を行っている。

これら現地における各調査は第4表の通りである。確認調査は平成11年度からNo.156地点に着手し、平成12年度にはNo.157～160地点が実施された。No.159地点では確認調査と本調査が同時に実施されている。このNo.159地点の宮ノ台遺跡は第3章で詳細を記載する。またNo.156地点は確認調査で終了したが、掘削範囲の規模が大きいことから、特に第2章として詳細を記録する。

4 資料整理の方法と経過

資料整理及び報告書作成は第二東名沼津工区として体制を組んでいる。基礎整理作業は平成11～15、20年度に現地における確認調査、本発掘調査と並行して実施した。また平成24年度のNo.159地点の本発掘調査では現地にて遺物の洗浄・注記作業や記録類の整理を掘削委託業者が実施している。資料整理は平成25年4月より着手した。出土遺物は接合・復原を経て、実測・トレース・版組作業に着手した。石器の中でも黒曜石製石器については、独立行政法人沼津工業高等専門学校名誉教授望月明彦氏に産地同定を依頼した。遺構図版は図面及び現地で得たデジタルデータをAdobe Illustrator CS 3に取り込み、編集して作成した。それと並行して遺物写真撮影や写真図版作成を実施した。遺物と記録類の版組終了後に編集作業を行っている。また報告書の作成とともに、収納作業も実施している。

第3表 調査・資料整理体制一覧表

職名		平成11年度	平成12年度	平成13年度	平成14年度	平成15年度	平成20年度	職名		平成24年度	平成25年度
所長兼副理事長	齋藤 忠	齋藤 忠	齋藤 忠	齋藤 忠	齋藤 忠	齋藤 忠	齋藤 忠	所長	勝田順也	勝田順也	勝田順也
所長兼常務理事								次長兼総務課長	八木利興	南谷高久	
副所長兼理事				山下 晃	飯田英夫	飯田英夫		主幹兼事業係長	前田雅人	前田雅人	
副所長	山下 晃	山下 晃						主幹兼総務係長	大坪淳子	大坪淳子	
常務理事兼総務部長	伊藤友雄	伊藤友雄	余田徳幸	余田徳幸	余田徳幸	余田徳幸		担当係長	鶴見やこ	鶴見やこ	
担当	次長兼総務課長							主査	青木 修	青木 修	
	他務課長	杉木敏雄	本村昭一	本村昭一	鶴見美巳			副主任	鶴野太輔	鶴野太輔	
	次長兼事業係長							調査課員	中林賀治	中林賀治	
	経理専門員	鶴見保幸	鶴見保幸	鶴見保幸	鶴見保幸	鶴見保幸		担当係員	溝口彰啓	溝口彰啓	
	総務係長	田中雅代	田中雅代	山本広子	山本広子	山本広子	山内小百合	指導主事	大谷 隆		
調査研究室(調査課)	会計係長	大橋 真	大橋 真	大橋 真	大橋 真	野崎尚紀	柳山和枝	主査		勝又直人	岩崎じのぶ
	副主任			鈴木秀幸	鈴木秀幸			常勤職員	水谷慧記	浜谷川智也	
	主事	鈴木秀幸						主査(保存処理)	大森信弘	大森信弘	
	課長	佐藤達雄	佐藤達雄	佐藤達雄	佐藤達雄	佐藤達雄	佐藤達雄	実施内容	本調査	整理作業	
	次長	佐野五十三	及川 司	栗野克巳	栗野克巳	栗野克巳	栗野克巳				
調査研究室(調査課)	担当課長	及川 司	及川 司	中嶋郁夫	中嶋郁夫	中嶋郁夫	及川 司				
	工区主任	前嶋秀雄	前嶋秀雄	前嶋秀雄	前嶋秀雄	前嶋秀雄	前嶋秀雄				
	望月由佳子	望月由佳子	望月由佳子	鈴木秀樹	鈴木秀樹	鈴木秀樹	木崎道昭				
	調査研究員(調査員)	岩名達太郎	日高直樹		後藤正人						
	保存処理主任調査研究員	西尾太加二	西尾太加二	西尾太加二	西尾太加二	西尾太加二	西尾太加二				
実施内容		確認調査	確認調査	確認調査	確認調査	本調査	本調査				



土器接合作業



土器実測作業



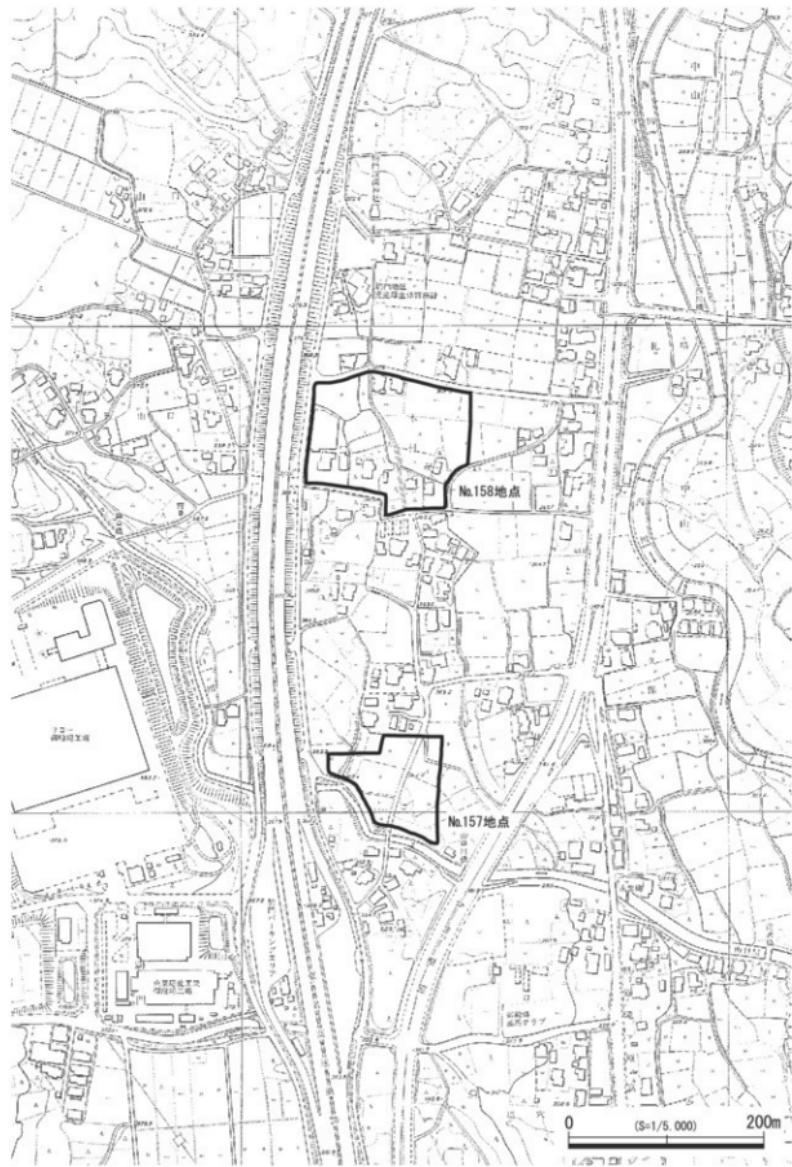
石器図版作成作業



遺構図版作成作業

第4表 現地調査・資料整理期間一覧表

地点名	平成11年度												平成12年度												平成13年度													
	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3		
156										---																												
157																						---																
158																																					---	
159																						---																
160																						---																
地点名	平成14年度												平成15年度												平成20年度													
	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3		
159			---																			---																
地点名	平成24年度												平成25年度												現地調査期間													
	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	資料整理期間													
159																																					-----	



第6図 No.157・158地点調査範囲位置図

第4節 各確認調査地点の結果

第二東名高速道路建設事業における御殿場市域の確認調査を要する地点は、№156～№160地点の5箇所である。地点毎に概要を述べる。

1 №156地点

確認調査は平成11年2月から着手された。当該地点は確認調査のみで終了したが、特に章を設けて詳細を述べる。第2章を参照されたい。

2 №157地点

(1) 調査地点の立地

№157地点は御殿場市駒門字下ノ田に位置し、標高約360～365m付近である。東名高速道路駒門パーキングエリア（下り線）北側、JR御殿場線富士岡駅から南西へ約0.8kmに所在する。調査箇所は黄瀬川の一支流である西川により形成された氾濫原の中で、表層地盤は泥砂礫質である。調査地点周辺は水田と畑地として利用されていた。№157地点の東方約250mには、奈良・平安時代の遺物が出土したとされる一ノ木戸遺跡が周知されている。ただし、この遺跡の立地は西川の氾濫原と沖積世溶岩類で構成される丘陵部の境界付近であるのを特徴とする。

(2) 調査の時期と方法

調査対象地内に3m×3mのテストピットを3箇所（TP 1～3）設定した。バックフォー及び人力で掘削し、遺構と遺物の有無を人力により精査した。

(3) 遺構・遺物の確認状況

確認調査の結果、3箇所のテストピットからは、遺構・遺物を確認できなかった。

(4) 結果

№157地点は遺構・遺物共に確認できないことから、本発掘調査対象外とした。

3 №158地点

(1) 調査地点の立地

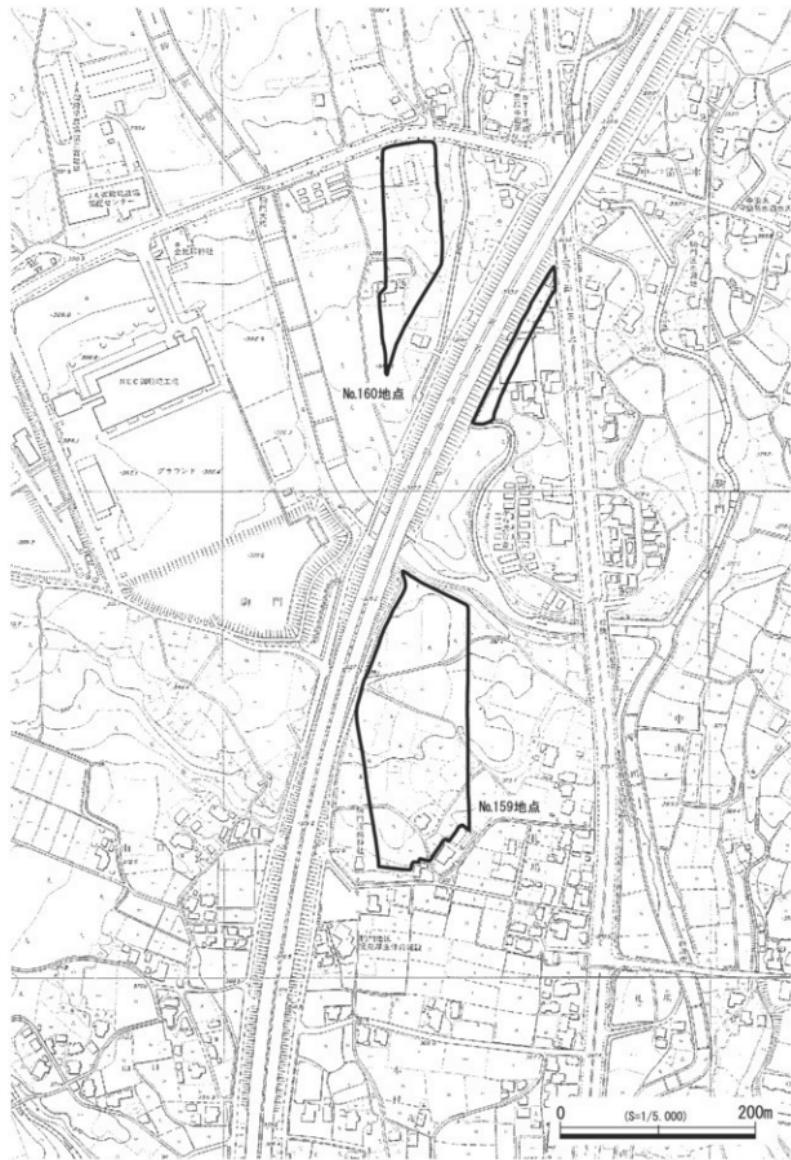
№158地点は御殿場市駒門字本村に位置し、標高365～370m付近である。JR御殿場線富士岡駅から西へ約0.9kmに所在する。調査箇所は黄瀬川の一支流である西川により形成された氾濫原の中で、表層地盤は泥砂礫質である。また一帯には西川による段丘面が認められる。この調査地点の範囲は、弥生時代以降に離水したものと推定される上位段丘面から、奈良時代以降に離水したものと推定される中位段丘面を含む。当該区域は水田と畑地、また宅地として利用されていた。

(2) 調査の時期と方法

平成12年11月に確認調査を、平成14年2月には工事立会を実施した。確認調査では中位段丘面に該当する箇所が調査対象地となった。調査対象地内に3m×3mのテストピットを4箇所（TP 1～4）、2m×20mのトレンチを1箇所設定した。バックフォー及び人力で掘削し、遺構と遺物の有無を人力により精査した。工事立会は上位段丘面に該当する箇所で、同規模のテストピットを2箇所掘削している。

(3) 遺構・遺物の確認状況

平成12年確認調査ではトレンチから中近世の円形土坑を3基確認したが、遺物は出土しなかった。また平成13年度の工事立会では厚い御殿場泥流層により遺構・遺物ともに未確認である。また泥流層より



第7図 No.159・160地点調査範囲位置図

上位層は造成により大きく攪乱を受けていた。

(4) 結果

No.158地点は残存状況が劣悪と判断したことにより、本発掘調査対象外とした。

4 No.159地点

確認調査は平成12年6月から着手された。当該地点は平成12年12月から本発掘調査にも着手し、多くの縄文土器が出土した。詳細は第3章を参照されたい。

5 No.160地点

(1) 調査地点の立地

No.160地点は御殿場市駒門字カラ沢に位置し、標高385～390m付近である。JR御殿場線富士岡駅から北西へ約1.2kmに所在する。調査箇所一帯の地質は低位段丘堆積物（疊層）で構成され、東側に黄瀬川の一支流である西川、南側に砂沢川が流れている。調査地点周辺は宅地、畠地として利用されている。遺跡から東に約1kmにカヌキワリ遺跡、西にみなぞう官林遺跡が位置しているが、詳細は不明である。

(2) 調査の時期と方法

平成12年8月に確認調査その1、同年9月に確認調査その2を実施した。確認調査その1では3m×3mのテストピットを1箇所(TP 1)、確認調査その2では調査対象地内に同規模のテストピットを3箇所(TP 2～4)設定した。バックフォー及び人力で掘削し、遺構と遺物の有無を人力により精査した。

(3) 遺構・遺物の確認状況

確認調査の結果、4箇所のテストピットからは、遺構・遺物を確認できなかった。

(4) 結果

No.160地点は遺構・遺物ともに確認できないことから、本発掘調査対象外とした。



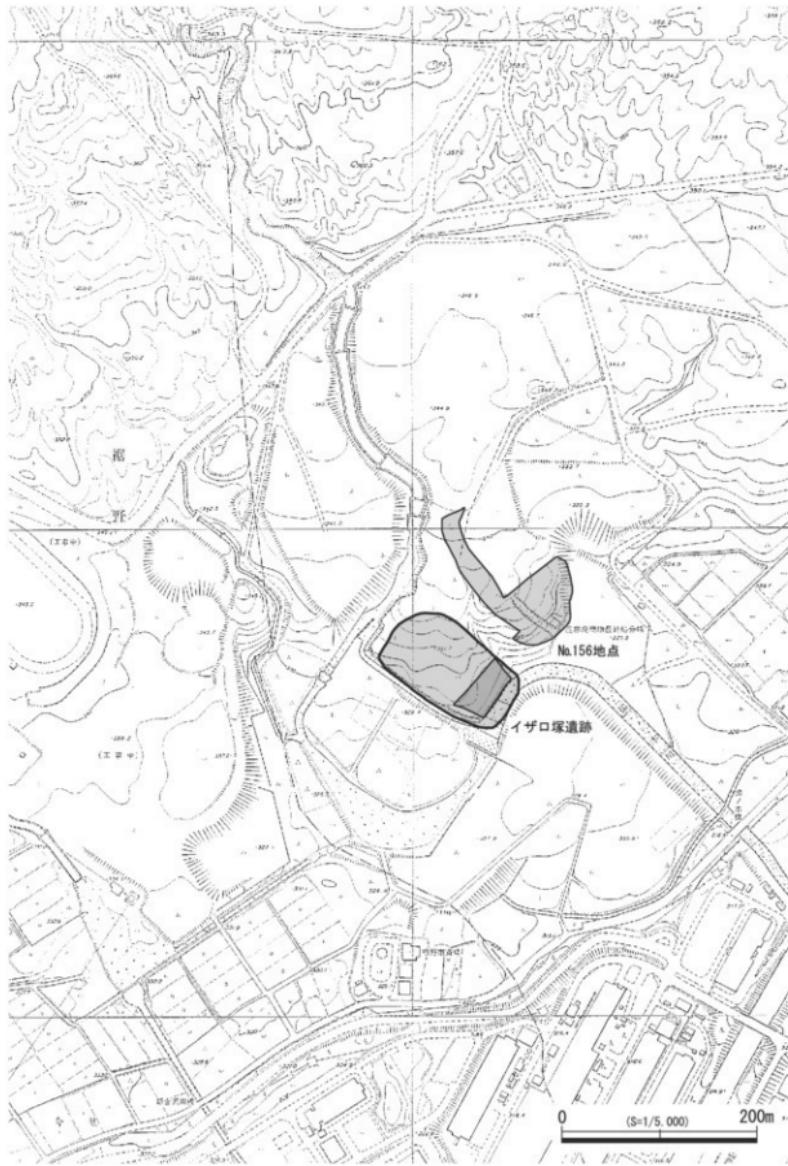
No.159地点TP 2



No.160地点TP 1



No.160地点TP 3



第8図 No.156地点とイザロ塚遺跡相関図

第2章 イザロ塚遺跡（No.156地点）

第1節 イザロ塚遺跡の概要

1 イザロ塚遺跡の位置

イザロ塚遺跡は、御殿場市神山字大野原に位置し、標高約325～340m付近である。遺跡は東名高速道路裾野インターチェンジから北へ約1.8km、JR御殿場線富士岡駅から南西へ約3.2km、岩波駅から北西へ約2.9kmに所在する。裾野市との市境まで200mもない。

遺跡一帯は第2・11図に示したように富士火山噴出物である玄武岩溶岩類で構成された火山性の丘陵地形である。遺跡は、三島市街地まで流下した新富士火山の旧期玄武岩溶岩である大野原（三島）溶岩流上に位置するが、この溶岩流より時期的に後出すると考えられる裾野溶岩流Iとの境界に近い。遺跡は溶岩流端部が突き出して、半島状をなす箇所にあり、周縁を沢が巡る。この川は降雨時以外に水の流れない枯れ川（水無川）という。当該遺跡では昭和34年に縄文時代早期の土器や磨石の出土が報告されている。昭和45年の静岡県埋蔵文化財包蔵地調査の段階で、遺物出土地点が川床となってしまったことが報告されているが、依然遺物が埋蔵されている可能性が指摘された。遺跡周囲は自衛隊の演習場として一帯が利用されてきたが、自動車製造関連施設や市営公園、福祉施設等が設置されるなど、開発による地形の改変が進んでいる。旧地形図上では遺跡が位置する大野原は南東方向へ標高を減じ、溶岩流独特の複雑な凹凸のある地形を呈するが、標高320m付近より平坦な地形を示す。旧地形図には、遺跡西側に塚状を呈する地形が見える。本章で触れるイザロ塚遺跡は南へ突き出した尾根状地形の先端部付近に位置する。第11図の地質でも理解できるように、遺跡付近の三島溶岩流は遺跡付近で少し突き出しているため、裾野溶岩流Iの流出時には、当該個所を溶岩流が迂回するようになっていたのであろう。裾野溶岩流Iの流出以前の地形は、起伏の激しい丘状の地形が続いていたかもしれない。

遺跡東方を流れる黄瀬川及びその支流である久保川沿い一帯の地域は、縄文時代晩期の富士火山の山体崩壊に由来する御殿場泥流堆積物が溶岩流上に厚く堆積しており、晩期以前の遺跡が埋没している可能性も想起される。

2 イザロ塚遺跡周辺の遺跡

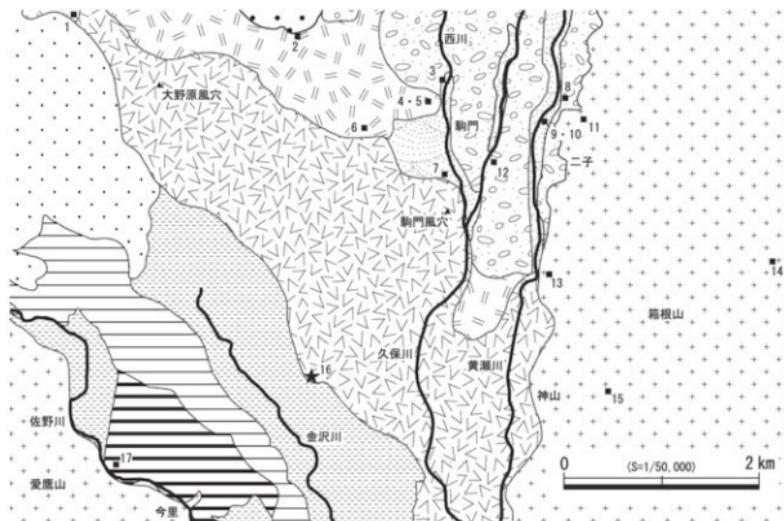
イザロ塚遺跡は、先述のとおり昭和34年に縄文土器や石器が発見されたことにより、縄文時代の遺跡として知られている。このイザロ塚遺跡は溶岩流上に立地するも、溶岩流同士の境界付近に位置し、地形の転換点にある。縄文時代の遺物が確認されている遺跡は閑屋塚遺跡・宮ノ台遺跡・神山牧場上遺跡・矢下遺跡・川向遺跡である。縄文時代草創期の遺物は市内では未発見であるが、裾野市富沢内野山I西遺跡では草創期前半の隆帶文土器が出土している。また草創期の可能性がある有舌尖頭器も裾野市内において散見されるが、いずれも愛鷹山東麓での発見であり、裾野市今里地区より北側の溶岩流上の遺跡では未発見である。御殿場市内では縄文時代早期の遺跡が現時点で最古に位置付けられる。第1章でも述べたように、採集資料や不時発見資料が多く判然としない例が多い。宮ノ台遺跡では畠岡溶岩流直上の黒色土層中に早期代の土器の出土が見られる。また神山牧場上遺跡では縄文時代早期末の木島式の出土が伝えられている。この標高405m付近で確認された遺跡である。矢下遺跡では中期代の土器群が出土している。駒門の閑屋塚遺跡や宮ノ台遺跡では晩期の土器・石器が出土している。今里薬師海道遺跡では晩期の安行式の出土が伝えられている。これら晩期の遺跡は約2,900年前の御殿場泥流の影響を



第9図 イザロ塚遺跡位置図



第10図 イザロ塚遺跡周辺旧地形図



【遺跡】

- 1 大野原遺跡 2 みなぞう官林遺跡 3 軽沢遺跡 4 開屋塚遺跡 5 宮ノ台遺跡 6 堀ウマヤ遺跡 7 一ノ木戸遺跡
8 陣場遺跡 9 矢下遺跡 10 浜射場遺跡 11 二子丸山遺跡 12 富士岡駅遺跡 13 川向遺跡 14 イシャスミバ遺跡
15 神山牧場上遺跡 16 イザロ塚遺跡 17 一本杉下遺跡

【凡例】



第11図 イザロ塚遺跡周辺地質図

受けていない。また神山牧場上遺跡は箱根山西麓上に位置し、矢下遺跡は河床部に位置する。御殿場泥流に覆われた区域での縄文時代遺跡は判然としない。

弥生時代の遺跡としてはみなぞう官林遺跡、堀ウマヤ遺跡が確認されている。みなぞう官林遺跡・堀ウマヤ遺跡では有孔磨製石器が出土しているのみで、土器等の居住の痕跡は見いだせていない。

古墳時代以降の遺跡もいくつか確認されている。イシャスミバ遺跡では土師器壺の出土が伝えられる。陣場遺跡では平安時代以降と推定される土器が出土している。烟岡溶岩流上に位置する裾野市大野原遺跡は歴史時代以降の墓が確認されている。

第2節 調査の体制・経過

当該遺跡の調査は平成11年2月9日から着手された。調査対象地内の下草刈り、仮設駐車場の碎石敷き均し作業を行った後、資機材を搬入した。2月10日にはバックフォー（BF0.1）による掘削を開始した。この際、掘削深度が地表面より3m以上となることが判明した。これを受けトレンチ調査から確認面積の確保等を目的とするテストピット（TP）調査に変更した。テストピットは5m×5mとした。重機掘削が終了した2月14日より人力掘削を実施した。範囲は3m×3mである。この時点でTP1～6を設定したうち、TP1では地表4m以下まで重機掘削を試みているが、溶岩層まで到達せず掘削を断念した。人力掘削による排土は重機を用い、場内処理を実施している。2月16日には殆どTPでの人力掘削が終了した。南西側の調査区に新たにTP7～11を設定するため、草刈りを実施。TP設定後に重機による掘削を開始した。2月21日には人力掘削を開始したが、効率化のため一部のTPでは新たにバックフォー（BF0.45）を投入している。3月1日から調査区内の写真撮影のため準備作業に着手、順次写真撮影を実施している。これまでの間にTP内土層図を記録し、3月4日には全ての作業を終了し、資機材の撤収作業に着手、3月8日に埋め戻し作業、3月9日に完全に撤収した。

第3節 調査の成果

1 調査区の概要

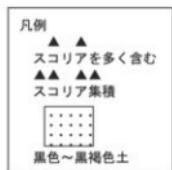
調査対象は本線部分と本線下位に延びる工事用道路である。付近の本線は北東方向へ延び、沢付近は橋となるため、調査対象地内に橋脚部が設置される。また工事用道路は東側から本線の下位を抜け、カーブを描きながら北上する。調査対象は工事用道路が位置する北区と小さな沢を隔てたイザロ塚遺跡の包蔵地範囲東端にあたる南区に分かれている。調査区の凡そ位置は北緯35度14分6秒、東経138度53分56秒である。

2 基本土層

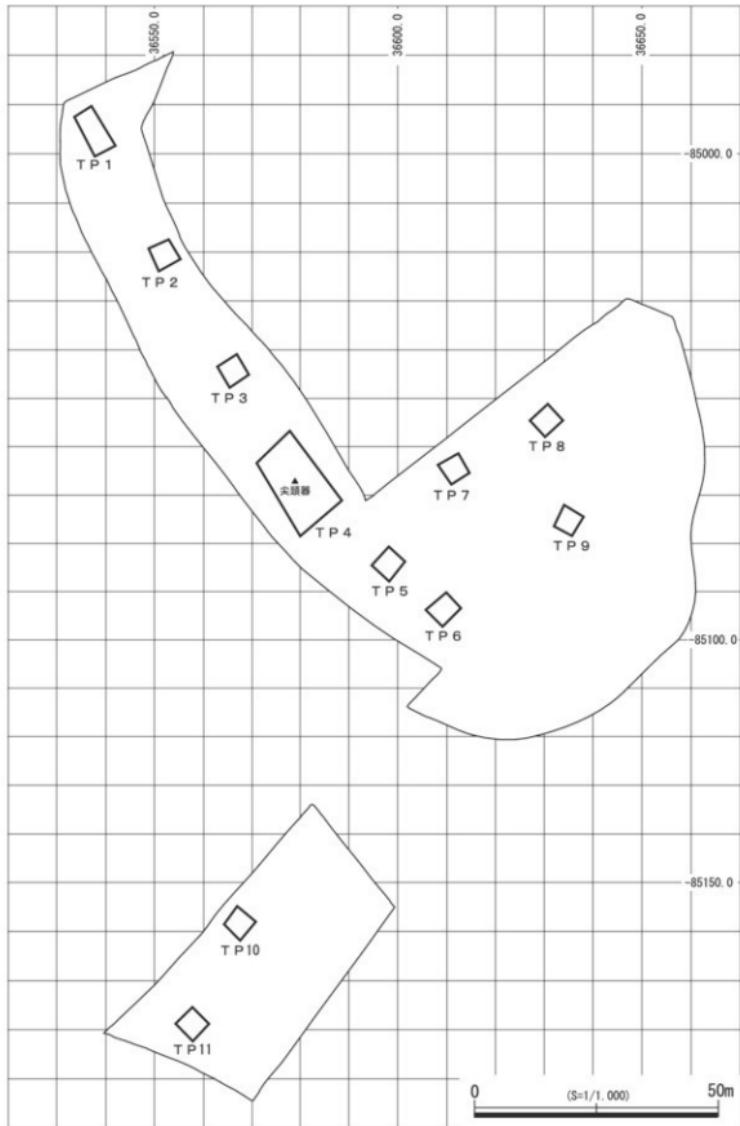
第12図は基本土層図である。TP1及びTP5で観察された土層堆積状況をもとに作成している。土層は1から26層まで分層され、それぞれ富士山噴出物に由来するスコリアが多く見られる。

第1層は表土である。TP3では盛土が認められた。黒色を呈する。10YR1.7/1と墨汁の黒に近い色調である。第2層は黒褐色土層である。赤色スコリアが僅かに認められる。第3層はスコリア帶である。橙色スコリアの径は6～8mm程度である。第4・5～7層まで固く締まった土層で、後者は通称「フジマサ」と呼ばれる。第4層は黒褐色土層で径3～5mm程度の橙色スコリアが含まれる。第5～7層まではスコリア層で橙色・黒色・茶色・灰色スコリアが集積する。これら第4～7層は第3章で触れる宮ノ台遺跡における縄文時代晩期代の遺物包含層と同一と推定される。第8層は砂沢スコリア層である。径1～15mm程度の橙色・灰色スコリアが集積しているが、乾燥すると白色に近くなる。スコリア同士が接着することなく、崩れやすい。第9層は黒色土で、カワゴ平バミスを含む。第10層は仙石スコリア層である。径8～15mm程度の茶色スコリアで、粒子が大きい。第11層は赤色・茶色スコリアが多い。第12層は第11層と分層できない箇所が多い。第13層は赤色・茶色スコリアが多い。第14層は黒褐色土層である。スコリアはあまり含まない。第15層は黒褐色土と橙色スコリアが堆積する。第16・17層は黒褐色土層である。第17層が第16層と比較して僅かに黄色を帯び、スコリアを含まないことから分層されている。第

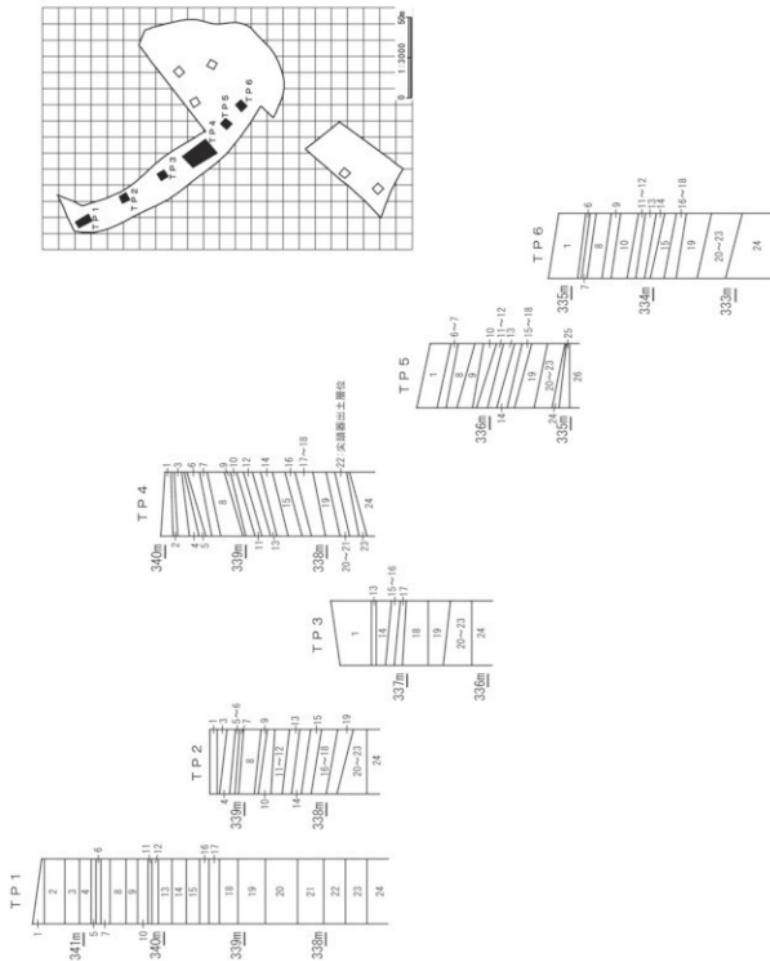
	1	黒色土	10YR1.7/1	表土
	2	黒褐色土	10YR2/2	赤色スコリアが極少量含む
	▲▲3▲▲	スコリア帯	10YR3/3	暗褐色土と橙色スコリア
341m	▲▲4▲▲	黒褐色土	10YR3/4	発色が悪い 固い
	▲▲5▲▲	スコリア層	10YR3/3	フジマサ・灰マサ 固い
	▲▲6▲▲	スコリア層	10YR3/4	フジマサ・黄マサ 固い
	▲▲7▲▲	スコリア層	10YR3/3	フジマサ 固い
	▲▲8▲▲	スコリア層	7.5YR3/3	砂沢スコリア
	9	黒色土	10YR1.7/1	カワゴ平バミスを含む
	▲▲10▲▲	スコリア層	10YR2/1	仙石スコリア
	▲▲11▲▲	スコリア帯	10YR1.7/1	赤色・褐色スコリア等
340m	...12...	黒色土	10YR1.7/1	部分的に堆積
	▲▲13▲▲	スコリア帯	10YR1.7/1	赤色・褐色スコリア等
	14	黒褐色土	10YR2/2	黒色～暗褐色へ漸移的な層
	▲▲15▲▲	スコリア帯	10YR2/2	黒褐色土と橙色スコリア
	16	黒褐色土	10YR2/2	
	17	黒褐色土	10YR2/2	16層と比較してやや黄色を帯びる
	18	黒～黒褐色土	10YR1.7/1～2/2	
339m	19	褐色土	10YR4/4	愛鷹山麓で云う栗色土層か
	20	黒褐色土	10YR2/2	愛鷹山麓で云う富士黒土層か
	▲▲21▲▲	黒褐色土	10YR2/2	愛鷹山麓で云う富士黒土層か
338m	▲▲22▲▲	スコリア帯	10YR3/4	赤色・橙色・茶色等のスコリア
	▲▲23▲▲	黒褐色土	10YR2/3	橙色スコリア等含む 固い 愛鷹山麓で云う富士黒土層か
	▲▲24▲▲	スコリア層	7.5YR4/6	赤色・橙色・茶色スコリア等 固い
	▲▲25▲▲	スコリア層	10YR4/6	赤色・橙色・茶色・黒色スコリア等 固い
337m	▲▲26▲▲	スコリア層	7.5YR5/8	赤色・橙色・茶色スコリア等 固い



第12図 イザロ塚遺跡基本土層図



第13図 イザロ塚遺跡テストピット配置図



第14図 イザロ塚遺跡土層柱状図（1）

18層は第16・17層と比較して黒色が強い。スコリアは同層の下位に大粒のスコリアが散見される。第19層は褐色土層である。愛鷹山麓で云う栗色土層に対比される層か。第20～23層は愛鷹山麓で云う富士黒土層に対比される層か。それぞれスコリアの含有等で分層される。愛鷹山麓等における富士黒土層では縄文時代草創期以降の遺物を包含するが、主体は縄文時代早期以降と考えられる。富士黒土層の堆積開始年代は約10,500年前（上杉他1986）とも、CalBC8,000頃（山元他2005）とも推定されている。第24～26層はスコリア層である。いずれも固い層である。第25層は黒色スコリアが多いものの、乾燥が進むと全体的に白色に近くなる。第25層より下位に三島溶岩流を構成する溶岩層が認められる。三島溶岩流の流下年代は放射性炭素年代測定により $10,100 \pm 60$ yrBP（山元他2005）と考えられており、縄文時代草創期に比定される。

3 各テストピットの土層堆積状況

第13図にテストピット（TP）の配置図、第14・15図にはTP毎の土層柱状図を集成した。TPは北側区に9基、南側区に2基設定、掘削している。第14図はTP 1～TP 6まで南北列、第15図はTP11～TP 8までの土層柱状図である。

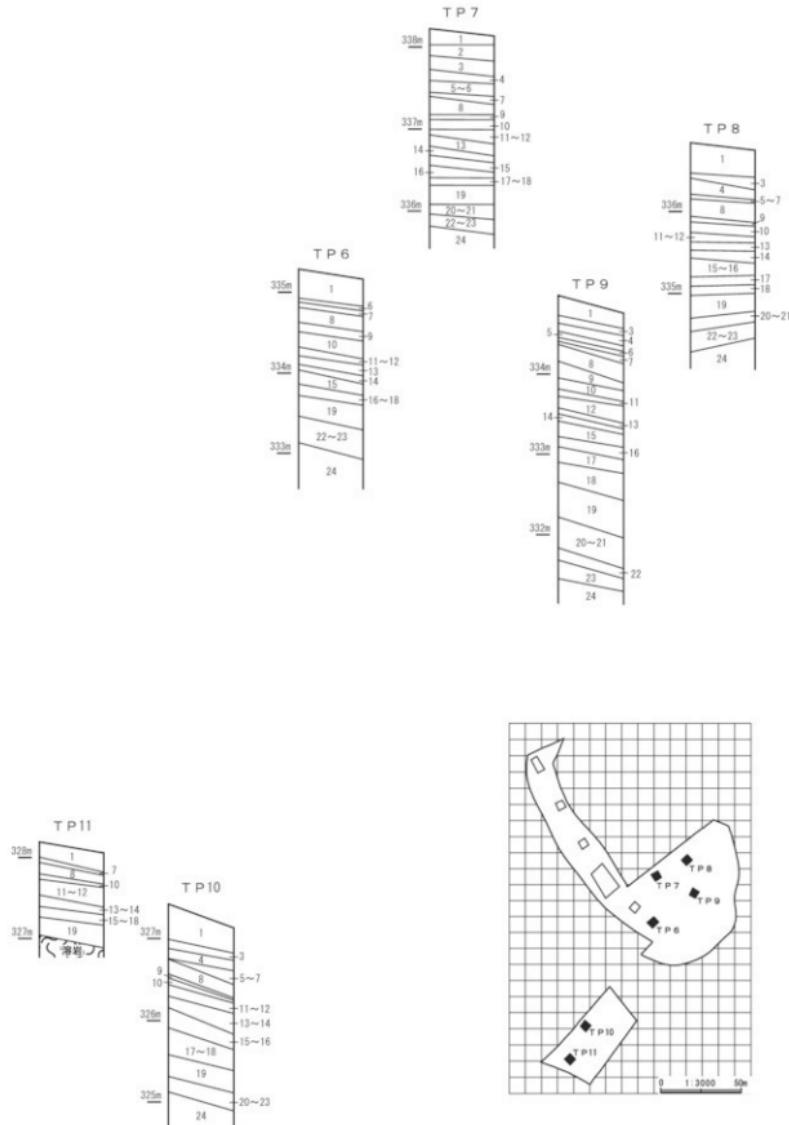
北側区TP 1とTP 4の間には谷地形が入り、またTP 4から地形が南東方向へ傾斜している。TP 1では地表面から約4.5m掘削したが、基盤になる溶岩は確認されていない。各層位は他のTPと比較して厚く堆積しており、地表面から第24層まで約4.2mを測る。TP 2は第19層以下で溶岩蹠が含まれるようになり、第24層以下は基盤となる溶岩と理解された。TP 3は谷地形の底と考えられる。第8層の砂沢スコリアや第10層の仙石スコリア等の脆いスコリア層は流出してしまったのか、第12層より上位の層は認められない。このTPは第24層から溶岩蹠が含まれる。TP 4はTP 3が位置する小谷地形より南側の地形の頂部にあたり、当該TPの土層はこの谷地形に向かって傾斜する堆積状況を示している。このTP 4では地表面から約1.5mの深度で炭化物の散布が認められたが、焼土は認められなかった。第22層中から小型尖頭器が1点出土している。写真図版2にるように、第24層付近から溶岩蹠が含まれ、基盤となる溶岩流に近い。TP 5はTP 1～4では確認できなかった第25・26層が堆積する。第2～5層は認められない。第24層付近から溶岩蹠が散見され、第26層より下位は溶岩層と考えられる。TP 6は第20～23層の堆積が厚い。TP 7はTP 4から約2 m程度低い。第19層付近から溶岩片が少量含まれ、第24層では溶岩蹠が露出している。TP 8はTP 7の北東に設定した。第22層より下位に溶岩蹠を含む。TP 9はTP 7の東側に設定した。TP 9に比べて約3 m程度低い。第19層褐色土層が非常に厚く堆積している。

南側区はTP 1が位置する地形の末端付近にあたり、TP10はその地形と沢の間に位置する。地表面は約327.4mを測り、調査対象地内で標高が最も低い。沢の影響を受けた土層は確認されなかった。TP11はTP 1が位置する地形の最末端である。第2～6層の堆積が認められず、また各層位の分層が困難であった。地表面から約1.15mの深さで溶岩が露出した。

以上TP 1～11にかかる所見として、第2層以下人為的な造作がなされていないため、自然の堆積が認められる。TP11については第20層以下の堆積が認められず、溶岩層が露出しているが、第20層以下の層が大水等により消失したのか、当該付近が三島溶岩流と裾野溶岩流Iとの境界にあたる事実からすれば、TP11の溶岩は裾野溶岩流Iに該当する可能性も想起されるが、判然としない。

4 出土遺物（第16図）

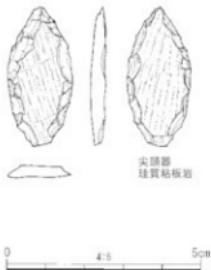
1は尖頭器である。長さ36.3mm、幅16.0mm、厚さ3.5mm、重さ2.44gを測る。小型の尖頭器である。茎部が一部折損している。側縁部が内湾する木の葉型か。石材は珪質粘板岩である。第22層上面から出土している。縄文時代早期と考えられる。



第15図 イザロ塚遺跡土層柱状図（2）

第4節 イザロ塚遺跡調査のまとめ

今回のイザロ塚遺跡の調査では尖頭器1点のみ出土し、遺構は確認できなかった。遺物は縄文時代晚期の砂沢スコリアより下位の第22層中から出土した。昭和34年に縄文土器、石器等が当該遺跡において採集されている。この中には清水柳E類土器とも思しき縦条体圧痕文及び沈線文を施した土器片が含まれており、これらは縄文時代早期後半代以降の土器群と考えられる。『御殿場市史』によれば「…出土地層は地下二.八メートルの黄褐色粘土層中であり、その下の熔岩までは約二十センチある…」と所見を述べている。基本土層でも明らかのとおり、「…地下二.八メートルの黄褐色粘土層」に該当しそうな土層はTP 1・9の第19層の褐色土、TP 6~8の第23層が色調の面で似ている。他に該当する色調の土層は見当たらない。ただし「…その下の熔岩までは約二十センチある…」という点から第23層の可能性が高いものの、TP11の例もあり土層はその地形により層厚が異なるため、『御殿場市史』で云う黄褐色土層の特定は困難かと思われる。当該調査では遺物のみの確認であったが、それよりもまず貴重な成果として、富士火山溶岩流の流出後に初めて神山地区に進出した縄文人の生業活動を裏付ける資料が層位的に証明された点にある。当該地域における堆積溶岩の冷却後に様々なテフラの堆積や土壤化が進み、かつ植生、動物相の回復がなされ、縄文人の当該地域への進出が図られたのであろう。第3章で扱う宮ノ台遺跡も同様で、溶岩流下後の生業の様相の究明に一石を投じたものと評価される。篠原武氏による富士山麓の遺跡分布の分析では、遺跡は水が地下へ浸透してしまう溶岩上に少なく、湧水が多い溶岩末端部に多い。そして、土壤が発達した新富士火山旧期溶岩などの古い溶岩上には遺跡が分布する点を指摘している（篠原2011）。当該遺跡については溶岩末端部に位置するため、氏の指摘通りの立地に該当しよう。



第16図 遺物実測図

第3章 宮ノ台遺跡（No.159地点）

第1節 宮ノ台遺跡の概要

1 宮ノ台遺跡の位置

宮ノ台遺跡は御殿場市駒門字宮ノ台に位置し、標高は378～382m付近である。遺跡は東名高速道路御殿場インターチェンジから南西へ約5km、JR御殿場線富士岡駅から北西へ約1km離れている（第17図）。

遺跡一帯は富士火山噴出物である玄武岩溶岩で構成された火山性の丘陵地形である（第18図）。本遺跡は新富士火山の旧期玄武岩溶岩である畠岡溶岩流の外縁部に立地する（第19図）。遺跡がある箇所は、溶岩流の端部が西から東へと突き出して尾根状の地形を形成している。遺跡の東側は黄瀬川及びその支流から運ばれた御殿場泥流堆積物が溶岩流上に厚く堆積している。

2 宮ノ台遺跡周辺の遺跡

遺跡の位置及び番号は第4図、第1・2表を参照のこと。

本遺跡は平成10年度に実施した第二東名建設事業に伴う踏査で確認された新たな埋蔵文化財包蔵地のひとつである。状況調査・踏査結果等の集成・検討を経て、「宮ノ台遺跡」（34）として県の埋蔵文化財包蔵地台帳に新規登録された。

縄文時代

御殿場市域での遺跡の初現は縄文時代早期にさかのぼる。現在存在が確認されている遺跡に限ると、縄文時代の遺跡は主に箱根山西麓に分布しており、富士山東麓に位置する遺跡は関屋塚遺跡（35）とイザロ塚遺跡（46）のみである。イザロ塚遺跡では三島溶岩流の直上で早期の絡条体圧痕土器と擦痕がある土器、磨石が出土した。また、第二東名No.156地点として調査を実施し、同時期と推定される尖頭器が出土したことは第2章で報告している。箱根山西麓に立地する神山牧場上遺跡（47）では前期の木島式土器、丸山遺跡（50）では中期後半の加曾利E式土器と石錐が出土し、川向遺跡（44）でも中期の土器が出土した。黄瀬川の段丘砂礫層上に立地する矢下遺跡（38）でも中期の土器の出土が報告されている。

本遺跡のすぐ東に位置し、同一尾根の先端部に立地する関屋塚遺跡の存在は広く知られている。関屋塚遺跡は、昭和53年（1978年）に国道246号線裾野バイパスの新設工事に伴って発掘調査が実施された（小野他1978）。この調査で、縄文時代晚期後半の土器や石錐、磨製石斧が出土した。土器は外内面の口縁部に隆線及び沈線がめぐる中部高地の浮線文系土器が主体である（註）。

弥生時代

本遺跡と同じ畠岡溶岩流上に立地するみなぞう官林遺跡（32）と堀ウマヤ遺跡（33）で有孔磨製石錐が出土した。黄瀬川の河床部に立地する下がり遺跡（28）では後期の土器が出土した。

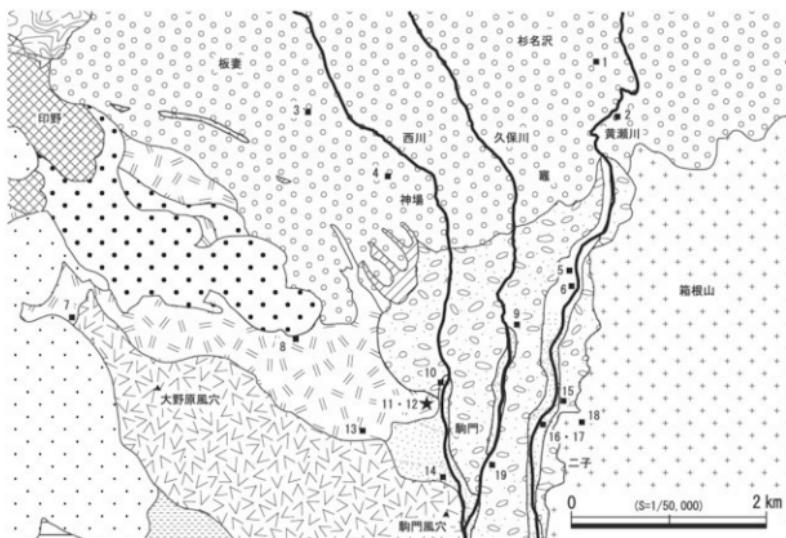
（註）中沢道彦氏は、これらの土器の形式は女鳥羽川式に併行するが、沈線の幅や形状が異なること、内弯する器形の土器が出土していないことなどから、「関屋塚式」と仮称している（中沢2010）。



第17図 宮ノ台遺跡位置図



第18図 宮ノ台遺跡周辺旧地形図



【遺跡】

- 1 永原追分A・B・C遺跡
- 2 大沢原古墳群
- 3 握田遺跡
- 4 煙遺跡
- 5 下がり遺跡
- 6 上の山遺跡
- 7 大野原遺跡
- 8 みなぞう官林遺跡
- 9 カヌキワリ遺跡
- 10 軽沢遺跡
- 11 宮ノ台遺跡
- 12 関屋塚遺跡
- 13 堀ウマヤ遺跡
- 14 一木戸遺跡
- 15 陣場遺跡
- 16 矢下遺跡
- 17 浜射場遺跡
- 18 二子丸山遺跡
- 19 富士岡駅遺跡

河床 段丘砂疊層 新期火山灰その他の放出品物 古富士泥流上の扇状地堆積物

火山砂疊及び泥流層
(古富士火山)

新富士火山新期玄武岩溶岩

印野丸尾溶岩流

新富士火山中期玄武岩溶岩

幕岩溶岩流

須山溶岩流

新富士火山旧期玄武岩溶岩

大野原(三島)溶岩流

裾野溶岩流Ⅰ

裾野溶岩流Ⅲ

煙岡溶岩流

この図は津屋弘途1971「富士山の地形・地質」「富士火山地質図」
『富士山 富士山総合学術調査報告書』富士急行株式会社を参考にした。

第19図 宮ノ台遺跡周辺地質図

第2節 調査の体制・経過

本遺跡は平成12年度から平成24年度の間に9期に分けて調査を実施した。調査に際し、調査区及びテストピットを第20～22図のように設定した。また、工期ごとの調査範囲を第23図に示した。

1 平成12年度

（1）確認調査その1

平成12年6月21日、テストピットTP2、TP4を設定し、バックフォーで表土除去を行った。終了後、人力で精査を行い、中近世の遺構と遺物の有無を確認した。テストピットから遺構や遺物が検出及び出土した際には隨時拡張して掘削し、範囲を確認した。TP4でこの時期のものと推定される土坑2基を検出した。遺構調査の後、バックフォーで中間層を除去し、再度溶岩流に到達するまで人力で掘削した。この結果を踏まえて、当初設計した調査対象範囲を拡大し、テストピットTP1、TP3を追加して掘削した。7月7日にバックフォーによる埋め戻しを実施して調査を終了した。

（2）確認調査その2

平成12年10月10日、テストピットTP5～TP10の計6箇所を設定し、バックフォーで表土除去を行った。終了後、人力で精査を行い、中近世の遺構と遺物の有無を確認した。遺構調査の後、重機掘削と精査を繰り返しながら掘削したところ、テストピットTP9で縄文時代晚期の遺物包含層を確認した。また、テストピットTP7でも黒曜石の剥片が出土して、遺物包含層が面的な広がりを有することが明らかになった。

また、早期に引き渡す工事用道路敷設範囲については、工事対象範囲内にトレーニング1箇所を設定して掘削した。このトレーニングは縄文時代晚期の良好な包含層を検出した。テストピット・トレーニングの調査を経て、10月26日に調査を終了した。

（3）本調査Ⅰ期

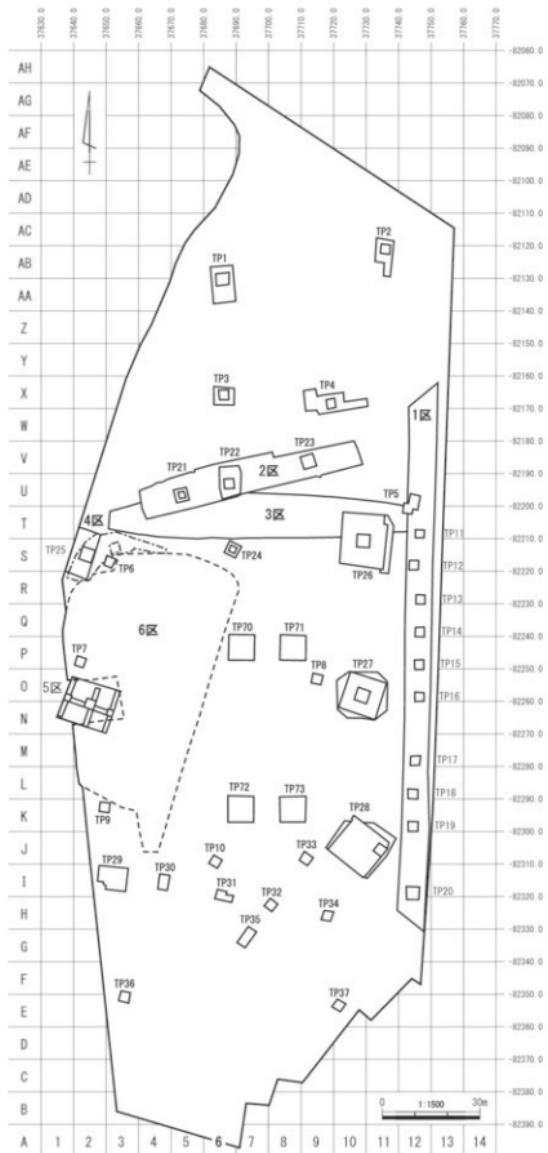
本発掘調査開始に伴い、調査区の方眼設定を行った。平面直角座標VII系を用いた国土座標日本測地系（改正前）を基準に、 $(X = -82400.0, Y = 37630.0) = (A, 1)$ とした。1グリッドは10m×10mで、各グリッドの呼称は該当グリッドの南西角の座標名称を用いている。

平成12年11月7日、確認調査その2で掘削したトレーニングを拡張した。バックフォーによる表土除去を経て人力で精査を行い、中近世の遺構と遺物の有無を確認した。遺構調査の後、掘削を進めると遺物包含層が現れ、縄文時代晚期の土器や石器が出土した。その後、調査区内にテストピットをTP11～TP16の計6箇所を設定し、溶岩流の上面まで人力で掘削した。テストピット・トレーニングの調査を経て、12月22日に調査を終了した。

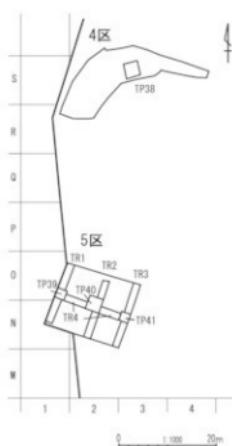
（4）確認調査その3

確認調査その3は本調査Ⅰ期と併行して実施した。

平成12年12月7日、本調査Ⅰ期で拡張したトレーニングをさらに南方向に拡張するように調査区を設定し、バックフォーによる表土除去を実施した。本調査Ⅰ期の調査区と確認調査その3の調査区を合わせて1区と呼称した。重機掘削終了後、人力で精査を行い、中近世の遺構と遺物の有無を確認した。遺構調査の後、掘削を進めると遺物包含層が現れ、縄文時代晚期の土器や石器が出土した。その後、調査区内に



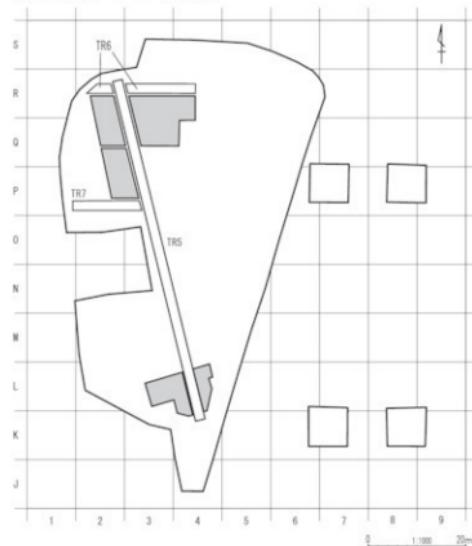
第20図 宮ノ台遺跡調査区及びテストビット配置図



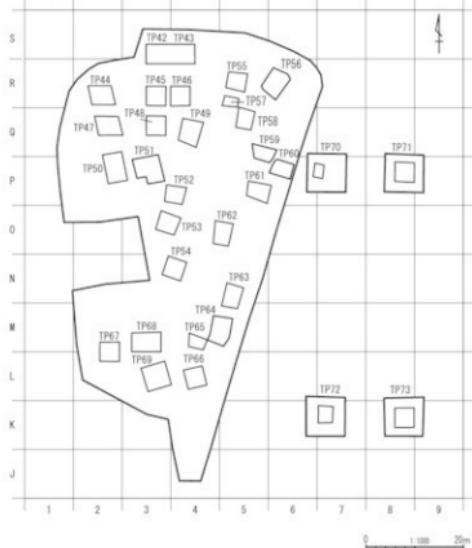
第21図 4区・5区拡大図

TR	トレンチ
TP	テストビット
■	拡張トレンチ

第2層上面 トレンチ配置図



第9層上面 テストビット配置図



第22図 6区拡大図

テストピットTP17～TP20の計4箇所を設定し、溶岩流の上面まで人力で掘削した。テストピット・トレンチの調査を経て、平成13年1月22日に調査を終了した。

2 平成13年度

確認調査その4

平成13年4月3日、茶樹伐採の後、工事対象範囲の中央部に東西に延びるトレンチ（2区）を設定した。バックフォーによる表土除去の後、人力で精査を行い、中近世の遺構と遺物の有無を確認した。遺構調査の後、トレンチの中にテストピットTP21～TP23の計3箇所を設定し、溶岩流の上面まで人力で掘削した。この地区については5月中旬に調査を終了した。

次に橋脚工事の範囲5箇所（TP24～TP28）について調査した。工事で掘りこむ部分は全面人力で精査を行い、中近世の遺構と遺物の有無を確認した。遺構調査の後、縄文時代遺物包含層まで全面人力で掘削した。遺構や遺物が検出及び出土した際には随時拡張して掘削し、範囲を確認した。これより下層は法面を付けて溶岩流の上面まで人力で掘削した。7月30日に調査を終了した。

3 平成14年度

確認調査その5

平成14年6月16日、橋脚工事の仮設道路になる範囲にテストピットTP29～TP37の計9箇所を設定した。バックフォーによる表土除去の後、人力で精査を行い、中近世の遺構と遺物の有無を確認した。遺構調査の後、掘削を進めると遺物包含層が現れ、縄文時代晩期の土器や石器が出土した。その後、溶岩流の上面まで人力で掘削した。7月16日にバックフォーによる埋め戻しを実施して調査を終了した。

4 平成15年度

本調査II期

橋脚設置箇所となる4区と5区の調査である。5区にはトレンチ4本（TR1～TR4）を設定した。

平成15年9月15日、バックフォーによる表土除去を実施した。終了後、人力で精査を行い、中近世の遺構と遺物の有無を確認した。遺構調査の後、掘削を進めると遺物包含層が現れ、縄文時代晩期の土器や石器が出土した。その後、テストピットを4区にTP38、5区にTP39～TP41の3箇所を設定し、溶岩流の上面まで人力で掘削した。10月31日にバックフォーによる埋め戻しを実施して調査を終了した。

5 平成20年度

本調査II期追加

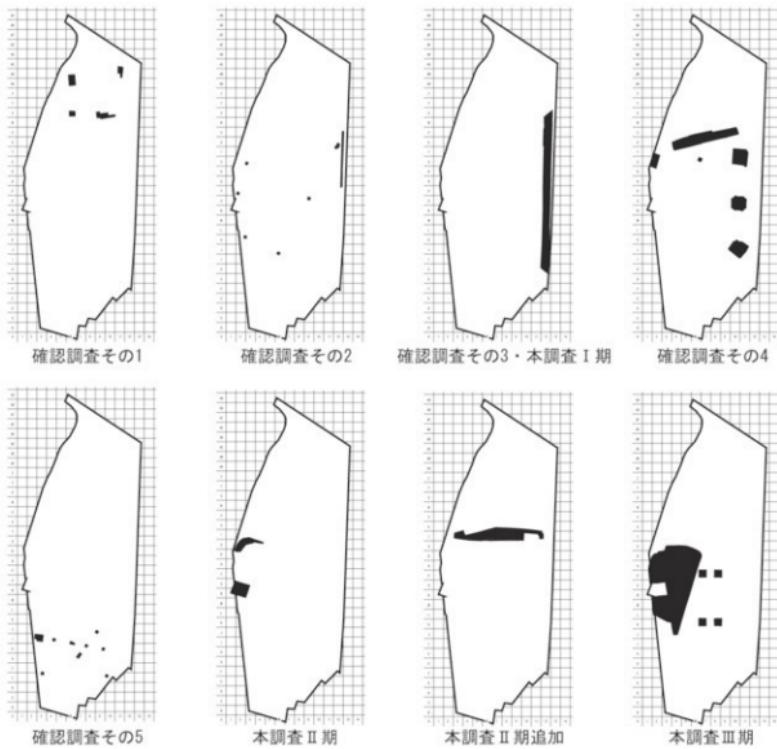
高速道路建設に伴う市道の切廻し工事に先立って行われた調査である。2区の南壁に沿うように調査区（3区）を設定した。

平成20年4月8日、バックフォーによる表土除去を実施した。終了後、人力で精査を行い、中近世の遺構と遺物の有無を確認した。遺構調査の後、縄文時代晩期遺物包含層まで精査を行ったが、遺構・遺物の出土はなかった。6月26日にバックフォーによる埋め戻しを実施して調査を終了した。

6 平成24年度

本調査III期

工事対象範囲の西側と、橋脚設置箇所4箇所を本調査III期の調査区とした。工事対象範囲の西側を6区、橋脚部分をTP70～TP73と呼称した。



第23図 宮ノ台遺跡工期別調査区配置図

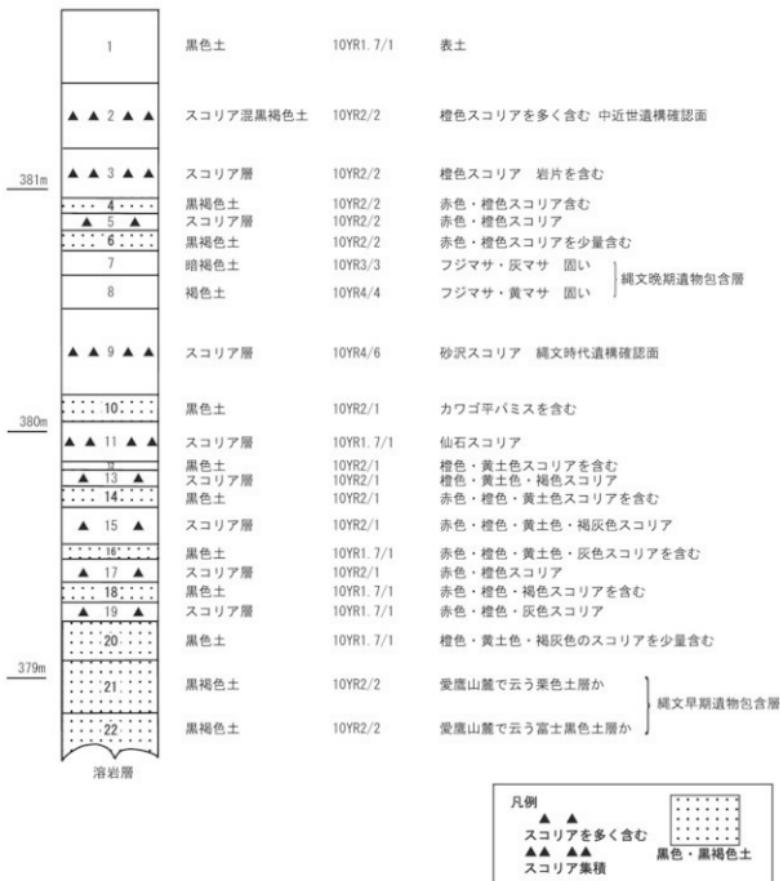
平成24年8月6日、調査区全域に対してバックフォーによる表土除去を実施した。9月3日から人力で精査を行い、中近世の遺構と遺物の有無を確認した。遺構調査の後、6区にトレントを設定して、TP70～TP73とともに縄文時代晚期遺物包含層まで精査を実施した。トレントから土器や石器が出土した際には随時拡張し、出土範囲を確認した。遺構・遺物の調査後は、テストピットTP29～TP37の計28箇所を設定し、溶岩流の上面まで人力で掘削した。平成25年3月5日にバックフォーによる埋め戻しを実施して調査を終了した。

第3節 調査の成果

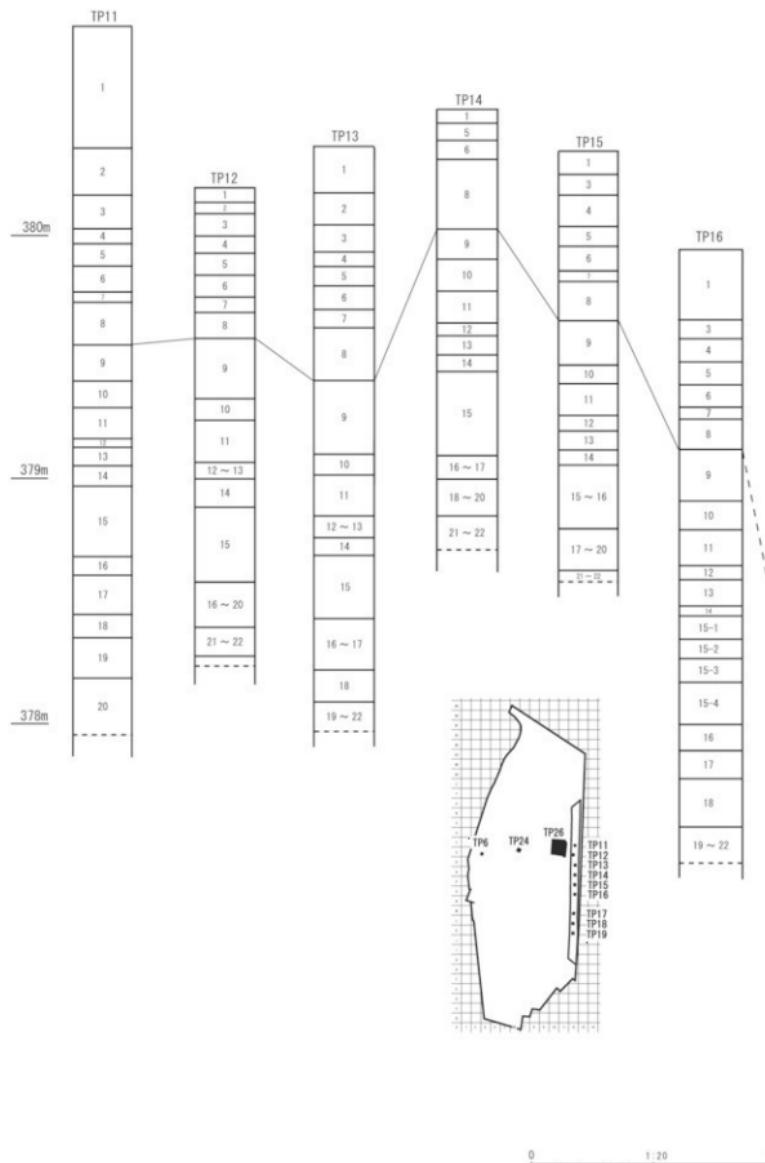
1 調査区の概要

調査対象地は第二東名高速道路御殿場ジャンクション上下線のランプと、本線下位に延びる工事用道路及び市道である。調査対象地の西側を接するように走る東名高速道路の高架と勾配を調整するため、調査対象地には橋脚が設置される。また、工事用道路は調査対象地の東壁に沿って造られ、調査対象地の中央部を東西に横断するように走る市道は、既設の道路を舗装整備する。

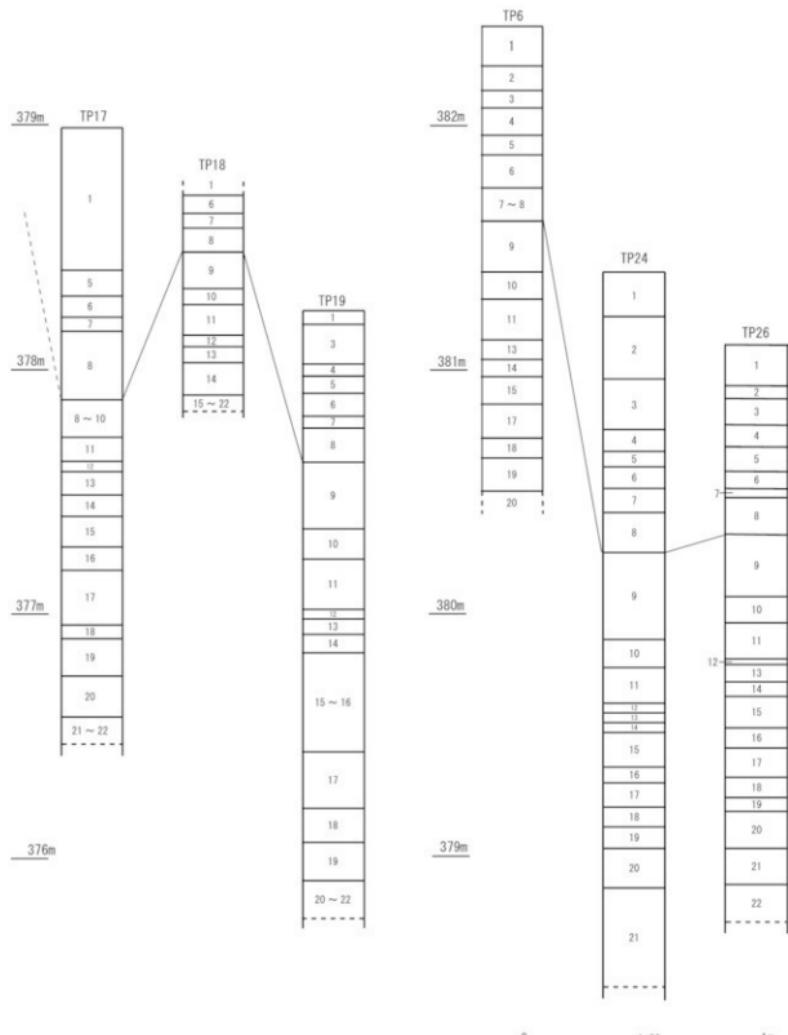
調査対象地の凡その位置は北緯35度15分44秒、東経138度54分39秒である。東側には黄瀬川支流の西川、北側には西川支流の砂沢川が接している。



第24図 宮ノ台遺跡基本土層図



第25図 宮ノ台遺跡土層堆積状況図（1）



第26図 宮ノ台遺跡土層堆積状況図（2）

2 基本土層

本遺跡の土層は、火山碎石物が堆積したスコリア層と、火山噴火の休止期に植物の繁殖、腐食などの影響により黒色化が進んだ黒色土層で構成されている。第24図は基本土層図である。土層は第1層から第22層まで分層され、それぞれ富士山噴出物に由来するスコリアが多く見られる。

第1層は表土である。第2層は橙色スコリアを多く含んだ黒褐色土層である。上面で中近世の遺構を検出した。第3層は非常に固く締まったスコリア層である。1～5mmの橙色スコリアが密集している。この層には岩片も含まれている。第4層は黒褐色土層である。2～6mmの橙色、赤色スコリアを含む。第5層は2～7mmの橙色、赤色スコリアが密集している。第6層は2～12mmの橙色、赤色スコリアを少量含む黒色土層である。第7層、第8層は固く締まった土層で、通称「フジマサ」と呼ばれる縄文時代晚期の遺物包含層である。第8層では一部に水成層の痕跡が見られる。第9層は砂沢スコリア層である。2～15mmの橙色、灰色、褐色のスコリアが密集するが、乾燥すると白色に近くなる。スコリア同士が接着することなく、崩れやすい。第10層はカワゴ平バミスを含む黒色土層である。第11層は8～15mmの仙石スコリアが密集している。第12層～第20層は黒色土層とスコリア層の互層である。いずれの層にも1～8mm大のスコリアを含んでいる。第21層は愛鷹山東～南麓・箱根山西麓に堆積している栗色土層、第22層は同じく富士黒色土層に相当する層と推定される。いずれも縄文時代早期の遺物包含層である。第22層より下位は烟岡溶岩流である。

3 テストピットの土層堆積状況

第25・26図にTP11～TP19までの南北列、第26図にTP6、TP24、TP26の東西列の堆積状況図を示した。

TP11とTP14の間に緩やかな谷地形が入り、TP13が谷底となる。TP14～TP16の間は南方向に傾斜する。TP16とTP18の間に再び谷地形が入り、TP17が谷底となる。TP18とTP19の間は南方向に傾斜する。高低差は地表面で約2.6m、第9層上面で約1.9mをはかる。この列のテストピットは第12層以下の分層が困難なものが多く見られる。TP11はこの列で最も堆積が厚いテストピットで、地表面からの深さは約2.9mをはかる。また、土層堆積は第20層で終わり、以下は溶岩層であることが確認された。

TP6とTP24の間は東方向に傾斜し、高低差は地表面で約1m、第9層上面で約1.4mをはかる。TP24とTP26の間は地表面で高低差があるものの、第9層上面ではほぼ水平である。TP24はこの列で最も堆積が厚いテストピットで、地表面からの深さは約2.9mをはかる。

4 縄文時代の遺物

本遺跡では縄文時代の遺構は検出されなかった。よって、縄文時代の遺物は包含層から出土したものである。

（1）土器

I群：縄文時代早期の土器

基本層序の第21層、22層に相当する6区南斜面の第17層から出土した。

ア 縄文時代早期の土器の遺物出土状況

土器126点が出土した。分布は6区の南斜面地に限られ、L3グリッドとM5グリッドの1m以内に密集したに集中箇所が見られる（第27・28図）。

イ 繩文時代早期の土器の分類

以下のように分類する。

A類：打越式から神之木台式土器

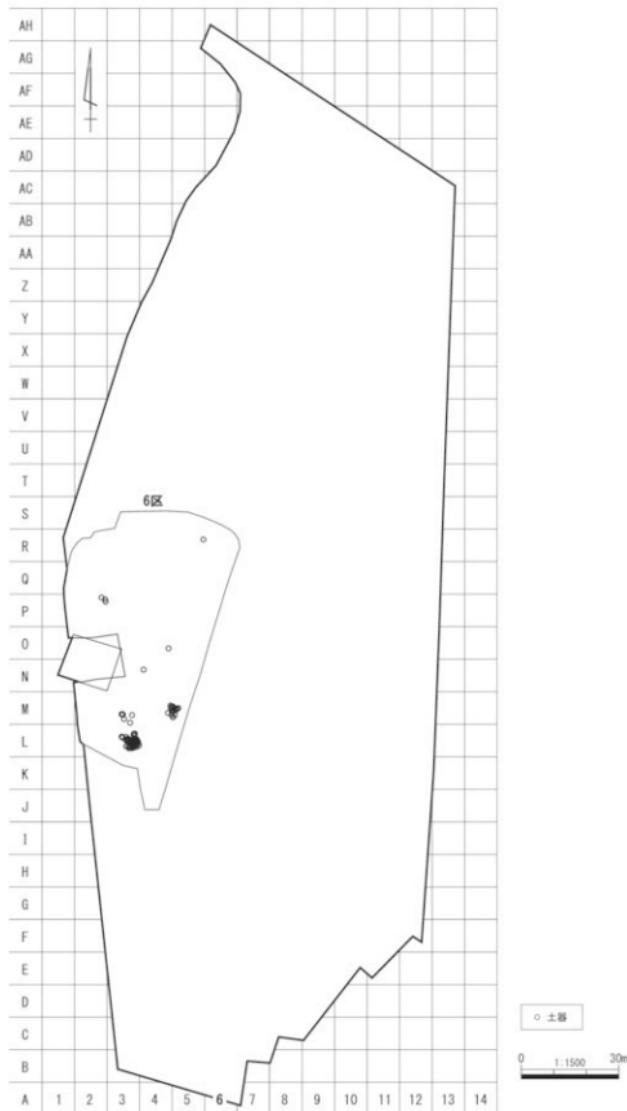
B類：型式不明の繩文時代早期の土器

(ア) I群A類 打越式から神之木台式土器 (第29図1～5 第5表 図版12)

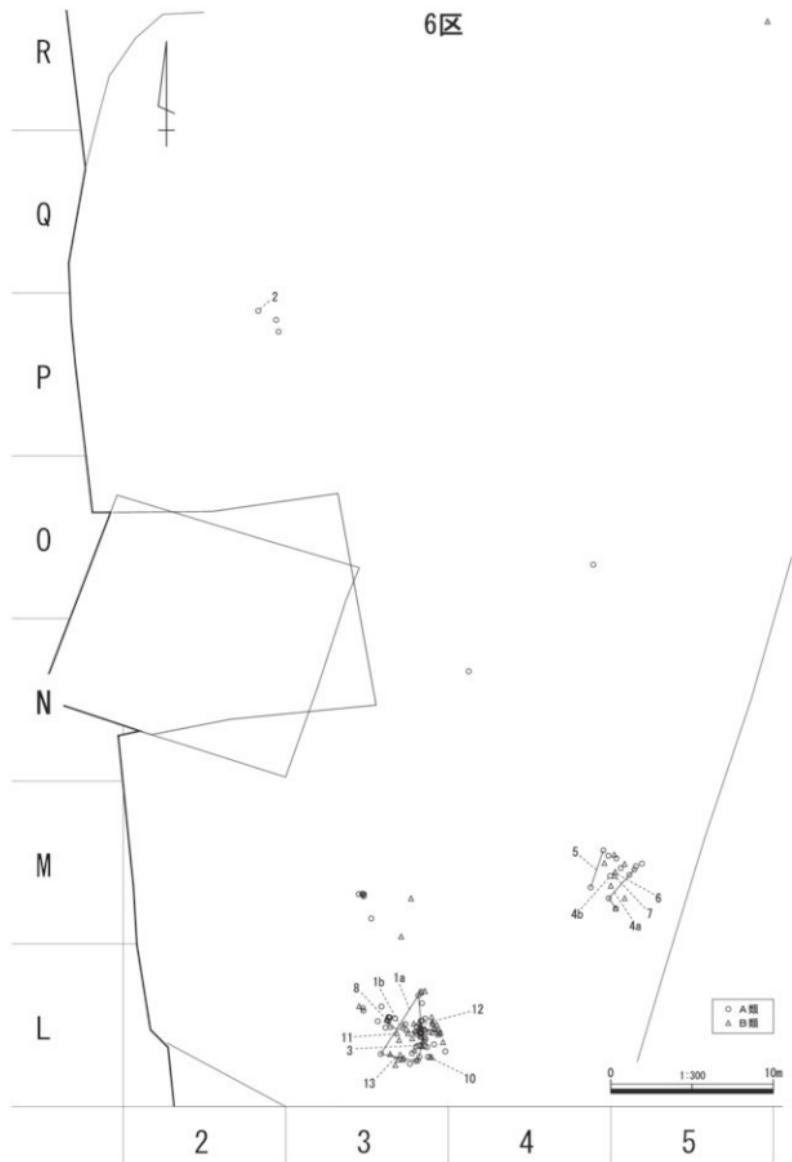
1 aは神之木台式土器と考えられる波状口縁を有する深鉢である。口縁部の形状に沿って粘土紐を貼り付けている。粘土紐と口唇部に施された貝殻腹縁によるキザミや、外内面の器面の条痕による調整は打越式の要素が残る。1 bは鈍角の尖底の底部である。2から5は打越式土器である。2は口唇部に粘土紐を貼り付け、キザミを施している。器面は条痕で調整している。3は外面に格子状の条痕文を付けている。口唇部は貝殻でキザミを施している。4は外面をナデ、内面を条痕で調整した胴部である。5は外内面とも条痕をナデで消した胴部である。

(イ) I群B類 型式不明の繩文時代早期の土器 (第29図6～13 第5表 図版12)

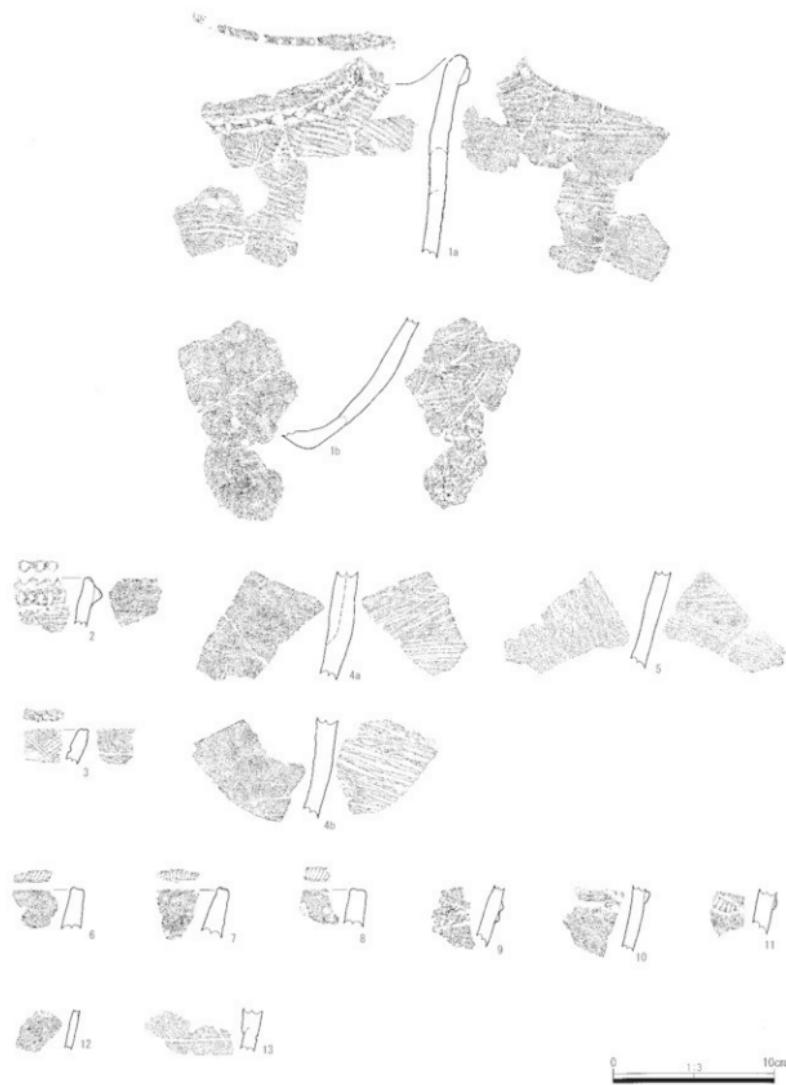
6～8は神之木台式から下吉井式と考えられる個体である。口唇部に細かくキザミを施している。9は横位と斜位、10は横位に粘土紐を貼り付け、キザミを施している。11は低い粘土紐を横位に貼り付け、キザミを施している。12は東海系と考えられる器壁の薄い胴部である。外面上部にキザミがわずかに残っている。13は厚手の胴部である。器面に細い沈線を横位に引いている。



第27図 縄文時代早期土器分布図



第28図 縄文時代早期遺物分布拡大図



第29図 縄文時代土器実測図（1）

第5表 繩文時代早期土器観察表

辨別	面版	TP	グリッド	分類	層位	器種	口径	器高	色調	胎土	文様・調整等
1a	12	TP69	L3	IA	17	深鉢			SYRS/6 明赤褐色	石英・輝石・白色石片	波状口縁 粘土帯 口唇部と粘土帯にキザミ 条痕
1b	12	TP69	L3	IA	17	深鉢			SYRS/4 にぶい赤褐色	石英・輝石・白色石片	尖底 条痕
2	12	TP50	P2	IA	17	深鉢			SYRS/6 明赤褐色	石英・白色粒子	口唇部と粘土帯にキザミ 条痕
3	12	TP69	L3	IA	17	深鉢			SYRS/4 にぶい赤褐色	石英・白色粒子	口唇部にキザミ 格子状の条痕
4a		TP64	M5	IA	17	深鉢			7.SYRS/4 にぶい褐色	石英・輝石・白色粒子	肩部破片 内面条痕
4b		TP64	M4	IA	17	深鉢			10YR5/2 にぶい黄褐色	石英・輝石・白色粒子	肩部破片 内面条痕
5		TP64	M4	IA	17	深鉢			7.SYRS/6 棕色	石英・輝石・白色粒子	肩部破片 条痕
6	12	TP64	M5	IB	17	深鉢			7.SYRS/4 にぶい褐色	石英・輝石・白色石片	口唇部にキザミ
7	12	TP64	M5	IB	17	深鉢			7.SYRS/6 棕色	石英・輝石・白色粒子	口唇部にキザミ
8	12	TP69	L3	IB	17	深鉢			7.SYRS/4 にぶい褐色	石英・輝石・白色粒子	口唇部にキザミ
9	12	TP67	L2	IB	17	深鉢			SYRS/6 明赤褐色	石英・黒色粒子・白色粒子	粘土帯にキザミ
10	12	TP69	L3	IB	17	深鉢			10YR4/3 にぶい黄褐色	石英・輝石・白色粒子	粘土帯にキザミ
11	12	TP69	L3	IB	17	深鉢			7.SYRS/4 にぶい黄褐色	石英・輝石・白色粒子	低い粘土帯にキザミ
12		TP69	L3	IB	17	深鉢			10YR6/4 にぶい黄褐色	石英・白色粒子	肩部破片 キザミ
13	12	TP69	L3	IB	17	深鉢			7.SYRS/4 にぶい褐色	石英・輝石・白色粒子・赤色岩片	肩部破片 細次線

II群：繩文時代晩期の土器

主に砂沢スコリア直上の第7、8層から出土した。

ア 繩文時代晩期の遺物出土状況

土器は932点出土した。分布は1区J～Tラインの範囲とTP27に集中し、6区L4グリッドにも集中箇所が見られる（第30図）。1区の土器出土範囲は、J～L12グリッドの一群、N12グリッドの一群、O12グリッドの小群、P12グリッドの小群、Q12グリッドの一群、R12グリッドの小群に区分することができる（第31図）。N12グリッドでは東西約3.5m、南北約1.3mの範囲に深鉢41が3箇所の小群に分かれて出土した（第32図）。型式別に見ると、II群A類、II群C類75～80a・bの土器はほとんどが1区及びTP27で出土した。一方で、II群B類とII群C類の80a・b、81a・bは、6区南斜面L4グリッド付近の集中箇所で出土した。

イ 繩文時代晩期の土器の分類

以下のように分類する。

A類：浮線文系土器

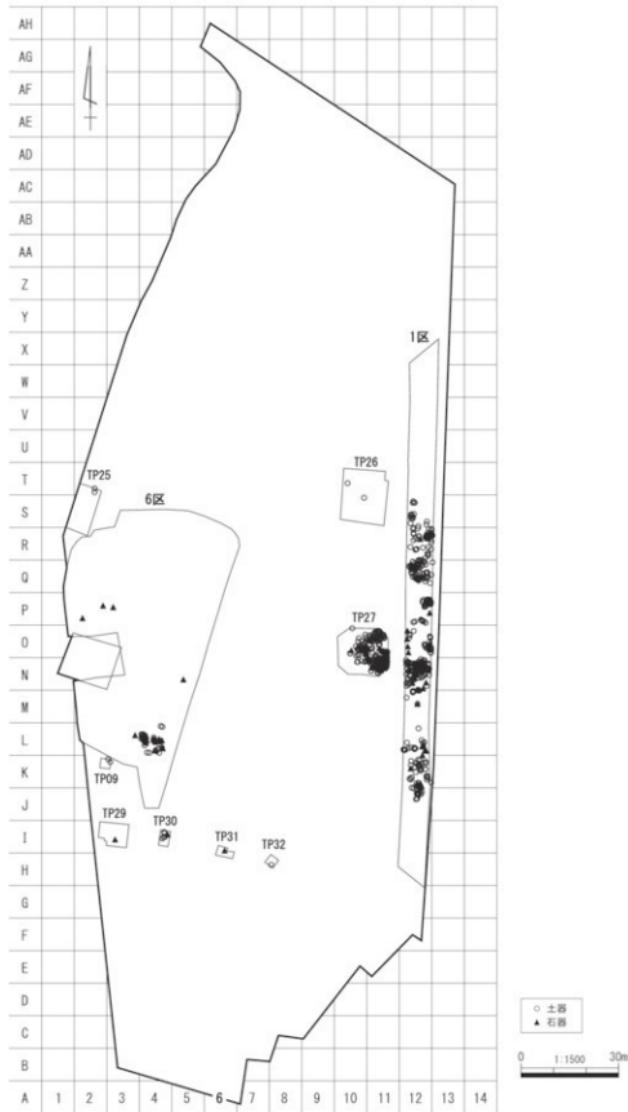
B類：東海系土器

C類：型式不明の繩文時代晩期の土器

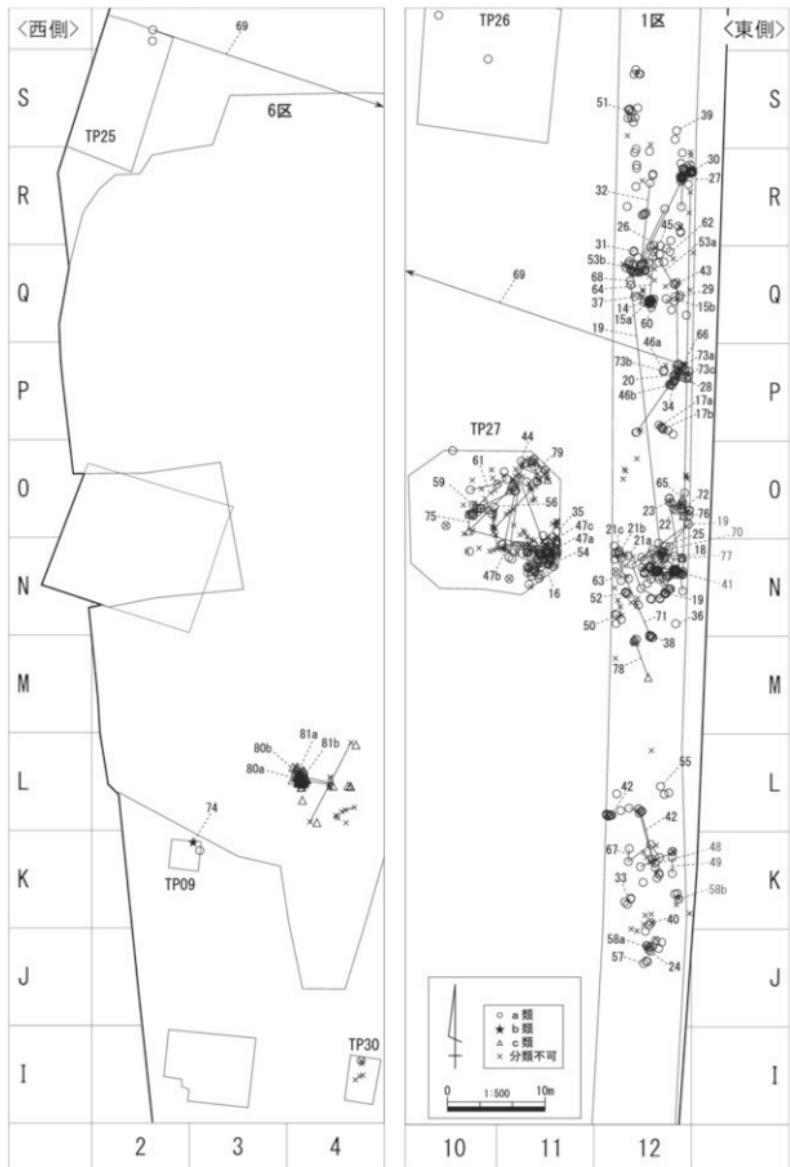
(ア) II群A類 浮線文系土器

浅鉢（第33図14～第35図37 第6・7表 図版12・13）

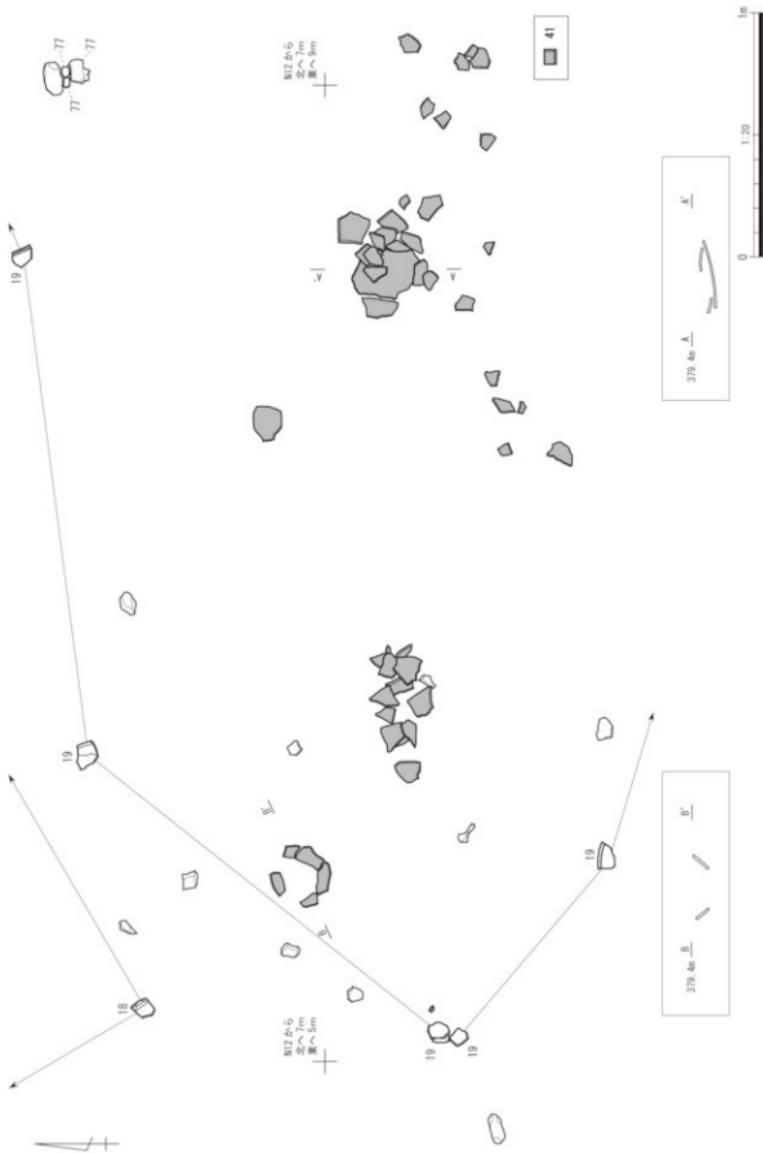
14～17は口縁部が内寄する。14・15は口唇部直下に沈線を1条引き、無文帶を挟んで、最大径の位置に文様帶を設けている。文様帶は沈線を複数条引き、間の粘土を隆起させた浮線文で構成される。1条目の沈線の直上の粘土と、1段目の浮線を上下に揃えて眼鏡状付帯文を作出している。内面は沈線を1条引き、上部の段を口唇部とともにナデて消している。このため、口唇部の断面形は階段状となる。16の形状は14・15に似るが、眼鏡状付帯文の間隔が狭い。1段目と2段目の沈線をやや間隔を空けて施文し、間の粘土を隆起させ、半截竹管状の工具で削って凹みを作出している。内面の調整は、沈線の上部



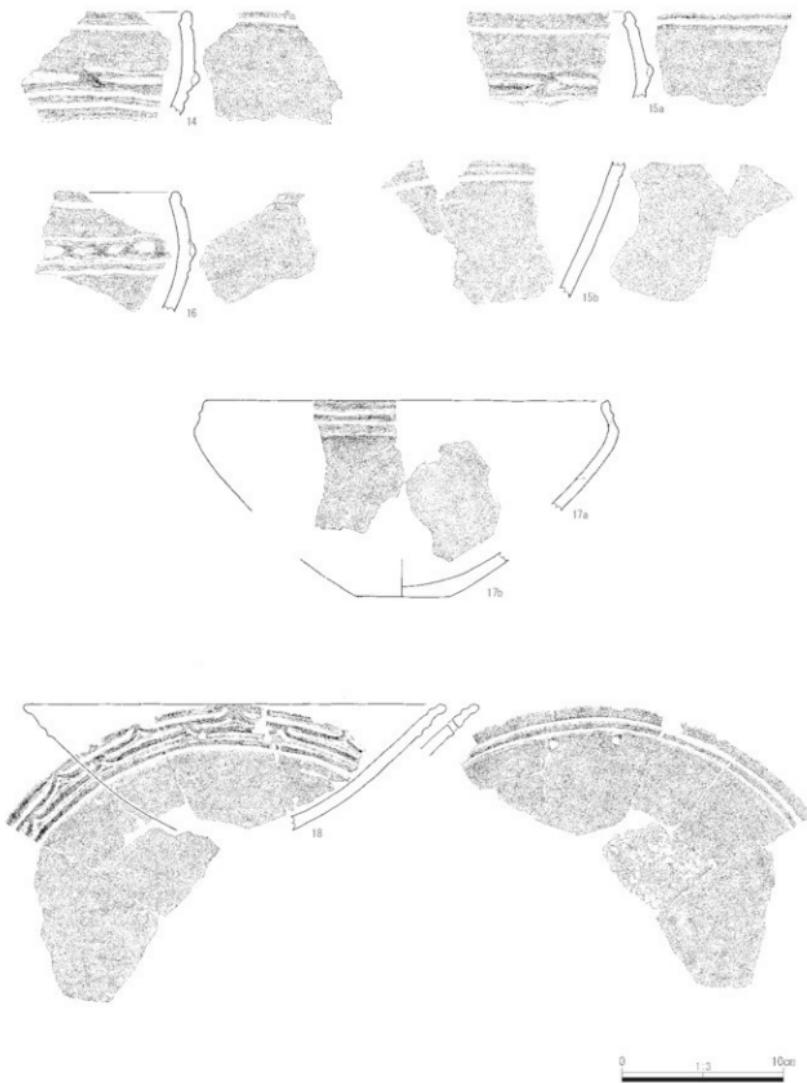
第30図 縄文時代晚期遺物分布図



第31図 繩文時代晩期土器分布図



第32図 1区土器出土状況概大図



第33図 縄文時代土器実測図（2）



第34図 縄文時代土器実測図（3）



第35図 縄文時代土器実測図（4）

は14・15と同じであるが、下部も脣部の調整の際に削っている。口唇部の断面形は三角形を呈し、内面に稜を有する。17は口縁部がくの字状に屈曲する。口唇部直下に浅い沈線を2条引いている。

18~35は口縁部がハの字状に開く。18~20は口縁部に文様帶を設けている。18は口唇部直下に浮線を3条付け、口唇部の粘土と1条目の浮線、1条目の浮線と2条目の浮線を交互に摘まんで波状の文様を作出している。内面は沈線を2条引いて、間の粘土を隆起させて作出した浮線を付けている。19は沈線を3条引き、2条目の沈線に粘土粒を等間隔に貼り付けている。内面は浮線を1条付けている。20は波状口縁を有する。最上段は口縁の形状に沿って、その下段は横位の沈線を施し、間の粘土を隆起させ、周りの粘土を削って隆帯を作出している。内面は浮線を1条付けている。21~31は外面口縁部に横位の沈線文を付けている。21は内面に浮線を1条付けている。22は14と同じ技法で内面口唇部を調整している。23は外面に複数条、内面に1条浅い沈線文を施している。24は口唇部が尖っている。25は外面に2条、内面に1条浅い沈線を施している。26と28の外面口唇部は14の内面と同じ技法で調整している。内面は26が沈線、28が細沈線を付けている。27は外内面ともに沈線を付けている。29~32は外面が無文のものである。29は内面に沈線、30・31は内面に細沈線を付けている。32・33は内外面とも無文である。33は小型の製品である。34の外面は直線と波状の沈線を組み合わせた文様を施し、施文によってできた区画内に短い沈線を付けている。内面は外面と同じ直線と波状の沈線を組み合わせてできた区画内を削って浮き彫りにしている。35は内面に半截竹管状工具で細沈線を施している。36・37は底部である。

深鉢（第35図38~第38図58 第7表 図版13・14）

口縁部付近に最大径を有した砲弾形のものを深鉢とした。

38は外面口縁部に沈線を1条引き、沈線の下を強くナデて隆帯に見せかけている。39・40の外面は、口唇部を強くナデて下の粘土を隆起させている。内面は39が沈線を1条引き、40は無文である。41・42は外内面に沈線を1条引いている。41は、口縁部付近は横位、次第に斜位～縦位に方向が変化するヘラナデで調整し、指頭圧痕が多く残る。42の内面口唇部は14と同じ技法で調整している。43は外面に浅い沈線を2条引いている。44・45は口唇部が肥厚する。ともに外面に沈線を複数条引いている。46は外面に浅い沈線を1条引いている。

47~58は無文の深鉢である。47は、口縁部付近は横位、次第に斜位～縦位に方向が変化する擦痕が残る。48は波状口縁を有する。50は外面に雜な横位のヘラミガキが残る。51は口縁部を指頭で押さえて緩やかな屈曲を作出している。器面には斜位の擦痕が残る。52・53は外面に輪積みの凹凸が残る。56は口縁部に強いヨコナデを施して口唇部を外反させている。57は波状口縁を有する。58は器壁が薄く、外面の輪積み痕を残している。

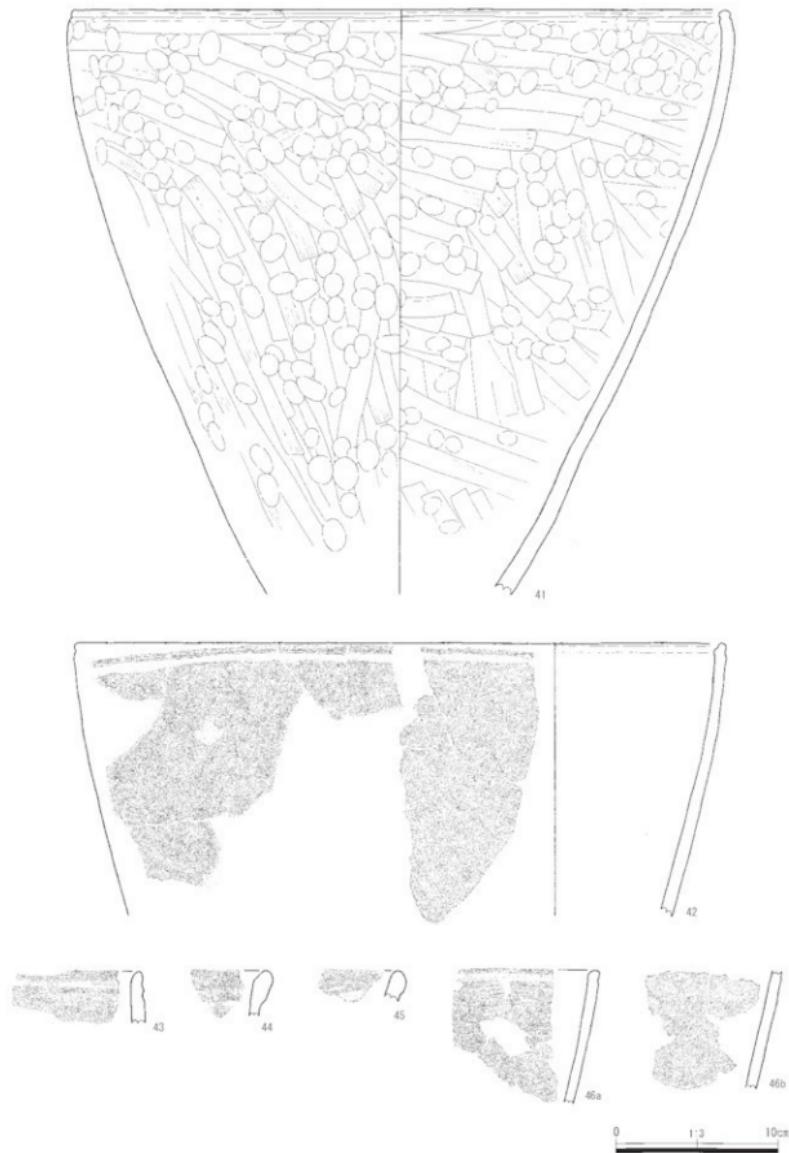
甕（第38図59~第39図63 第7表 図版15）

脣部上半、口縁部下で一旦括れ、口縁部が大きく聞く器形を呈するものを甕とした。

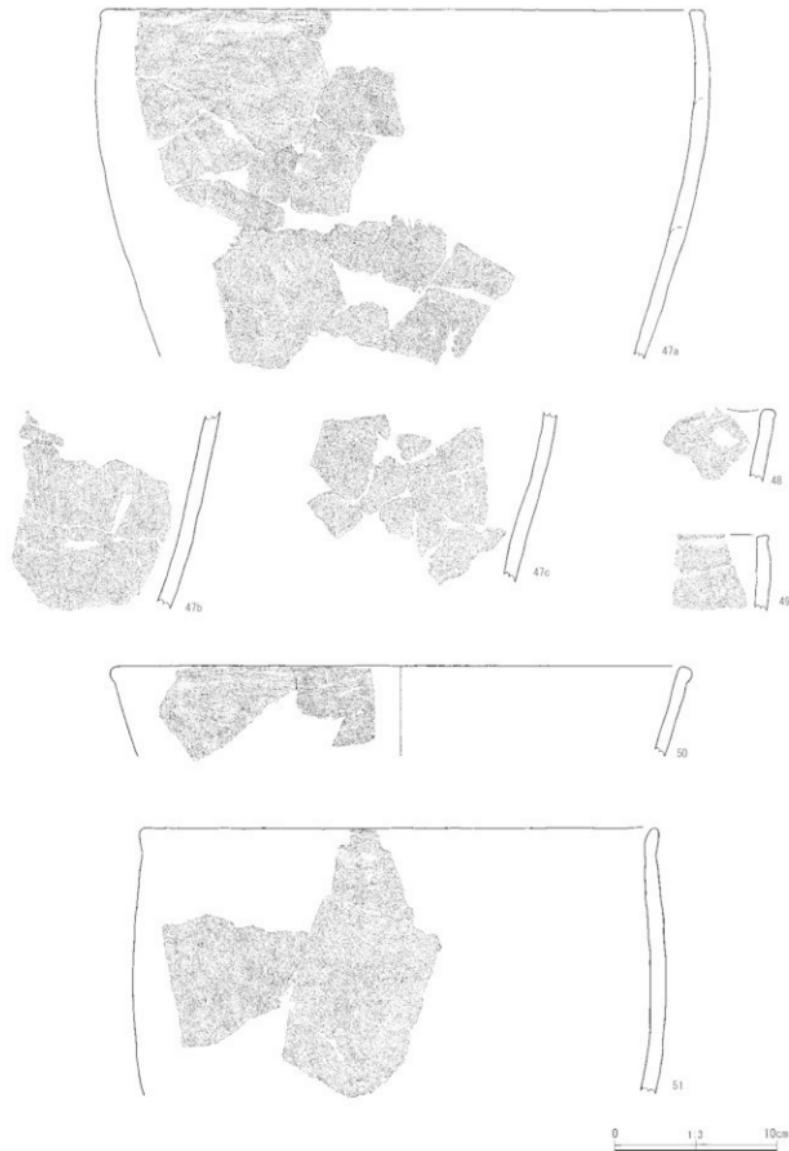
59の外面は細密条痕文を丁寧にナデて消し、口縁部下に強いナデを施している。内面は細沈線を1条引いている。60は沈線を1条引き、その下の粘土を摘まんで浮線を作出している。内面は14と同じ技法で段を作出している。61は内面に細沈線を1条引いている。62・63は肩部の屈曲の位置に当たる破片である。

その他（第39図64~73 第7表 図版15）

64~72は深鉢または甕の底部である。64~66は網代痕、67は木葉痕が残る。68・69はヘラミガキで器面を調整している。70は、底面付近は横位、脣部は斜方向のヘラナデで器面を調整している。



第36図 縄文時代土器実測図（5）



第37図 縄文時代土器実測図（6）



第38図 縄文時代土器実測図（7）



第39図 縄文時代土器実測図（8）



第40図 縄文時代土器実測図（9）

73は双口鉢と推定される個体である。外面は口縁部に細沈線を引き、三叉文に似た文様を施している。内面も細沈線を1条引く。基面全体は丁寧なヘラミガキで調整している。73cは結合部の破片と考えられる。

(イ) II群B類 東海系土器 (第39図74 第8表 図版15)

胎土が粗く、器面が風化している深鉢である。口縁部に低い帯を1条めぐらせ、帯上に刺突を連続的に施している。施文原体はアナダラ属貝殻の背面と考えられる。形状から見て五貫森式土器（増子1996）と推定される。

(ウ) その他の縄文時代晩期の土器 (第40図75~81 第8表 図版15)

75・76は壺の胴部と推定される。77・78は弯曲して立ち上がる深鉢の胴部と推定される。78はくびれの位置に強いヨコナデを施している。79は器壁が厚い粗製の胴部である。80と81は壺の胴部と推定される。ともに内面の粘土が剥落している。80a・bは器面全体に丁寧な横位のヘラミガキを施している。81a・bは横位と斜位のヘラケズリを施してから、部分的に横位のヘラミガキを施している。

第6表 縄文時代晩期土器観察表 (1)

番号	図版	TP	グリッド	分類	層位	器種	口径	器高	色調	胎土	文様・調整等
14	12		Q12	2A	8	浅鉢			7.SYRS/4 にぶい褐色	石英・輝石・白色粒子	口縁部内側 漂緑による文様帯 無文帶 調整状付帯文 内面無文 ミガキ
15a	12		Q12	2A	8	浅鉢			7.SYRS/4 にぶい褐色	石英・輝石・白色粒子	口縁部内側 漂緑による文様帯 無文帶 調整状付帯文 内面無文 ミガキ 朱痕
15b	12		Q12	2A	8	浅鉢			7.SYRS/4 にぶい褐色	石英・輝石・白色粒子	洞部破片 漂緑 ミガキ
16	12	TP27	N11	2A	7	浅鉢			10YR6/3 にぶい黄褐色	石英・輝石・白色粒子・黑色粒子・赤色粒子	口縁部内側 漂緑と沈緑による文様帯 無文帶 調整状付帯文 内面沈緑 1条 ミガキ
17a	12		P12	2A	8	浅鉢	(24.6)		7.SYRS/1 黒褐色	石英・輝石・白色粒子	口縁部くの字状 沈緑 2条 ミガキ 朱痕
17b			P12	2A	8	浅鉢			7.SYRS/1 黒褐色	石英・輝石・白色岩片	底部 ミガキ
18	12		N12	2A	8	浅鉢	(25.7)		10YR6/4 にぶい黄褐色	石英・輝石・白色粒子・赤色粒子	口縁部ハの字状 漂緑による文様帯 1条 ミガキ 朱痕
19	12		N12	2A	8	浅鉢	(34.7)	15.3	7.SYRS/4 にぶい褐色	石英・輝石・金雲母・白色粒子	口縁部ハの字状 漂緑による文様帯 内面沈緑 1条 ミガキ 朱痕
20	12		P12	2A	8	浅鉢			7.SYRS/3 棕色	石英・輝石	波状文 細部ハの字状 漂緑による文様帯 内面沈緑 1条 ミガキ 朱痕
21a	13		N12	2A	8	浅鉢			2.SY3/2 黑褐色	石英・金雲母・白色粒子	口縫ハの字状 沈緑 4条 内面沈緑 1条 ミガキ
21b			N12	2A	8	浅鉢			2.SY3/1 黑褐色	石英・金雲母・白色粒子	洞部破片 漂緑 ミガキ
21c			N12	2A	8	浅鉢			2.SY3/1 黑褐色	石英・金雲母・白色粒子・黑色粒子・赤色粒子	洞部破片 漂緑 ミガキ
22	13		Q12	3A	8	浅鉢			10YR6/4 にぶい黄褐色	石英・輝石・白色粒子	口縁部ハの字状 沈緑複数条 内面沈緑 1条
23	13		Q12	2A	8	浅鉢			SYRS/6 明赤褐色	石英・金雲母・白色粒子・黑色粒子	口縁部ハの字状 沈緑複数条 内面沈緑 1条
24	13		J12	2A	8	浅鉢			10YR3/1 黑褐色	石英・輝石・金雲母・赤色岩石	口縁部ハの字状 沈緑 3条 ミガキ 朱痕
25	13		N12・Q12	2A	8	浅鉢			10YR4/2 反黄褐色	石英・金雲母	口縁部ハの字状 沈緑 2条 内面沈緑 1条
26	13		Q12	2A	8	浅鉢			10YR5/3 にぶい黄褐色	石英・輝石・白色粒子・赤色粒子	口縁部ハの字状 漂緑 1条 内面沈緑 1条 ミガキ 朱痕
27	13		R12	2A	8	浅鉢			7.SYR5/6 朝褐色	石英・輝石・金雲母・白色岩片	口縁部ハの字状 沈緑 1条 内面沈緑 1条 ミガキ 朱痕
28	13		P12	2A	8	浅鉢			7.SYR5/6 朝褐色	石英・輝石・金雲母・白色粒子	口縁部ハの字状 漂緑 1条 ミガキ
29	13		Q12	2A	8	浅鉢			SYRS/6 明赤褐色	石英・輝石・白色粒子・赤色岩片	口縁部ハの字状 外面無文 内面沈緑 1条 ミガキ
30	13		R12・R13	2A	8	浅鉢	(31.4)		7.SYR4/6 棕色	石英・輝石・白色岩片・赤色岩片	口縁部ハの字状 外面無文 内面沈緑 1条 ミガキ 修補孔
31	12		Q12	2A	8	浅鉢			10YR4/3 にぶい黄褐色	石英・輝石・白色粒子	口縁部ハの字状 外面無文 内面沈緑 1条 ミガキ
32	13		Q12・R12	2A	8	浅鉢			7.SYRS/4 にぶい褐色	石英・輝石・白色粒子	口縁部ハの字状 無文 ミガキ

第7表 繩文時代晚期土器観察表（2）

地図	面版	TP	グリッド	分類	層位	器種	口径	器高	色調	胎土	文様・調整等
33	13		K12	2A	8	浅鉢	(10.8)	5.3	SYR6/6 橙色	石英・輝石・白色岩片	口縁部ハの字状 無文
34	12		P12	2A	8	浅鉢			7.SYRS/6 明褐色	石英・輝石・白色粒子	口縁部ハの字状 外内面文様帯 ミガキ
35	13	TP27	O11	2A	8	浅鉢			7.SYRS/4 にぶい黄褐色	石英・輝石・白色粒子	口縁部ハの字状 内面半截竹管状工具による細沈線
36			N12	2A	8	浅鉢			10YR5/4 にぶい黄褐色	石英・輝石・白色粒子	底部木葉痕
37			O12	2A	8	浅鉢			10YR4/2 反灰褐色	石英・輝石・白色粒子	底部 ミガキ
38	13		N12	2A	8	深鉢	(17.2)		10YR3/2 黒褐色	石英・輝石・白色岩片	沈線1条
39	13		S12	2A	8	深鉢			2.SY3/5 帽オリーブ褐色	石英・輝石・白色粒子・赤色粒子	外面隆起 内面沈線1条 ミガキ
40	13		K12	2A	8	深鉢			7.SYRS/4 にぶい褐色	石英・輝石・白色粒子	外面隆起
41	13		N12	2A	8	深鉢	39.8		SYR5/4 にぶい赤褐色	石英・金青母・白色粒子・黑色粒子・赤色粒子	外面沈線1条 内面沈線1条 ハラナ
42	13		L12	2A	8	深鉢	(39.2)		7.SYR8/6 褐色	石英・輝石	外面沈線1条 内面沈線1条
43	14		O12	2A	8	深鉢			7.SYR5/6 明褐色	石英・白色粒子	沈線1条 ミガキ
44	14	TP27	O12	2A	8	深鉢			7.SYR4/3 褐色	石英・輝石・白色粒子	沈線複数条 保付帯
45	14		R12	2A	8	深鉢			7.SYR5/6 明褐色	石英・輝石・白色粒子・赤色粒子	沈線複数条
46a	14		P12	2A	8	深鉢			7.SYR2/3 帽褐色	石英・金青母・白色粒子・黑色岩片	沈線1条 ミガキ
46b			P12	2A	8	深鉢			10YR3/2 黒褐色	石英・金青母・白色粒子・黑色粒子	頭部破片 無文
47a	14	TP27	P12	2A	8	深鉢	(36.6)		7.SYR4/6 褐色	石英・輝石・白色岩片	無文 推底
47b	TP27		P12	2A	8	深鉢			7.SYR2/1 黒褐色	石英・輝石・白色粒子	頭部破片 無文 推底
47c	TP27		P12	2A	8	深鉢			7.SYR5/6 明褐色	石英・輝石・白色粒子	頭部破片 無文 推底
48	14		K12	2A	8	深鉢			7.SYR5/4 にぶい褐色	石英・輝石・白色粒子	波伏口縁 無文
49	14		K12	2A	8	深鉢			10YR3/1 黒褐色	石英・輝石・白色粒子	無文
50	14		N12	2A	8	深鉢	(34.6)		7.SYR4/6 褐色	石英・輝石・白色粒子	無文 ミガキ
51	14		S12	2A	8	深鉢	(31.4)		SYR4/4 にぶい赤褐色	石英・輝石・白色粒子	無文
52	14		N12	2A	8	深鉢	(41.4)		10YR3/3 帽褐色	石英・輝石・白色粒子	無文 補修孔 保付帯
53a	14		O12	2A	8	深鉢			10YR3/3 帽褐色	石英・輝石・白色粒子	無文
53b			O12	2A	8	深鉢			7.SYR3/2 黒褐色	石英・輝石・白色粒子	頭部破片 無文
54	14	TP27	N11	2A	8	深鉢			7.SYR6/6 橙色	石英・輝石・白色粒子・赤色粒子	無文 ミガキ
55	14		L12	2A	7	深鉢			2.SY3/2 黒褐色	石英・輝石	無文 ミガキ
56	14	TP27	O10	2A	8	深鉢			7.SYR6/6 橙色	石英・輝石・黑色粒子	無文 ミガキ 補修孔
57	14		J12	2A	10	深鉢			7.SYR4/4 褐色	石英・輝石・白色粒子	波伏口縁 無文 ミガキ 補修孔
58a	14		J12	2A	8	深鉢			2.SYR2/2 黒褐色	石英・輝石・白色粒子	外面部模み底 保付帯
58b	14		K12	2A	8	深鉢			2.SY3/3 帽オリーブ褐色	石英・輝石・白色粒子	頭部破片 外面部模み底
59	15	TP27	O10	2A	8	要	(23.4)		SYR4/6 赤褐色	石英・輝石・白色粒子	内面細沈線1条 細密条痕文
60	15		O12	2A	8	要			10YR3/2 黒褐色	石英・白色粒子・赤色岩片	浮線1条 ミガキ
61	15	TP27	O11	2A	8	要			10YR3/2 黒褐色	石英・輝石	内面細沈線1条 推底
62	15		O12	2A	8	要			10YR5/4 にぶい黄褐色	石英・白色粒子・赤色粒子	肩部破片 無文
63	15		N12	2A	8	要			7.SYR5/4 にぶい褐色	石英・白色岩片	肩部破片 無文
64			O12	2A	8	深鉢or壺			7.SYR5/6 明褐色	石英・輝石・白色岩片・赤色粒子	底部網代痕 ミガキ
65			O12	2A	8	深鉢or壺			7.SYR5/4 にぶい褐色	石英・輝石・白色岩片・黑色粒子	底部網代痕
66			P12	2A	8	深鉢or壺			7.SYR5/6 明褐色	石英・輝石・白色岩片・黑色粒子	底部網代痕
67			K12	2A	8	深鉢or壺			7.SYR5/6 明褐色	石英・輝石	底部木葉痕

第8表 繩文時代晚期土器観察表（3）

埠区	面版	TP	グリッド	分類	層位	器種	口径	器高	色調	胎土	文様・調整等
68			Q12	2A	8	深鉢or壺			10YR5/3 にぶい黄褐色	石英・輝石・白色粒子	底部 ミガキ
69			TP25	P12	2A	8	深鉢or壺		7.5YR4/2 灰褐色	石英・輝石・白色粒子	底部 ミガキ
70				N12	2A	8	深鉢or壺		10YR5/3 にぶい黄褐色	石英・金雲母・白色粒子・黒色粒子	底部 ヘラナデ
71				N12	2A	8	深鉢or壺		7.5YR5/6 明褐色	石英・輝石・白色岩片	底部
72				O12	2A	8	深鉢or壺		7.5YR5/4 にぶい褐色	石英・輝石・白色岩片	底部
73a	15		P12	2A	8	直口鉢?			7.5YR5/4 にぶい褐色	石英・輝石・白色粒子	外側三爻文状の文様 内面細沈線1条 ミガキ
73b	15		P12	2A	8	直口鉢?			7.5YR5/4 にぶい褐色	石英・輝石・白色岩片	外側細沈線1条 内面細沈線1条 ミガキ
73c	15		P12	2A	8	直口鉢?			7.5YR5/4 にぶい褐色	石英・輝石・白色粒子	結合部分? 外面細沈線1条 内面細沈線1条 ミガキ
74	15	TP09	K3	2B	8	深鉢			10YR6/4 にぶい黄褐色	金雲母・白色岩片	突堤に良質の斜突
75	15	TP27	O10	2C	8	壺?			7.5YR4/6 棕色	石英・輝石・白色粒子・赤色粒子	頭部破片 無文 ミガキ
76	15		O12	2C	8	壺?			10YR3/2 黒褐色	石英・輝石・白色岩片	頭部破片 無文 ミガキ
77	15		N12	2C	8	深鉢			10YR3/2 黒褐色	石英・輝石・白色粒子・黒色粒子・赤色粒子	頭部破片 無文 ミガキ
78	15		M12	2C	8	深鉢			7.5YR4/6 棕色	石英・輝石・白色粒子	頭部破片 くびれの位置に強いナデ ミガキ
79	15	TP27	O11	2C	7	深鉢			7.5YR6/6 棕色	石英・白色岩片・黒色粒子	頭部破片 無文
80a	15		L4	2C	7	壺?			SYR6/6 棕色	石英・白色粒子・黒色粒子・赤色粒子	頭部破片 ミガキ
80b	15		L4	2C	7	壺?			SYR6/6 棕色	石英・白色粒子・黒色粒子・赤色粒子	頭部破片 ミガキ
81a	15		L4	2D	7	壺?			SYR6/6 棕色	石英・輝石・金雲母・白色岩片・黒色粒子・赤色粒子	頭部破片 ヘラケズリの後ミガキ
81b	15		L4	2D	7	壺?			SYR6/6 棕色	石英・輝石・金雲母・白色岩片・黒色岩片・赤色岩片	頭部破片 ヘラケズリの後ミガキ

※口径・高さの単位はcm ()は推定値

(2) 石器

今回の調査で出土した石器は、縄文時代晚期造構面直上の包含層中から出土したものが主体を占める。剥片を含めた石器の点数は表8とのおりである。石鏃の形態や大きさ、各遺物の出土層位などから鑑みて、これらの石器の時期は縄文時代晚期のものとして妥当であろう。

遺物出土状況

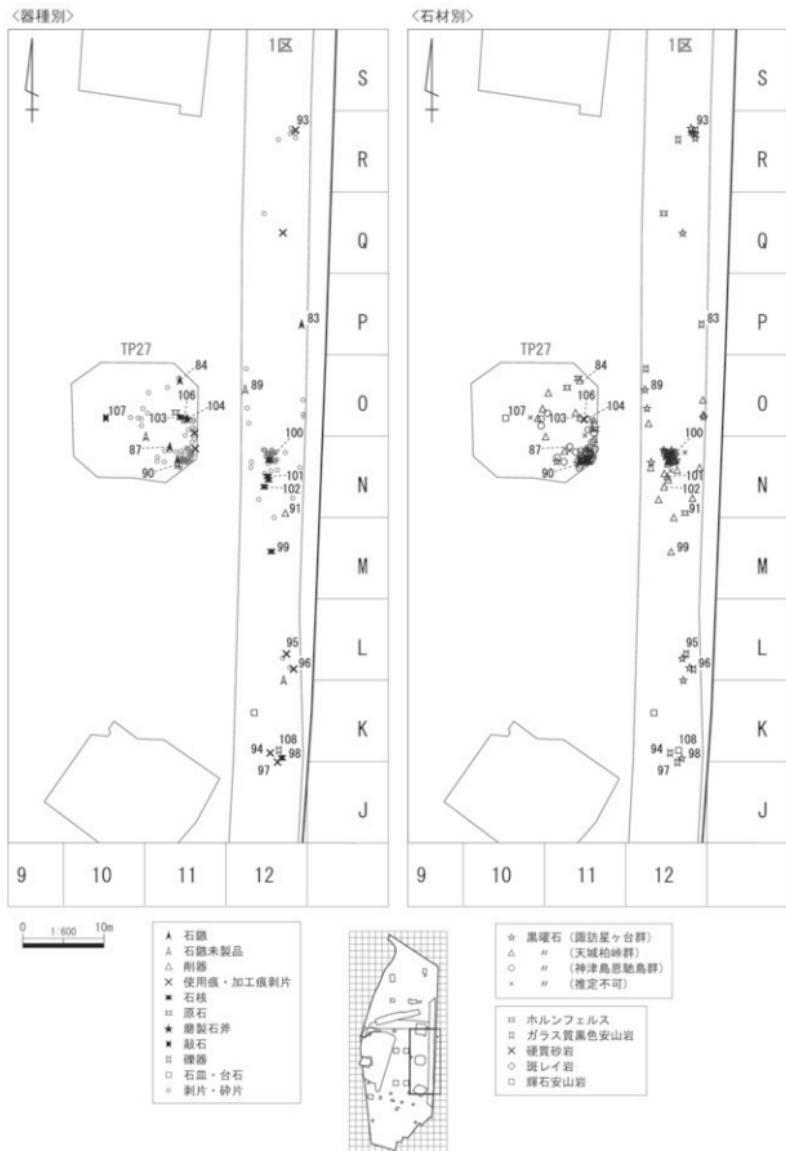
石器は173点出土した。分布の状況は土器とほぼ重なり（第41図）、各器種が満遍なく出土している。6区L4グリッドでは110の台石が地面に置かれた状態で出土した。石材別に見ると、天城柏崎産の黒曜石は1区N12グリッドとTP27に集中している。神津島恩島駆島産の黒曜石はTP27に集中し、1区にはほとんど見られない。ホルンフェルスは6区L4グリッドに集中している（第42図）。

ア 石鏃（第43図82～90 第9表 図版16）

石鏃は9点中7点を図示した。欠損品以外はすべて側縁に段を持つ有茎の飛行機鏃である。

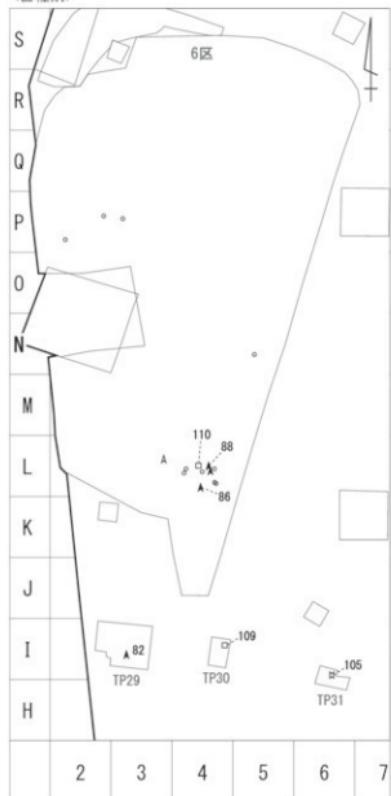
82～84は平基有茎鏃、85は凹基有茎鏃である。82は器体の中央部、83・87は器体の先端部寄りに張り出しを有する。86は小型で、側縁の張り出しが強い凹基有茎鏃である。87は凸基有茎鏃である。82・83・85は部分的に側縁を鋸歯状に整えている。88は欠損した先端部に再加工を施している。

石鏃未製品は5点中2点を図示した。いずれも基部は平基である。89は側縁にも原疊面が残る。

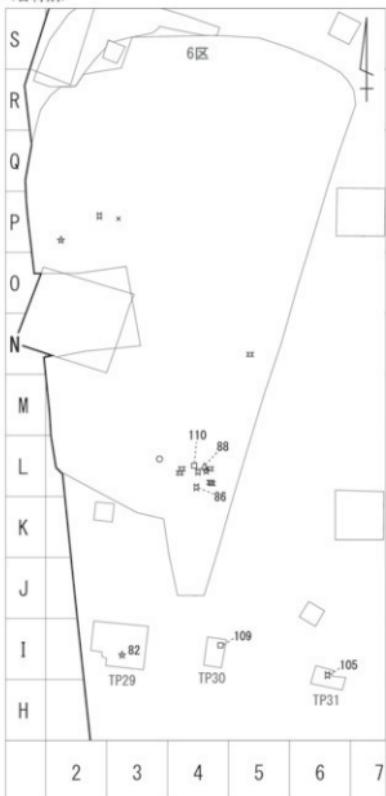


第41図 縄文時代石器器種別・石材別分布図（東側）

〈器種別〉



〈石材別〉

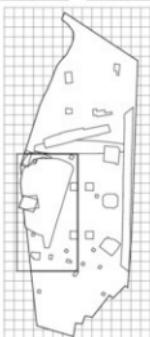


0 1:800 10m

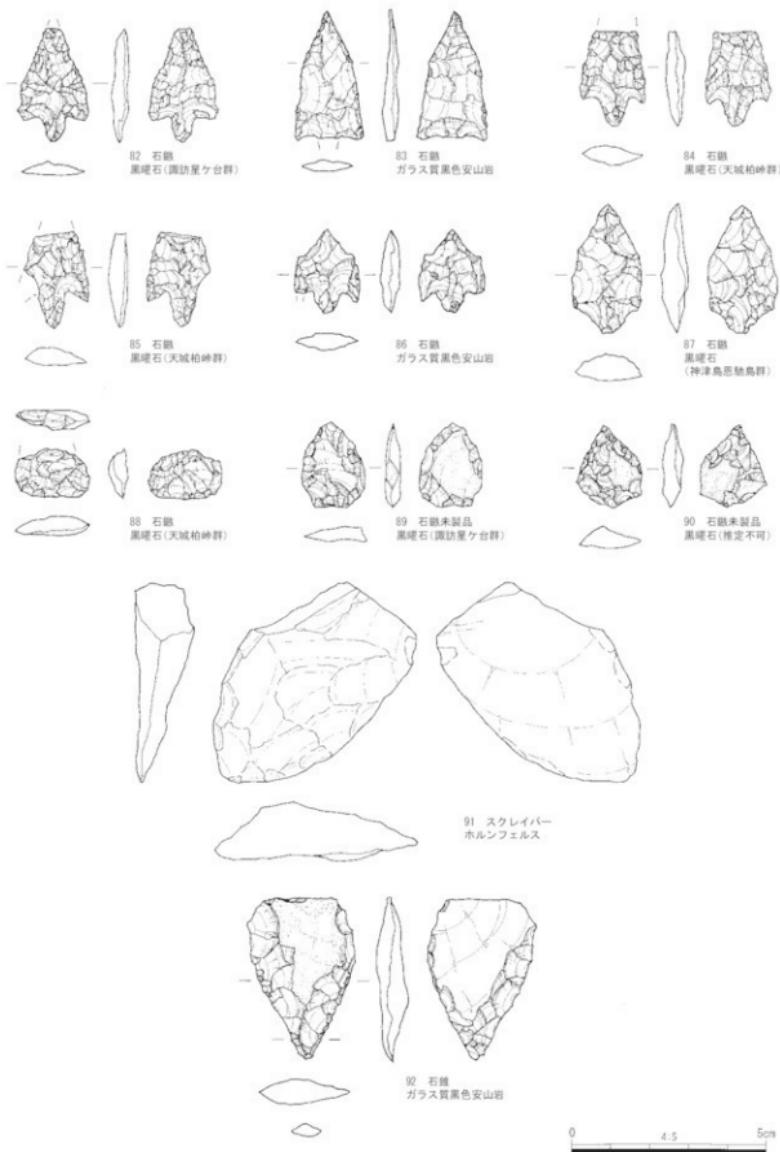
- ▲ 石鏃
- △ 石鏃未製品
- 碓器
- 石皿・台石
- 刻片・碎片

- ★ 黒曜石 (諏訪星ヶ台群)
- △ " (天城柏神群)
- " (神津島恩恵島群)
- × " (推定不可)

- ホルンフェルス
- △ ガラス質黒色安山岩
- 雄石安山岩



第42図 縄文時代石器種別・石材別分布図（西側）



第43図 縄文時代石器実測図（1）

イ スクレイバー (第43図91 第9表 図版16)

半円形の形状を呈する。劣化が著しい。素材剥片の表面の周縁に連続した調整を施して刃部を作出している。

ウ 石錐 (第43図92 第9表 図版16)

素材剥片の周縁に両面から連続した調整を施して短い錐部を作出している。

エ 加工痕剥片 (第44図93・94 第9表 図版16)

5点中2点を図示した。93は器体の全周にわたって調整を施している。94は、表面は右側縁と端部、裏面は両側縁と端部に調整を施している。

オ 使用痕剥片 (第44図95~97 第9表 図版16)

95・96は両側縁、97は右側縁に使用痕が確認できる。

カ 石核 (第44図98~第45図103 第9表 図版16)

7点中6点を図示した。98~102は打面を何度も転移しながら剥片剥離を行っている。99~102は原礫面が多く残っており、原石は当初から小さいものであったと考えられる。いずれの石核も平坦面や原礫面を打面とし、打面調整は行っていない。103は1回だけ打撃を加えて剥片を作出した痕跡が残る。

キ 磨製石斧 (第45図104 第9表 図版17)

斑レイ岩を用いた両凸刃の乳棒状磨製石斧である。刃部の形状は丸みを帯びている。石斧を作る過程で器体全面をよく敲き、よく磨いている。器体上部の両側縁には柄の装着痕が見られる。器体はさらに両側縁から打撃を加えられており、打製石斧としての再利用を試みていた可能性が窺える。

ク 敲石 (第46図105~107 第9表 図版17)

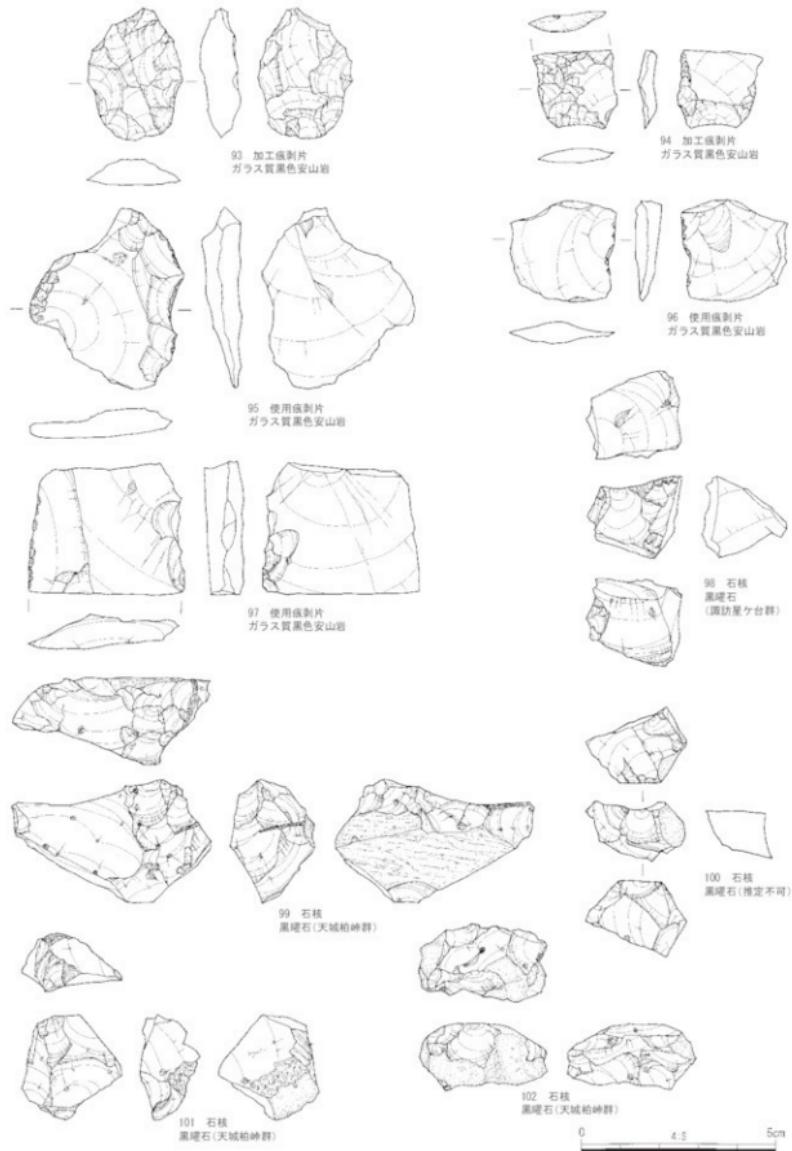
105は上部が欠損している。板状礫の端部を敲石として使用した結果、剥離痕が大きく残存したものである。敲痕は側縁部全体に見られる。敲石として使用した後、端部の裏面に剥離を施している。106は扁平で緻密な梢円形の硬質砂岩を用いた敲石である。平坦な片面のみ敲痕が見られる。107は輝石安山岩を用いた敲石である。球形の自然礫の尖った部分に敲痕が見られる。

ケ 碓器 (第46図108 第9表 図版17)

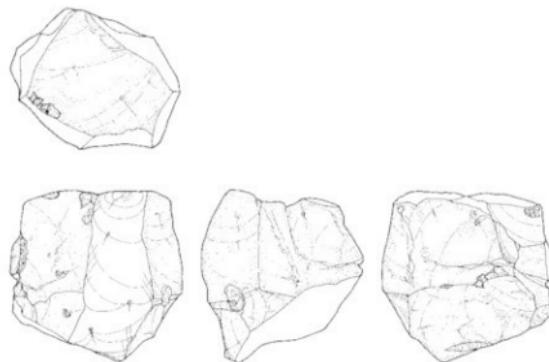
輝石安山岩を用いた碓器である。角礫の長辺に大きな剥離を施して、急角度で片刃の刃部を作出している。刃部の形状は直線的である。

コ 石皿・台石 (第47図109・110 第9表 図版17)

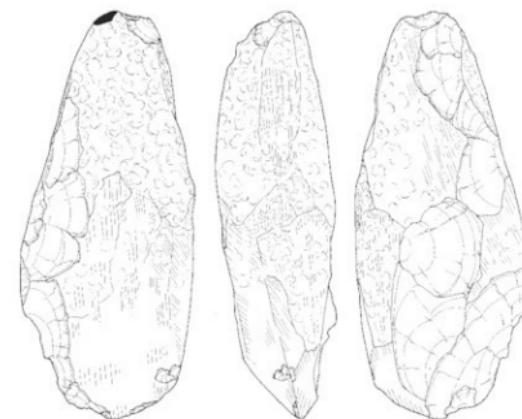
3点中2点を図示した。109は片面中央部に凹んだ磨面が見られる亜角礫の石皿である。110は部分的に敲痕が見られる扁平な大型の台石である。



第44図 縄文時代石器実測図（2）



100 石核
黒曜石(天城柏崎群)

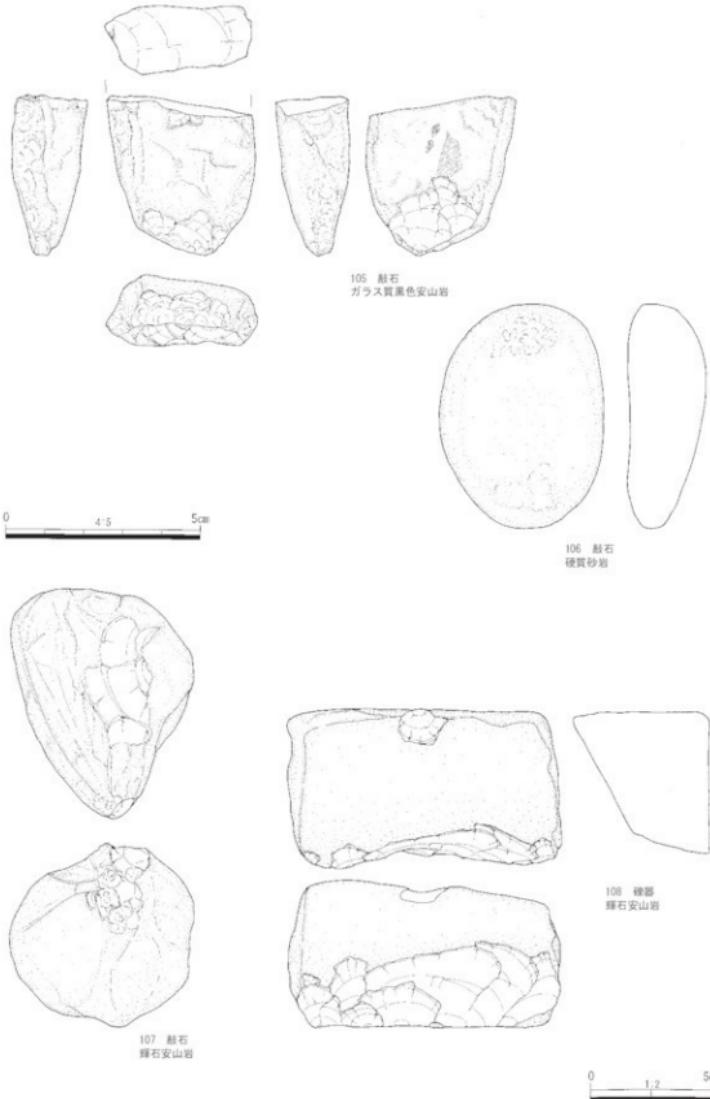


104 磨製石斧
黒曜石

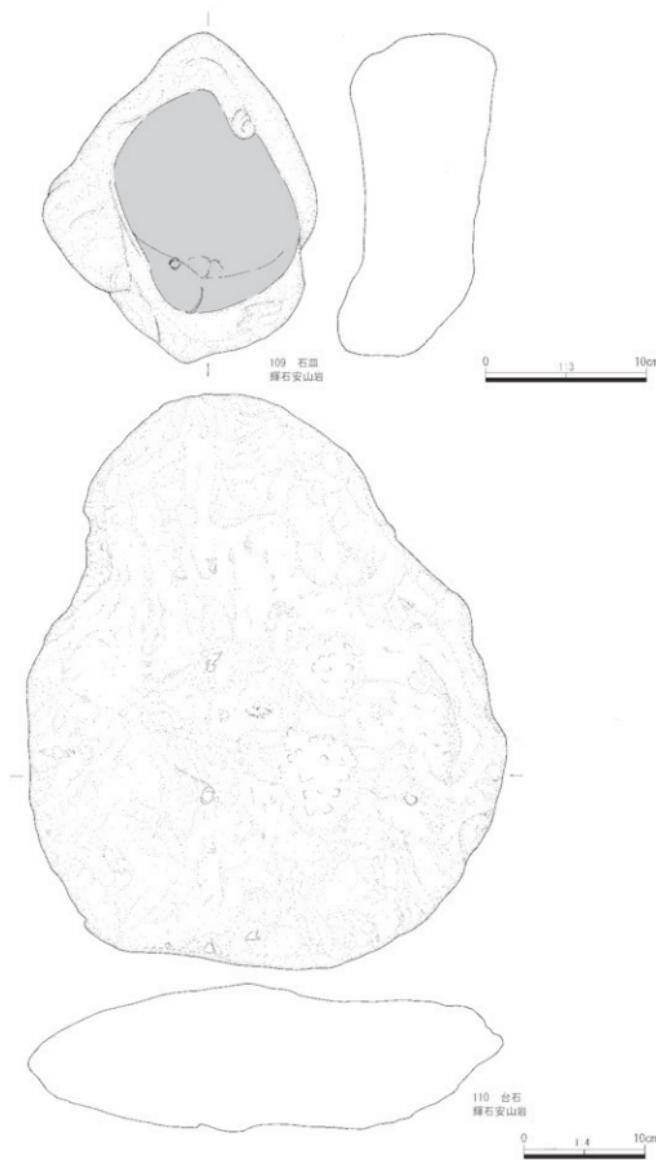


0 4 5 5cm

第45図 縄文時代石器実測図（3）



第46図 縄文時代石器実測図（4）



第47図 縄文時代石器実測図（5）

第9表 繩文時代晚期石器一覧表

件番号	図版番号	遺物番号	層位	グリッド	器種	石材	推定產地	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重量(g)	X座標	Y座標	Z座標
82	16	1166	7	L3	石器	Ob	SMD	(29.0)	18.0	4.0	(1.58)	-82315.917	37652.542	377.982
83	16	491	8	P12	石器	GAn		(33.0)	17.5	4.0	(1.77)	-82246.265	37749.324	379.722
84	16	944	6	O11	石器	Ob	AGKT	(24.0)	17.0	5.0	(1.67)	-82253.151	37734.337	379.469
85	16	934	表探		石器	Ob	AGKT	(24.0)	(16.0)	5.0	(1.42)	-	-	-
86	16	1594	7	L4	石器	GAn		21.0	(17.0)	5.0	(1.32)	-82288.502	37664.721	378.077
87	16	746	7	N11	石器	Ob	KZOB	33.0	18.0	7.0	2.73	-82261.334	37733.102	379.100
88	16	1603	7	L4	石器	Ob	AGKT	(12.0)	19.0	5.0	(1.02)	-82285.016	37666.031	378.509
89	16	200	8	O12	石器未製品	Ob	SMD	21.0	16.0	4.0	1.45	-82254.271	37742.382	379.565
90	16	1008	7	N11	石器未製品	Ob	不可	21.0	17.0	5.5	1.28	-82263.478	37734.056	379.065
91	16	637	8	N12	削器	Hor		51.0	52.0	15.0	31.26	-82269.471	37741.327	379.046
92	16	933	表探		石器	GAn		41.5	28.0	8.0	7.79	-	-	-
93	16	7	8	R12	加工痕剥片	GAn		33.0	24.0	10.0	7.53	-82222.389	37748.579	379.574
94	16	423	8	K12	加工痕剥片	GAn		(20.0)	22.0	5.0	(2.55)	-82298.968	37745.459	377.703
95	16	343	8	L12	使用痕剥片	GAn		46.0	36.0	10.0	12.41	-82286.801	37747.463	378.518
96	16	398	8	L12	使用痕剥片	GAn		27.0	26.0	7.0	5.23	-82288.652	37748.338	378.457
97	16	425	8	J12	使用痕剥片	GAn		(34.0)	39.0	10.0	(18.19)	-82300.102	37746.368	377.639
98	16	424	8	K12	石核	Ob	SMD	21.0	24.0	22.0	7.69	-82299.570	37746.909	377.714
99	16	652	8	M12	石核	Ob	AGKT	31.0	51.0	22.0	26.24	-82274.207	37745.593	378.249
100	16	301	8	N12	石核	Ob	不可	15.0	26.0	19.5	5.53	-82262.953	37745.321	379.422
101	16	186	8	N12	石核	Ob	AGKT	27.0	26.0	15.0	7.12	-82264.966	37745.133	379.366
102	16	182	8	N12	石核	Ob	AGKT	17.0	33.0	20.0	8.19	-82266.242	37744.724	379.312
103	16	887	8	O11	石核	Ob	AGKT	44.0	44.0	41.0	70.75	-82257.709	37734.409	379.101
104	17	1028	7	O11	磨製石斧	Ga		104.0	44.5	31.0	198.43	-82257.887	37735.258	379.155
105	17	1131	7	16	触石	GAn		(41.0)	(38.0)	(19.0)	(37.65)	-82319.279	37686.241	377.276
106	17	813	6	O11	触石	HSS		57.0	41.0	20.0	70.11	-82257.980	37734.866	379.125
107	17	890	8	O10	触石	An(Py)		94.0	76.0	75.0	560.0	-82257.775	37725.233	379.169
108	17	421	8	K12	硸器	An(Py)		66.0	112.0	59.0	680.0	-82298.646	37746.515	377.696
109	-	1130	7	L4	石皿	An(Py)		168.0	208.0	107.0	3830.0	-82314.385	37668.698	377.750
110	17	1729	7	L4	台石	An(Py)		463.0	394.0	122.0	28000.0	-82284.960	37664.374	378.470

※計測値は、折損した遺物の現存値を()付きで示している。

5 中近世の遺構と遺物

（1）遺構

第2層上面で溝状遺構10条、土坑16基を検出した（第48図）。これらの遺構の時期は、過去に行われた周辺の遺跡の調査をもとに中近世以降に位置づけた。いずれの遺構も機能は不明で、遺物は出土しなかった。

ア 溝状遺構（第49～51図 第10表 図版11）

平面形は直線状を基本とするが、緩やかにカーブするものが多い。長さは最大で約11m、幅は約1.2mをはかる。横断面形は皿形を呈する。検出面からの深さは平均で12cmと残存状態は悪い。溝状遺構は主に調査区中央の台地上に分布している。配置に規則性は見られない。

イ 土坑（第52～54図 第11表 図版11）

平面形はすべて円形を呈する。直径は0.9～1.55mをはかる。壁の立ち上がりはほとんどがほぼ直角で、底面は平坦である。土坑は調査区中央の台地上と南側の斜面地に分布している。これらと同じ形態の土坑は静岡県東部地域の遺跡で多く検出されている。

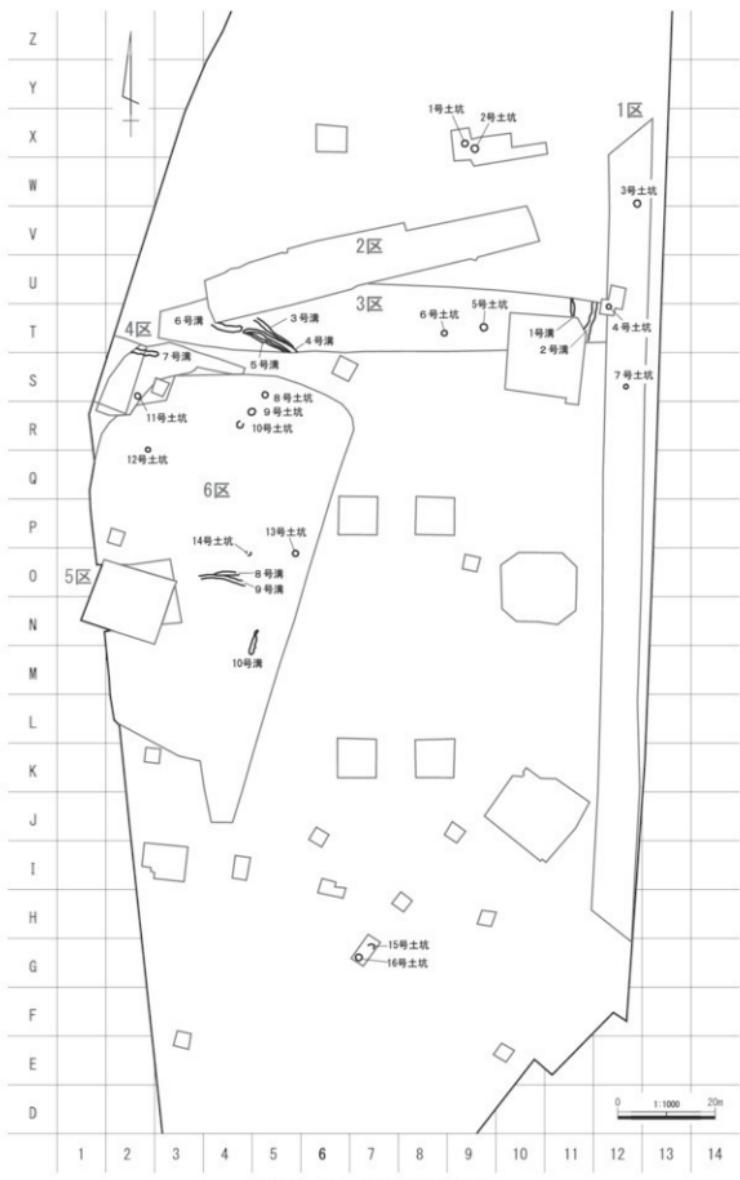
第10表 中近世溝状遺構計測表

遺構番号	地区	グリッド	長さ (m)	幅 (m)	深さ (m)
1号	3区	T 11・U 11	3.65	0.70	0.10
2号	3区	T 11・T 12・U 11・U 12	7.12	1.10	0.10
4号	3区	T 5	8.40	0.90	0.05
4号	3区	T 4・T 5	11.00	0.70	0.05
5号	3区	T 4・T 5	8.50	0.55	0.05
6号	3区	T 4	5.10	1.20	0.10
7号	4区	S 2・S 3・T 2・T 3	7.60	1.00	0.15
8号	6区	0 4	4.30	0.80	0.08
9号	6区	0 3・0 4	9.00	0.70	0.11
10号	6区	M 4・M 5・N 4・N 5	5.08	0.80	0.22

第11表 中近世土坑計測表

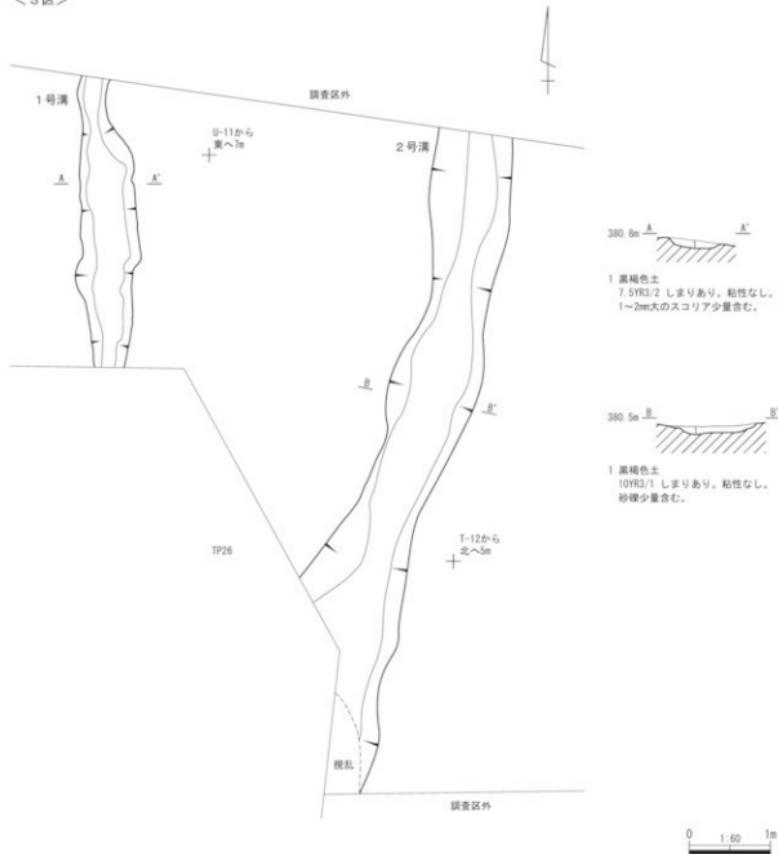
遺構番号	地区	グリッド	口径 (m)	底径 (m)	深さ (m)
1号	TP4	X 9	1.22	1.04	0.21
2号	TP4	X 9	(1.30)	1.22	0.75
3号	1区	V12・W12	1.51	1.36	0.28
4号	1区	T 9	1.12	1.01	0.20
5号	3区	T 8	1.50	1.28	0.34
6号	3区	T 8	1.14	0.86	0.28
7号	1区	S12	0.94	0.76	0.08
8号	6区	S 5	1.25	0.91	0.15
9号	6区	R 4・R 5	1.55	0.99	0.37
10号	6区	R 4	1.39	0.92	1.25
11号	4区	S 2	1.29	1.14	0.40
12号	6区	Q 2・R 2	1.01	0.88	0.23
13号	6区	0 5	1.25	1.09	0.22
14号	6区	0 4	1.08	0.97	0.27
15号	TP35	0 7	1.23	1.12	0.30
16号	TP35	0 7	1.38	1.24	0.39

※（ ）は推定値



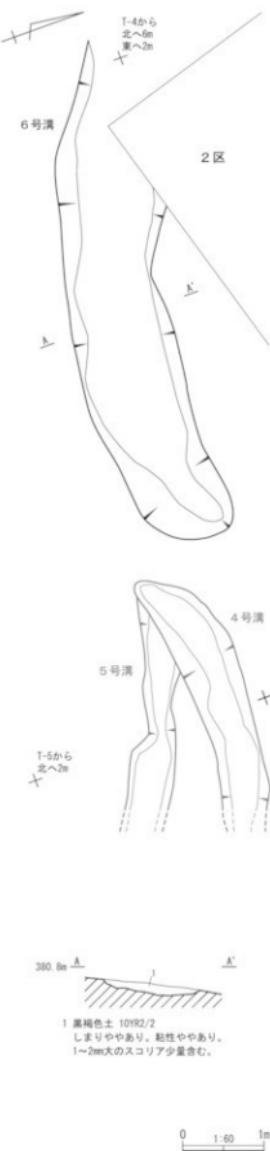
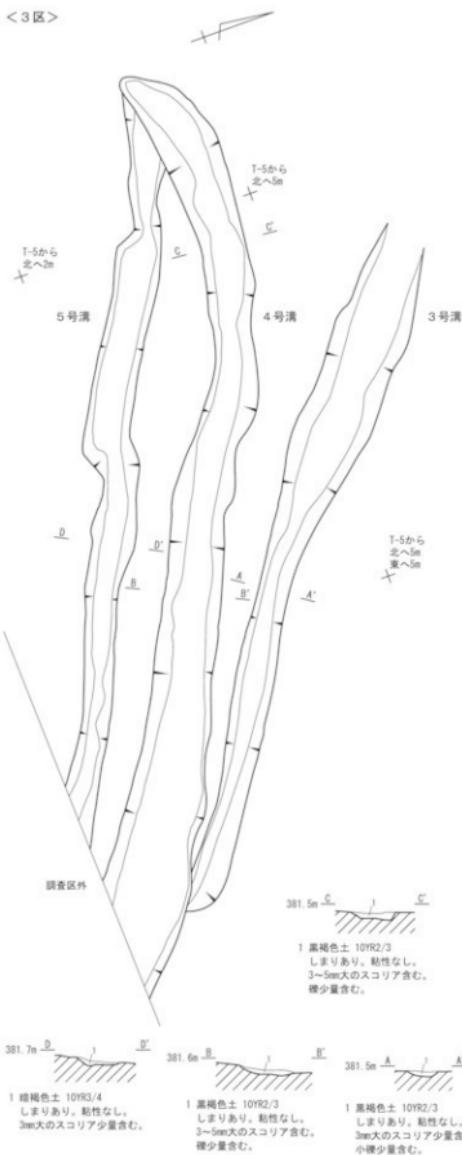
第48図 中近世以降遺構配置図

<3区>



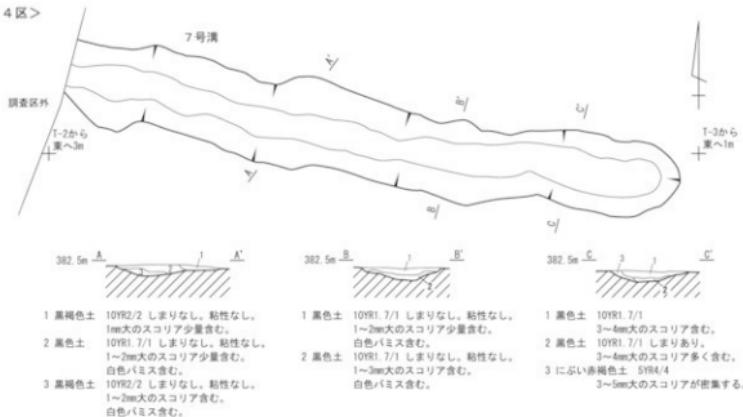
第49図 溝状遺構実測図 (1)

<3区>

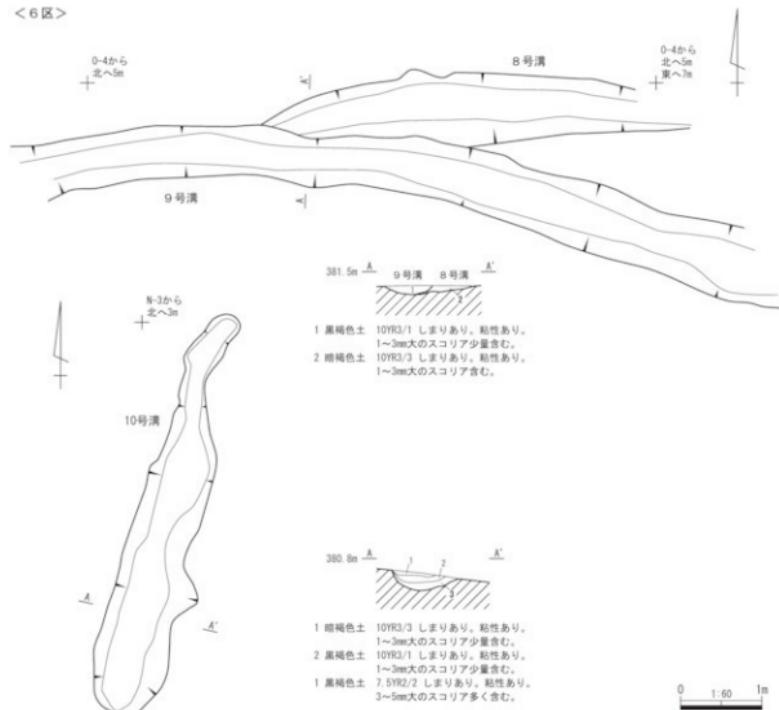


第50図 溝状遺構実測図（2）

<4区>

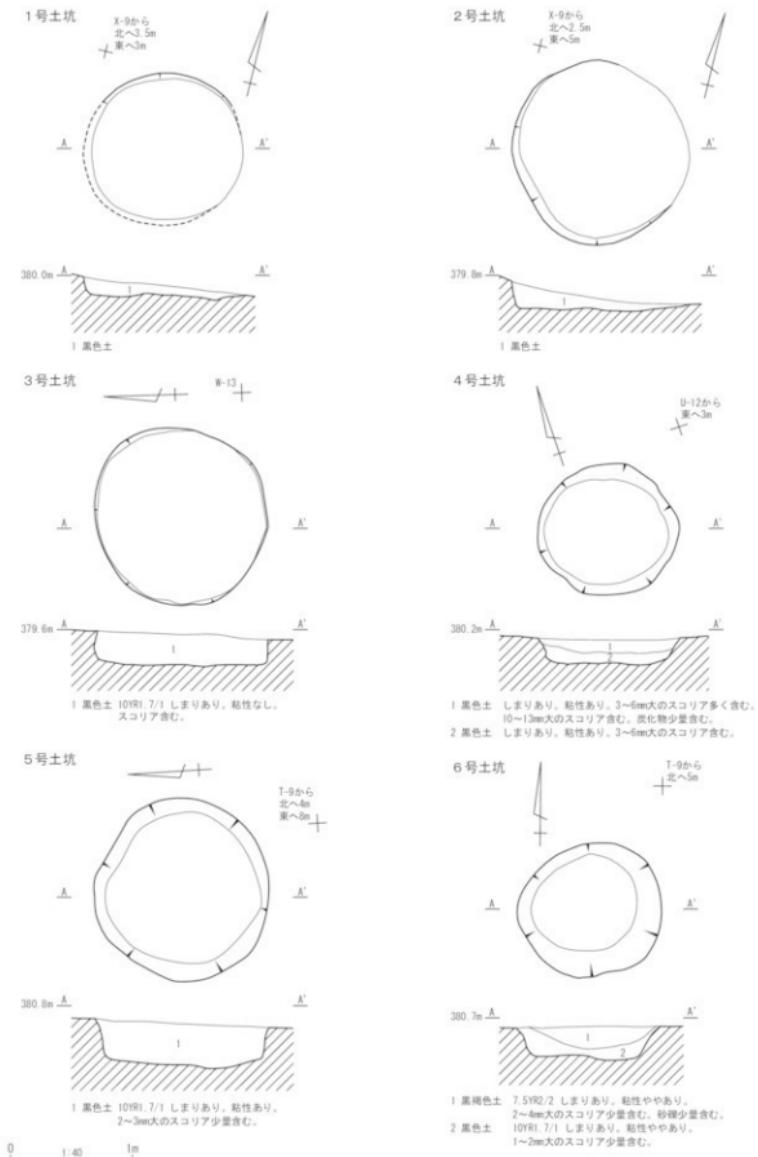


<6区>

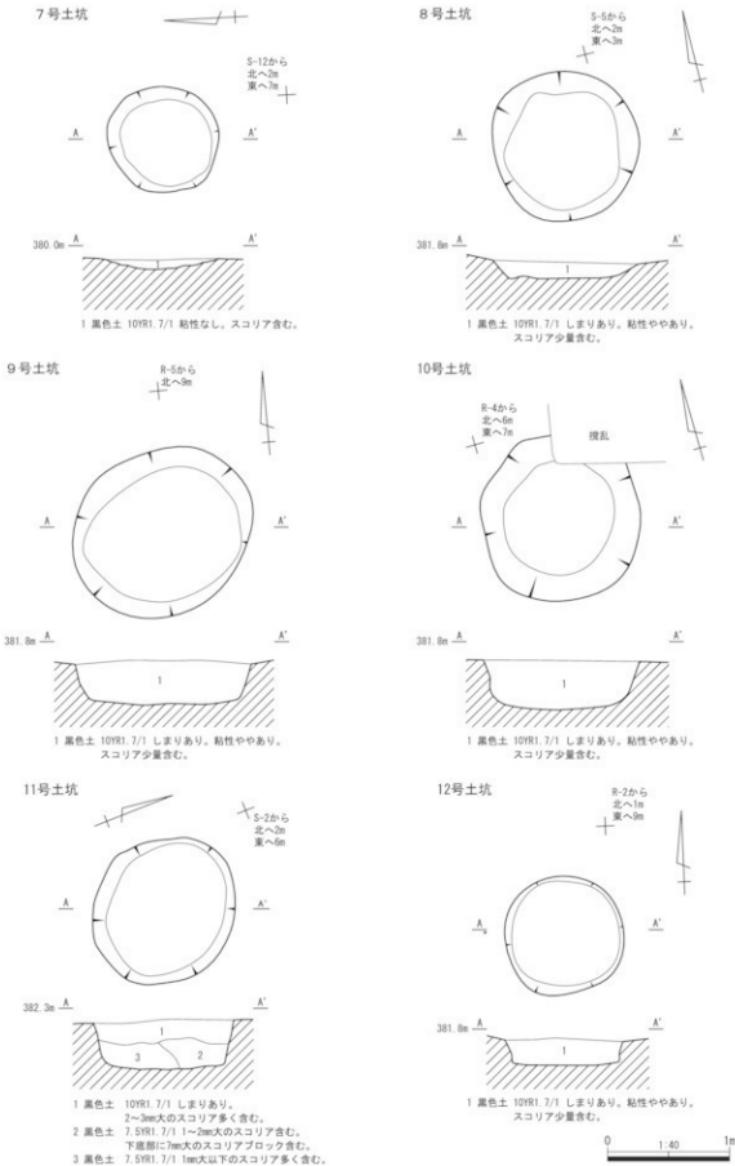


第51図 溝状遺構実測図（3）

第3節 調査の成果

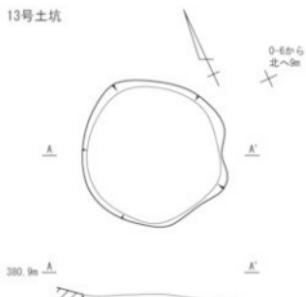


第52図 土坑実測図（1）



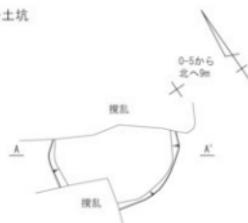
第53図 土坑実測図 (2)

13号土坑



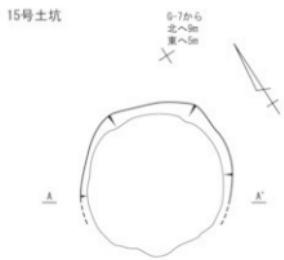
1 黒色土 10YR1.7/1 しまりあり。粘性ややあり。
スコリア少量含む。

14号土坑



1 黒色土 10YR1.7/1 しまりあり。粘性ややあり。
スコリア少量含む。

15号土坑



1 黒色土 10YR1.7/1 しまりあり。粘性ややあり。
スコリア少量含む。

16号土坑



1 黒色土 しまりあり。スコリア多く含む。
2 黒色土 しまりあり。スコリア少量含む。

0 1:40 1m

第54図 土坑実測図（3）

（2）遺物

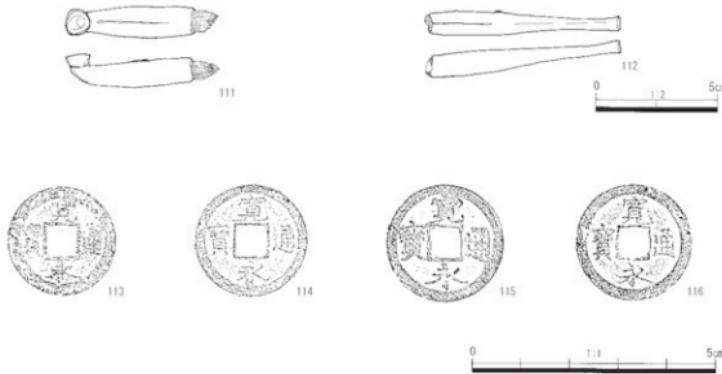
煙管と銭貨を表面採取した。本遺跡の調査前は墓地として利用されていたため、いずれも近世墓の副葬品と考えられる。

ア 煙管（第55図111・112 図版17）

111は雁首、112は吸口である。材質はともに青銅製である。ともに羅字に装着するための木質部が残存している。雁首の火皿が小さいこと、脂返しの弯曲はほとんどなく、火皿の下に直角に取り付いていることから、古泉編年第VI段階（古泉1983）に相当する19世紀のものと推定される。

イ 銭貨（第55図113～116 図版17）

近世銭貨の寛永通寶4枚を採取した。採取時は上から116→115→114→113の順で重ねられていた。いずれも銅を素材としている。113は残存状況が悪く銭銘が判断できない。114～116は銭銘が細手のいわゆる新寛永銭（初鑄1697年）である。



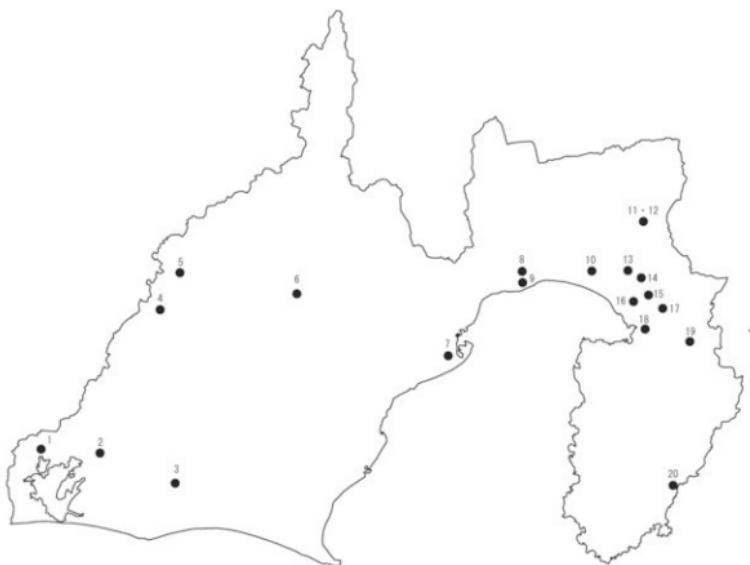
第55図 近世遺物実測図

第4節 宮ノ台遺跡のまとめ

本遺跡の調査成果を以下に述べてゆく。

1点目は、縄文時代早期後葉の土器が畠岡溶岩流直上の黒褐色土層から出土したことである。このことは溶岩流の形成時期や、人間が溶岩台地上に住み始めた時期を検討する上で重要な手掛かりになる。最も多く出土したのは打越式土器である。この型式の土器は、本遺跡と同じ第二東名高速道路建設に伴って発掘調査を実施した裾野市下ノ大窪遺跡（No.146地点）、同佛ヶ尾遺跡（No.147地点）で竪穴住居内から出土している。打越式土器を使用した一大勢力が裾野市域の愛鷹山東麓に存在し、その影響が御殿場市域にも拡がっていたことは想像に難くない。

2点目は、縄文時代晚期後半の浮線文系土器が砂沢スコリアの直上で多く出土し、同一尾根上に立地する関屋塚遺跡に続く散布地であったことが確認できたことである。1955年に永峯光一氏を主に調査された長野県小諸市氷遺跡から出土した資料をもとに、中部高地の縄文時代終末期の土器型式である氷I式・II式が設定された（永峯1969）。1980年代に入ると、その細分案として、先述の型式に先行する女鳥羽川様式、離山様式が提唱され、浮線文系土器の型式と編年が確立していった。（設楽1982・石川1985・



- 1 畠塙遺跡
- 2 岡の平遺跡
- 3 見性寺遺跡
- 4 平塙・上皆戸遺跡
- 5 向市塙遺跡
- 6 下開戸遺跡
- 7 津水天王山遺跡
- 8 山王遺跡
- 9 北久保遺跡
- 10 恵川遺跡
- 11・12 宮ノ台遺跡・関屋塚遺跡
- 13 長久保城址
- 14 反畠遺跡
- 15 中・手弘遺跡
- 16 矢崎遺跡
- 17 向原遺跡
- 18 珠野遺跡
- 19 大平C遺跡
- 20 鰐宮遺跡

第56図 浮線文系土器出土遺跡分布図



第57図 内面口唇部の施文模式図

中沢1991他）。浮線文系土器は静岡県内では東部地域を中心に県下全域で出土している（第56図）。遺跡は主に河川沿いの低湿地、河岸段丘上、後背湿地に立地している。しかし遺跡当たりの出土数は一部の遺跡を除いては少量である。

本遺跡から出土した浮線文系土器は以下の特徴が見られる。

- 2条の平行沈線の間の粘土、あるいは沈線の直上・直下の粘土を隆起させて浮線を作出する。浮線の断面形は蒲鉾形を呈する。
- 浮線の交差は少なく、入り組んだモチーフの文様帶は見られない。
- 全般に精製品が多い。

以上の点から、本遺跡で出土した土器の型式は、第3章第1節で述べた中沢道彦氏の仮称する「閑屋塚式」に近いものと考えられる。但し、閑屋塚遺跡では出土しなかった口縁部が内弯もしくは屈曲する浅鉢14~17が出土している。

また、内面口唇部の施文は以下のように分類される（第57図）。

- ① 2条の平行沈線の間の粘土、あるいは沈線の直上・直下の粘土を隆起させて浮線を作出する。この技法で施文するのは口縁部が大きく開く浅鉢に限られる。
- ② 沈線を1条引き、施文によってできた上部の段を口縁部とともにナデて消している。このため、口縁部の断面形は階段状となる。これは①より新しい技法になると考えられる（註）。また、この技法は外面口縁部にも適用される。
- ③ 沈線を1条引く。または細沈線を1条引く。
- ④ 無文

内面口唇部の施文あるいは調整技法のバリエーションが地域差や時期差を示すものなのかは明らかではないが、本遺跡から出土した浮線文系土器は比較的単純な組成を示している。また、本遺跡では東海地方の土器である五貫森式土器が出土し、「閑屋塚式」土器との併行関係を裏付けた。

本遺跡から出土した浮線文系土器は、包含層資料ではあるが、時間幅が少なく一括性の高いものであることが、層位的にも型式的にも証明することができた。今後の資料の増加を待って、浮線文系土器のさらなる検討を進めていきたい。

（註）設楽博己氏の御教示による。

<参考文献>

- 石川日出志1985「中部地方以西の縄文時代晚期浮線文土器」『信濃』37-4
- 上杉 陽・木越邦彦1986「富士黒色土層の14C年代」『火山』31-1
- 小野真一・鈴木恒治・石谷紘一1978「関屋塚遺跡－一般国道246号バイパス埋蔵文化財調査報告」
- 古泉 弘1983「江戸の街の出土遺物－その展望－」『季刊考古学』第13号
- 御殿場市教育委員会1982「御殿場市史」別巻I 考古・民俗編
- 御殿場市文化財調査委員会1959「文化財のしおり」第1集
- 笹津備洋1962「静岡県東部における縄文文化終末期の遺跡について」『史学』35-1
- 静岡県1994「静岡県史」通史編1 原史・古代編
- 静岡県1990「静岡県史」資料編 考古一
- 静岡県1992「静岡県史」資料編 考古三
- 設楽博己1982「中部地方における弥生土器の成立過程」『信濃』34-4
- 篠原 武2011「第7章 富士山の火山活動と遺跡の消長・分布について」「上墓地新屋敷遺跡」
富士吉田市教育委員会
土 隆一1978「II 表層地質図」
- 『北駿開発地域土地分類基本調査 御殿場』静岡県農地森林部農地企画課
- 津屋弘達1971「富士山の地形・地質」「富士山 富士山総合学術調査報告書」富士急行株式会社
- 長井雅史・高橋雅史2008「箱根火山の地質と形成史」
- 「神奈川県立博物館調査研究報告（自然科学）」第13号 神奈川県立生命の星・地球博物館
- 中沢道彦1991「冰式土器をめぐる研究史（一）」『信濃』43-5
- 中沢道彦1993「『女鳥羽川式』生成小考」「第1回東海考古学フォーラム豊橋大会
突帯文土器から条痕文土器へ」
- 中沢道彦2010「縄文時代晚期末浮線文土器の広域的变化と器種間交渉」
菊池徹夫編『比較考古学の新地平』
- 永峯光一1969「氷遺跡の調査とその研究」「石器時代」9
- 永峯光一・小林青樹1995「氷遺跡第二次調査概要研究報告」『信濃』47-4
- 永峯光一編1998「氷遺跡発掘調査資料図説」
- 中村康二郎・片平 刚2001「中田遺跡（III次・IV次調査）」御殿場市教育委員会
- 増子康眞1996「五貫森式土器」「日本土器事典」
- 宮地直道・富樫茂子・千葉達朗2004「富士火山東斜面で2900年前に発生した山体崩壊」『火山』49-5
- 宮地直道2007「過去1万1000年間の富士火山の噴火史と噴出率、噴火規模の推移」
『富士火山』山梨県環境科学研究所
- 山元孝広・高田 亮・石塚吉浩・中野 俊2005「放射線炭素年代測定による富士火山噴出物の再編年」
『火山』50-2
- 由井将雄・藤井敏嗣1989「愛鷹火山の地質」「東京大学地震研究所彙報」第64冊第2号

〈附編〉

宮ノ台遺跡（第二東名No.159地点）出土黒曜石産地推定結果

独立行政法人沼津工業高等専門学校名誉教授 望月明彦

- 1 分析法 エネルギー分散蛍光X線分析法(EDX)
- 2 分析装置 セイコーインスツルメンツ卓上型蛍光X線分析計 SEA-2110L
- 3 分析条件 管電圧：50kV 管電流：自動設定 測定時間：240sec 雰囲気：真空 照射径：10mm
検出器 Si (Li) 半導体検出器
- 4 測定元素 Al (アルミニウム)、Si (ケイ素)、K (カリウム)、Ca (カルシウム)、Ti (チタン)、Mn (マンガン)、Fe (鉄)、Rb (ルビジウム)、Sr (ストロンチウム)、Y (イットリウム)、Zr (ジルコニウム)
- 5 分析法の特徴 非破壊分析、多元素同時分析、前処理不要、迅速分析、操作が簡単
- 6 産地推定法

- (1) 得られた蛍光X線スペクトル強度を元素記号で表すとする。

二つの方法とも以下の指標を用いる。

指標 $\text{Sum} = \text{Rb} + \text{Sr} + \text{Y} + \text{Zr}$ とする。

Rb分率 = Rb/Sum

Sr分率 = Sr/Sum

Zr分率 = Zr/Sum

$\text{Mn} * 100/\text{Fe}$

$\log(\text{Fe}/\text{K})$

- (2) 産地のシートに上げた黒曜石産地から、産地原石を採取し、測定する。

- (3) 測定結果から上記の指標を算出する。

- (4) 以上から、産地原石に関するデータベースを作成する。

- (5) 下記の二つの方法で産地推定を行う。

- ア 判別図法(判別図のシート参照)

用いる指標 図1 横軸: Rb分率、縦軸: Mn/Fe

図2 横軸: Sr分率、縦軸: $\log(\text{Fe}/\text{K})$

特長 簡単な計算であり、誰にでも作成可能。視覚的に確認でき、分かりやすい。

推定方法 遺跡出土試料を蛍光X線分析し、指標を計算。

指標を図にプロットする。

重なった原石産地を推定結果とする。

- イ 判別分析(推定結果表参照)

用いる指標 算出された指標全て

特長 各産地との類似度を距離で算出

推定方法 判別図法では遺跡出土試料と重なっている産地を推定結果とする。

この産地は試料と2次元的に最も距離が近い。

判別分析ではこの距離を数学的にn次元で計算する。

試料と最も距離（マハラノビス距離）が近い産地を推定結果とする。

この距離から、各産地に属する確率を計算する。

- 7 対象遺跡 宮ノ台遺跡（第二東名No.159地点）

宮ノ台遺跡（No.159地点）出土黒曜石製石器産地推定結果一覧表

判別図法・判別分析からの最終推定結果

判別図法による推定結果と判別分析による推定結果

研究室 年間通番	分析番号	遺物番号	推定産地	判別図 判別群	判別分析		
					第1候補地		
					判別群	距離	確率
MK13-00001	MND-1	746	神津島恩島群	KZOB	KZOB	10.79	1 KZSN 38.25 0
MK13-00002	MND-2	934	天城柏崎群	AGKT	AGKT	1.27	1 HNKLT 118.36 0
MK13-00003	MND-3	944	天城柏崎群	AGKT	AGKT	2.08	1 HNKLT 134.96 0
MK13-00004	MND-4	1053	天城柏崎群	AGKT	AGKT	2.62	1 HNKLT 124.63 0
MK13-00005	MND-5	1166	諭訪星+台群	SWHD	SWHD	4.34	1 WDTN 129.08 0
MK13-00006	MND-6	1603	天城柏崎群	AGKT	AGKT	7.48	1 HNKLT 141.93 0
MK13-00007	MND-7	1604	諭訪星+台群	SWHD	SWHD	8.13	1 WDTN 125.11 0
MK13-00008	MND-8	200	諭訪星+台群	SWHD	SWHD	9.14	1 SBIY 64.66 0
MK13-00009	MND-9	403	諭訪星+台群	SWHD	SWHD	4.92	1 SBIY 65.42 0
MK13-00010	MND-10	858	天城柏崎群	AGKT	AGKT	6.72	1 HNKLT 141.28 0
MK13-00011	MND-11	1008	推定不可	推定不可			推定不可
MK13-00012	MND-12	1935	神津島恩島群	KZOB	KZOB	5.49	1 KZSN 73.77 0
MK13-00013	MND-13	182	天城柏崎群	AGKT	AGKT	6.91	1 HNKLT 114.01 0
MK13-00014	MND-14	183	天城柏崎群	AGKT	AGKT	6.03	1 KKOI 120.56 0
MK13-00015	MND-15	186	天城柏崎群	AGKT	AGKT	1.65	1 HNKLT 118.3 0
MK13-00016	MND-16	241	諭訪星+台群	SWHD	SWHD	10.46	1 WDTN 80.84 0
MK13-00017	MND-17	301	推定不可	推定不可			推定不可
MK13-00018	MND-18	424	諭訪星+台群	SWHD	SWHD	7.51	1 WDTN 78.83 0
MK13-00019	MND-19	652	天城柏崎群	AGKT	AGKT	4.56	1 HNKLT 138.25 0
MK13-00020	MND-20	887	天城柏崎群	AGKT	AGKT	14.39	1 HNKLT 126.55 0
MK13-00021	MND-21	786	天城柏崎群	AGKT	AGKT	9.71	1 HNKLT 111.58 0
MK13-00022	MND-22	469	諭訪星+台群	SWHD	SWHD	8.25	1 WDTN 76.79 0
MK13-00023	MND-23	967	神津島恩島群	KZOB	KZOB	4.19	1 KZSN 46.55 0
MK13-00024	MND-24	1103	神津島恩島群	KZOB	KZOB	4.87	1 KZSN 47.37 0
MK13-00025	MND-25	3	諭訪星+台群	SWHD	SWHD	12.19	1 WDTN 69.96 0
MK13-00026	MND-26	6	諭訪星+台群	SWHD	SWHD	2.97	1 SBIY 100.2 0
MK13-00027	MND-27	15	諭訪星+台群	SWHD	SWHD	5.6	1 SBIY 56.8 0
MK13-00028	MND-28	199	諭訪星+台群	SWHD	SWHD	5.24	1 WDTN 85.55 0
MK13-00029	MND-29	218-2	推定不可	推定不可			推定不可
MK13-00030	MND-30	230	推定不可	推定不可			推定不可
MK13-00031	MND-31	231	諭訪星+台群	SWHD	SWHD	17.09	1 SBIY 117.74 0
MK13-00032	MND-32	232	天城柏崎群	AGKT	AGKT	7.49	1 HNKLT 136.43 0
MK13-00033	MND-33	233	諭訪星+台群	SWHD	SWHD	7.56	1 SBIY 99.66 0
MK13-00034	MND-34	267	天城柏崎群	AGKT	AGKT	11.94	1 HNKLT 131.35 0
MK13-00035	MND-35	296	諭訪星+台群	SWHD	SWHD	12.31	1 SBIY 64.47 0
MK13-00036	MND-36	297	諭訪星+台群	SWHD	SWHD	13.25	1 SBIY 66.26 0
MK13-00037	MND-37	298	諭訪星+台群	SWHD	SWHD	12.41	1 WDTN 65.21 0
MK13-00038	MND-38	309	天城柏崎群	AGKT	AGKT	3.34	1 HNKLT 106.64 0
MK13-00039	MND-39	326	諭訪星+台群	SWHD	SWHD	2.94	1 SBIY 72.39 0
MK13-00040	MND-40	344	諭訪星+台群	SWHD	SWHD	1.91	1 SBIY 78.14 0
MK13-00041	MND-41	399	諭訪星+台群	SWHD	SWHD	3.83	1 SBIY 72.35 0
MK13-00042	MND-42	535	天城柏崎群	AGKT	AGKT	6.89	1 HNKLT 128.12 0
MK13-00043	MND-43	616	天城柏崎群	AGKT	AGKT	8.28	1 HNKLT 135.95 0
MK13-00044	MND-44	620	諭訪星+台群	SWHD	SWHD	5.32	1 SBIY 103.36 0
MK13-00045	MND-45	622	天城柏崎群	AGKT	AGKT	12.83	1 HNKLT 141.46 0
MK13-00046	MND-46	625	天城柏崎群	AGKT	AGKT	11.52	1 HNKLT 139.99 0
MK13-00047	MND-47	632	天城柏崎群	AGKT	AGKT	4.96	1 HNKLT 127.19 0
MK13-00048	MND-48	649	天城柏崎群	AGKT	AGKT	3.11	1 HNKLT 127.67 0
MK13-00049	MND-49	669	天城柏崎群	AGKT	AGKT	12.52	1 HNKLT 170.4 0
MK13-00050	MND-50	678	天城柏崎群	AGKT	AGKT	11.43	1 HNKLT 85.01 0
MK13-00051	MND-51	680-1	天城柏崎群	AGKT	AGKT	18.84	1 HNKLT 152.6 0
MK13-00052	MND-52	680-2	天城柏崎群	AGKT	AGKT	8.94	1 HNKLT 148.59 0
MK13-00053	MND-53	680-3	天城柏崎群	AGKT	AGKT	2.54	1 HNKLT 89.57 0
MK13-00054	MND-54	681	諭訪星+台群	SWHD	SWHD	14.45	1 WDTN 81.47 0

研究室 年間通番	分析番号	遺物番号	推定産地	判別分析						
				第1候補産地						
				判別群	距離	確率				
MK13-00055	MND-55	715	諭訪星・台群	SWHD	SWHD	4.31	1	WDTN	96.55	0
MK13-00056	MND-56	721	天城柏崎群	AGKT	AGKT	6.58	1	HNKT	122.16	0
MK13-00057	MND-57	734	天城柏崎群	AGKT	AGKT	3.12	1	HNKT	93.9	0
MK13-00058	MND-58	806	天城柏崎群	AGKT	AGKT	2.14	1	HNKT	112.37	0
MK13-00059	MND-59	807	神津島恩施島群	KZOB	KZOB	7.12	1	KZSN	39.6	0
MK13-00060	MND-60	808	神津島恩施島群	KZOB	KZOB	1.68	1	KZSN	45.82	0
MK13-00061	MND-61	809	天城柏崎群	AGKT	AGKT	12.54	1	HNKT	109.11	0
MK13-00062	MND-62	857	神津島恩施島群	KZOB	KZOB	11.49	1	KZSN	52.44	0
MK13-00063	MND-63	860	神津島恩施島群	KZOB	KZOB	5.02	1	KZSN	58.67	0
MK13-00064	MND-64	861	推定不可	推定不可	推定不可	推定不可	推定不可	推定不可	推定不可	推定不可
MK13-00065	MND-65	888	天城柏崎群	AGKT	AGKT	11.71	1	HNKT	95.03	0
MK13-00066	MND-66	910	諭訪星・台群	SWHD	SWHD	9.93	1	WDTN	122.72	0
MK13-00067	MND-67	911	神津島恩施島群	KZOB	KZOB	2.92	1	KZSN	72.04	0
MK13-00068	MND-68	964	天城柏崎群	AGKT	AGKT	0.97	1	HNKT	120.17	0
MK13-00069	MND-69	985	神津島恩施島群	KZOB	KZOB	10.67	0.9998	KZSN	25	0.0002
MK13-00070	MND-70	991-2	神津島恩施島群	KZOB	KZOB	3	1	KZSN	48.67	0
MK13-00071	MND-71	995	神津島恩施島群	KZOB	KZOB	4.47	1	KZSN	69.88	0
MK13-00072	MND-72	998-1	神津島恩施島群	KZOB	KZOB	16.53	1	KZSN	85.8	0
MK13-00073	MND-73	998-2	神津島恩施島群	KZOB	KZOB	0.57	1	KZSN	58.07	0
MK13-00074	MND-74	999	神津島恩施島群	KZOB	KZOB	20.59	1	KZSN	104.39	0
MK13-00075	MND-75	1000	神津島恩施島群	KZOB	KZOB	4.35	1	KZSN	39.84	0
MK13-00076	MND-76	1001	神津島恩施島群	KZOB	KZOB	11.09	1	KZSN	70.14	0
MK13-00077	MND-77	1002	神津島恩施島群	KZOB	KZOB	8.94	0.9999	KZSN	25.35	0.0001
MK13-00078	MND-78	1003	神津島恩施島群	KZOB	KZOB	7.03	1	KZSN	66.18	0
MK13-00079	MND-79	1004	天城柏崎群	AGKT	AGKT	6.22	1	KKO1	115.45	0
MK13-00080	MND-80	1005	神津島恩施島群	KZOB	KZOB	15.6	1	KZSN	57.22	0
MK13-00081	MND-81	1030	推定不可	推定不可	推定不可	推定不可	推定不可	推定不可	推定不可	推定不可
MK13-00082	MND-82	1048	神津島恩施島群	KZOB	KZOB	14.62	1	KZSN	69.47	0
MK13-00083	MND-83	1057	神津島恩施島群	KZOB	KZOB	1.81	1	KZSN	51.11	0
MK13-00084	MND-84	1060	神津島恩施島群	KZOB	KZOB	5.53	1	KZSN	76.8	0
MK13-00085	MND-85	1065	天城柏崎群	AGKT	AGKT	11.73	1	HNKT	86.72	0
MK13-00086	MND-86	1069	神津島恩施島群	KZOB	KZOB	7.48	1	KZSN	47.2	0
MK13-00087	MND-87	1070-1	神津島恩施島群	KZOB	KZOB	2.44	1	KZSN	40.04	0
MK13-00088	MND-88	1070-2	神津島恩施島群	KZOB	KZOB	9.54	1	KZSN	66.72	0
MK13-00089	MND-89	1070-3	神津島恩施島群	KZOB	KZOB	7.63	1	KZSN	54.83	0
MK13-00090	MND-90	1070-4	神津島恩施島群	KZOB	KZOB	11.91	1	KZSN	29.61	0
MK13-00091	MND-91	1071	神津島恩施島群	KZOB	KZOB	9.29	1	KZSN	87.44	0
MK13-00092	MND-92	1074	神津島恩施島群	KZOB	KZOB	11.63	1	KZSN	61.7	0
MK13-00093	MND-93	1077	神津島恩施島群	KZOB	KZOB	13.01	1	KZSN	56.84	0
MK13-00094	MND-94	1082	神津島恩施島群	KZOB	KZOB	8.17	1	KZSN	65.36	0
MK13-00095	MND-95	1085	天城柏崎群	AGKT	AGKT	12.45	1	HNKT	114.86	0
MK13-00096	MND-96	1091	天城柏崎群	AGKT	AGKT	10.95	1	HNKT	101.05	0
MK13-00097	MND-97	1094	神津島恩施島群	KZOB	KZOB	3.47	1	KZSN	65.56	0
MK13-00098	MND-98	1096	天城柏崎群	AGKT	AGKT	2.95	1	HNKT	102.66	0
MK13-00099	MND-99	1101	神津島恩施島群	KZOB	KZOB	16.17	1	KZSN	71.38	0
MK13-00100	MND-100	1107	天城柏崎群	AGKT	AGKT	1.52	1	HNKT	104.19	0
MK13-00101	MND-101	1108	神津島恩施島群	KZOB	KZOB	6.53	1	KZSN	44.16	0
MK13-00102	MND-102	1371	推定不可	推定不可	推定不可	推定不可	推定不可	推定不可	推定不可	推定不可
MK13-00103	MND-103	2048	神津島恩施島群	KZOB	KZOB	4.79	1	KZSN	37.77	0
MK13-00104	MND-104	2049	神津島恩施島群	KZOB	KZOB	9.78	1	KZSN	57.34	0
MK13-00105	MND-105	2050	天城柏崎群	AGKT	AGKT	2.89	1	HNKT	110.25	0
MK13-00106	MND-106	4	諭訪星・台群	SWHD	SWHD	10.54	1	SBYI	59.69	0
MK13-00107	MND-107	5	推定不可	推定不可	推定不可	推定不可	推定不可	推定不可	推定不可	推定不可
MK13-00108	MND-108	229	諭訪星・台群	SWHD	SWHD	14.56	1	WDTN	78.58	0
MK13-00109	MND-109	299	推定不可	推定不可	推定不可	推定不可	推定不可	推定不可	推定不可	推定不可
MK13-00110	MND-110	300	推定不可	推定不可	推定不可	推定不可	推定不可	推定不可	推定不可	推定不可
MK13-00111	MND-111	302	天城柏崎群	AGKT	AGKT	1.54	1	HNKT	107.83	0
MK13-00112	MND-112	325	推定不可	推定不可	推定不可	推定不可	推定不可	推定不可	推定不可	推定不可

研究室 年間通番	分析番号	遺物番号	推定産地	判別図 判別群	判別分析		
					第1候補産地		
					判別群	距離	確率
MK13-00113	MND-113	677	推定不可	推定不可	推定不可		
MK13-00114	MND-114	683	推定不可	推定不可	推定不可		
MK13-00115	MND-115	713	調訪呈々台群	SWHD	SWHD	15.12	1 SBYI 89.52 0
MK13-00116	MND-116	714	調訪呈々台群	SWHD	SWHD	15.08	1 SBYI 89.34 0
MK13-00117	MND-117	716	推定不可	推定不可	推定不可		
MK13-00118	MND-118	717	調訪呈々台群	SWHD	SWHD	17.16	1 WDTN 56.6 0
MK13-00119	MND-119	718	調訪呈々台群	SWHD	SWHD	4.35	1 SBYI 94.01 0
MK13-00120	MND-120	719	天城柏崎群	AGKT	AGKT	3.84	1 HNKT 97.81 0
MK13-00121	MND-121	720	天城柏崎群	AGKT	AGKT	1.2	1 HNKT 115.42 0
MK13-00122	MND-122	722	天城柏崎群	AGKT	AGKT	8.55	1 KKO1 94.15 0
MK13-00123	MND-123	730	推定不可	推定不可	推定不可		
MK13-00124	MND-124	732	推定不可	推定不可	推定不可		
MK13-00125	MND-125	733	天城柏崎群	AGKT	AGKT	3.03	1 HNKT 108.98 0
MK13-00126	MND-126	805	推定不可	推定不可	推定不可		
MK13-00127	MND-127	859	天城柏崎群	AGKT	AGKT	3.65	1 HNKT 97.2 0
MK13-00128	MND-128	974	神津島恩施島群	KZOB	KZOB	12.82	1 KZSN 46.29 0
MK13-00129	MND-129	1025	推定不可	推定不可	推定不可		
MK13-00130	MND-130	1029	天城柏崎群	AGKT	AGKT	7.44	1 KKO1 87.08 0
MK13-00131	MND-131	1046	推定不可	推定不可	推定不可		
MK13-00132	MND-132	1047	天城柏崎群	AGKT	AGKT	1.09	1 HNKT 126.13 0
MK13-00133	MND-133	1067	推定不可	推定不可	推定不可		
MK13-00134	MND-134	1072	天城柏崎群	AGKT	AGKT	14.21	1 HNKT 152.25 0
MK13-00135	MND-135	1073	天城柏崎群	AGKT	AGKT	11.06	1 HNKT 82.19 0
MK13-00136	MND-136	1075	推定不可	推定不可	推定不可		
MK13-00137	MND-137	1076	推定不可	推定不可	推定不可		
MK13-00138	MND-138	1083	天城柏崎群	AGKT	AGKT	7.15	1 HNKT 117.15 0
MK13-00139	MND-139	1087	天城柏崎群	AGKT	AGKT	17.98	1 HNKT 123.45 0
MK13-00140	MND-140	1098	天城柏崎群	AGKT	AGKT	10.89	1 HNKT 91.32 0
MK13-00141	MND-141	1106	天城柏崎群	AGKT	AGKT	2.37	1 HNKT 93.12 0

【表中用語】

判別図判別群：判別図法によって推定された産地

判別分析と結果が異なるときは "*" をつけて示す。

判別分析：第1候補産地…判別分析により推定された産地の第1候補

第2候補産地…判別分析により推定された産地の第2候補

判別群 候補産地記号

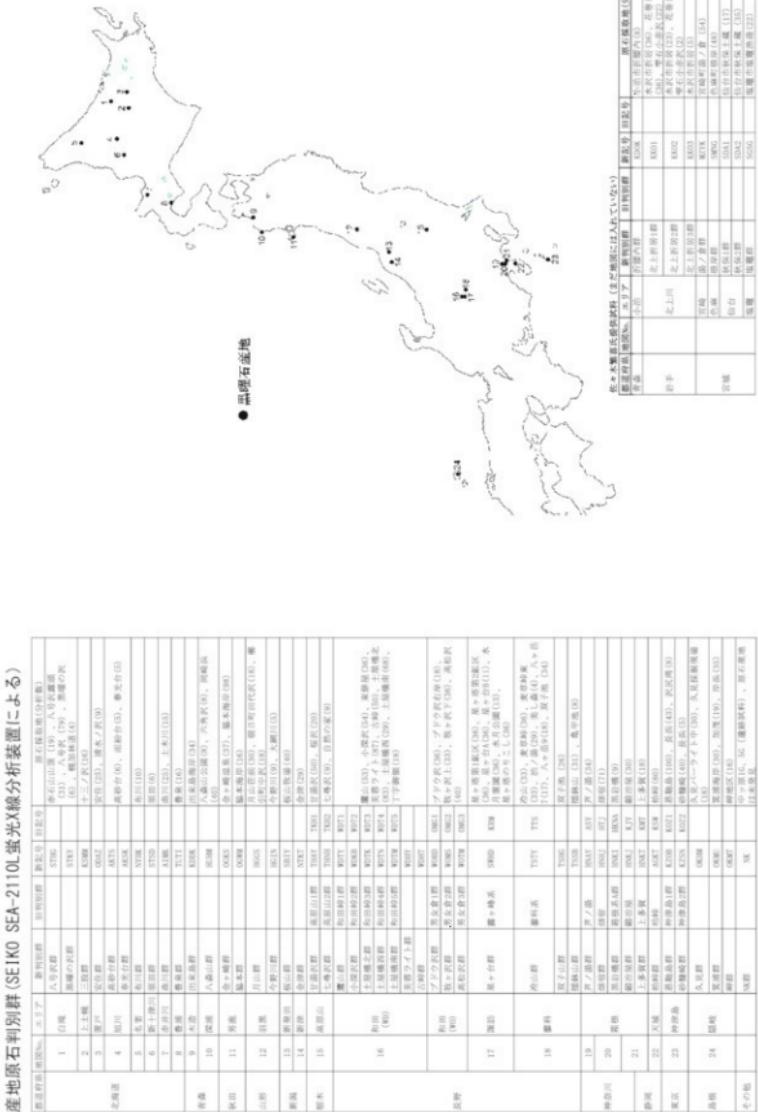
→ 判別図法による産地と通常は一致する。

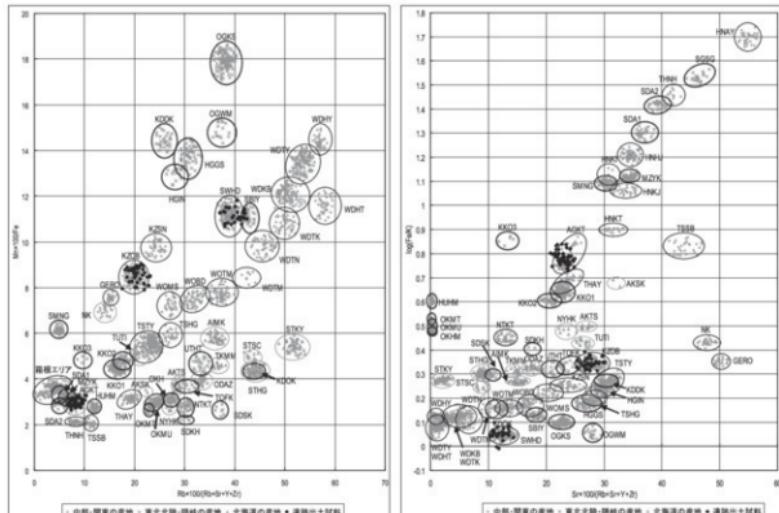
距離 試料から候補産地までのマハラノビス距離

→ 値が小さいほど候補産地と類似性が高い。

確率 試料が候補産地に属する確率

→ 1に近いほど類似性が高い。





宮ノ台遺跡出土黒曜石産地判別図

出土黒曜石産地組成

エリア	判別群	記号	試料数	%
和田(WO)	ブドウ沢	WOBD	0	0
	牧ヶ沢	WOMS	0	0
	高松沢	WOTM	0	0
和田(WD)	芙蓉ライト	WDHY	0	0
	鷹山	WDTY	0	0
	小深沢	WDKB	0	0
	土屋橋北	WDTK	0	0
	土屋橋西	WDTN	0	0
	土屋橋南	WDTM	0	0
諏訪	古崎	WDHT	0	0
蓼科	星ヶ台	SWHD	29	24.37
	冷山	TSTY	0	0
	子手子	TSHG	0	0
天城	擂鉢山	TSSB	0	0
	柏崎1	AGKT	52	43.7
箱根	細宿	HNHJ	0	0
	鍛冶屋	HNJK	0	0
	黒岩橋	HNKJ	0	0
	上多賀	HNKT	0	0
	芦ノ湯	HNAY	0	0
神津島	恩馳島	KZOB	38	31.93
	砂糠崎	KZSN	0	0
高原山	廿湯沢	THAY	0	0
	七尋沢	THNH	0	0
	新津	NTKT	0	0
新発田	板山	SBIY	0	0
	深浦	HUHM	0	0
木造	出来島	KDDK	0	0
	金ヶ崎	OGKS	0	0
男鹿	藍本	OGWM	0	0
	月山	HGGS	0	0
羽黒	今野川	HGIN	0	0

エリア	判別群	記号	試料数	%
折居1群		KK01	0	0
折居2群		KK02	0	0
折居3群		KK03	0	0
宮崎	湯ノ食	MZYK	0	0
仙台	秋保1群	SDA1	0	0
	秋保2群	SDA2	0	0
色麻	根岸	SMNG	0	0
東北	塩竈港群	SGSG	0	0
小泊	折壁内	KDK	0	0
魚津	草月上野	UTHT	0	0
高岡	二上山	TOFK	0	0
佐渡	真光寺	SDSK	0	0
	金井二ツ坂	SDKH	0	0
福井	久見	OKHM	0	0
岬地区		OKMT	0	0
箕浦		OKMU	0	0
8号沢	黒曜の沢	STHG	0	0
白滝	赤石山頂	STSC	0	0
赤井川	曲川	AIMK	0	0
	豊浦	TUTI	0	0
置戸	安住	ODAZ	0	0
十勝	三股	TKMM	0	0
名寄	布川	NYHA	0	0
旭川	高砂台	AKTS	0	0
	春光台	AKSK	0	0
不明产地1	NK	NK	0	0
	下呂石	GERO	0	0
	合計		119	100
	不可など		22	
	総計		141	

写 真 図 版

図版1 イザロ塚遺跡



調査区遠景（南東より）

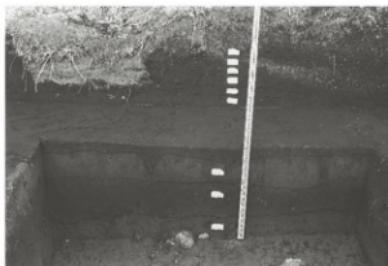


調査区遠景（北より）

図版2 イザロ塚遺跡



TP 2 北壁



TP 3 北壁



TP 9 北壁



TP11 北壁



TP 4 北壁



TP 4 尖頭器出土状況（1）



TP 4 尖頭器出土状況（2）



TP 4 出土尖頭器

図版3 宮ノ台遺跡



1区北 全景



1区南 J12・K12グリッド遺物出土状況

図版4 宮ノ台遺跡



2区 全景

図版5 宮ノ台遺跡



3区 全景



3区 3・4・5号溝状遺構完掘状況

図版6 宮ノ台遺跡



4区 全景



5区 全景

図版7 宮ノ台遺跡



6区 全景



TP70~73 完掘状況

図版8 宮ノ台遺跡

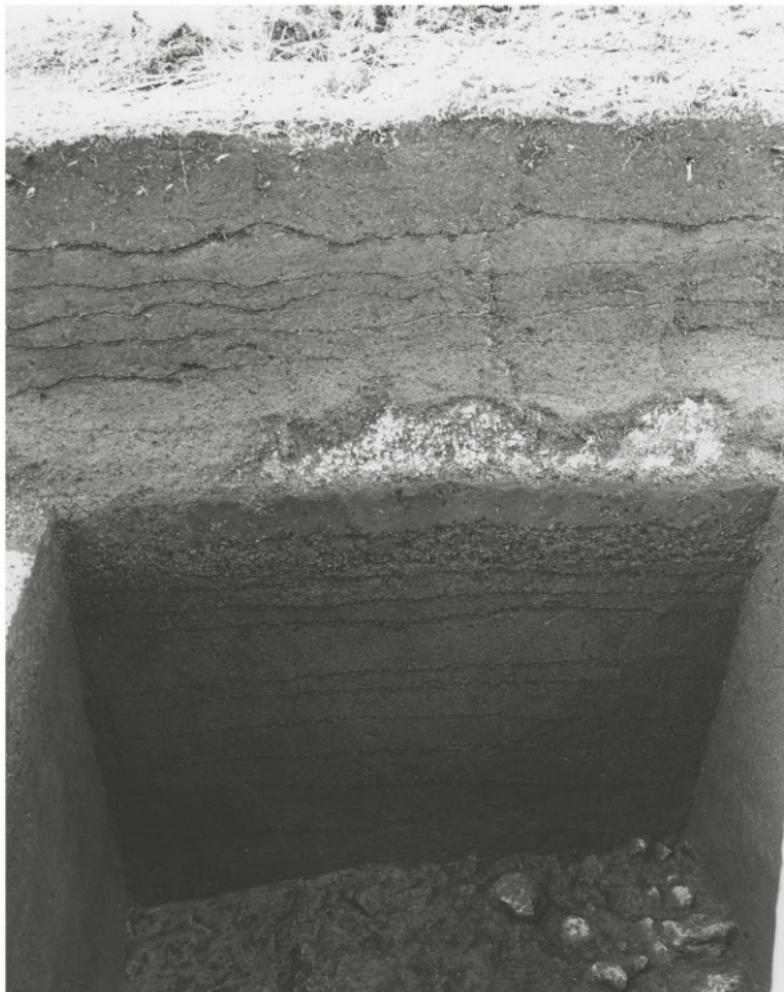


TP27 遺物出土状況



TP27 遺物出土状況拡大

図版9 宮ノ台遺跡



TP39 基本土層

図版 10 宮ノ台遺跡



1区 遺物出土状況



1区 遺物出土状況拡大（1）



1区 遺物出土状況拡大（2）



6区 遺物出土状況（1）



6区 遺物出土状況（2）

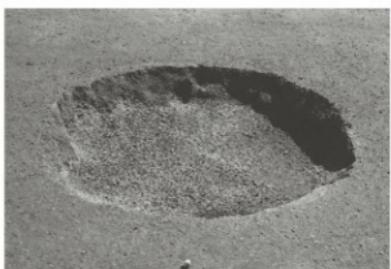
図版 11 宮ノ台遺跡



6区 10号溝状遺構 完掘状況

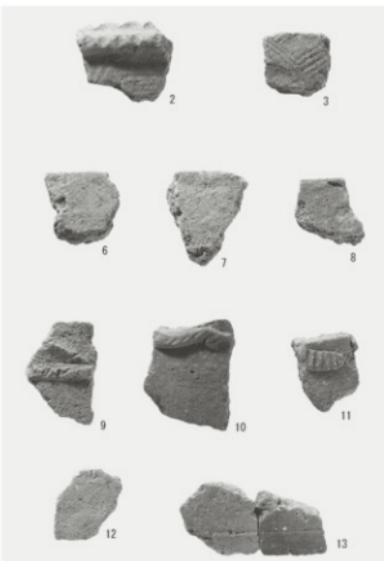
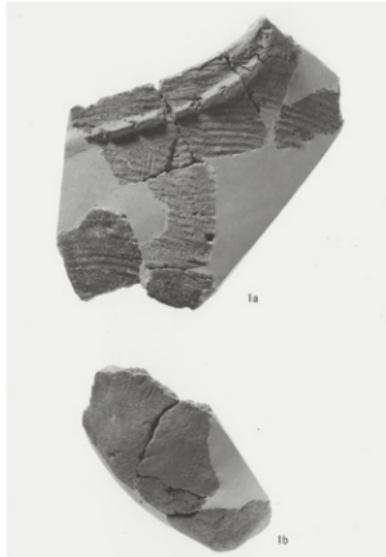


6区 8号土坑 梱出状況

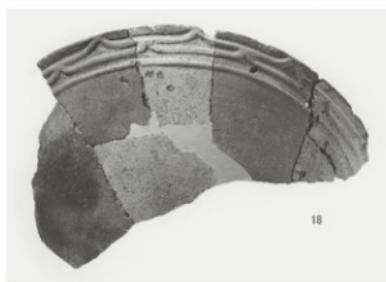
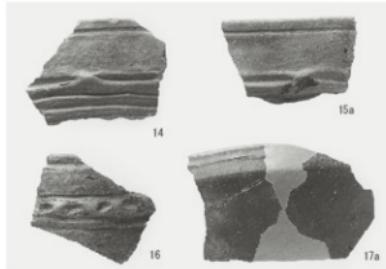


6区 8号土坑 完掘状況

図版12 宮ノ台遺跡

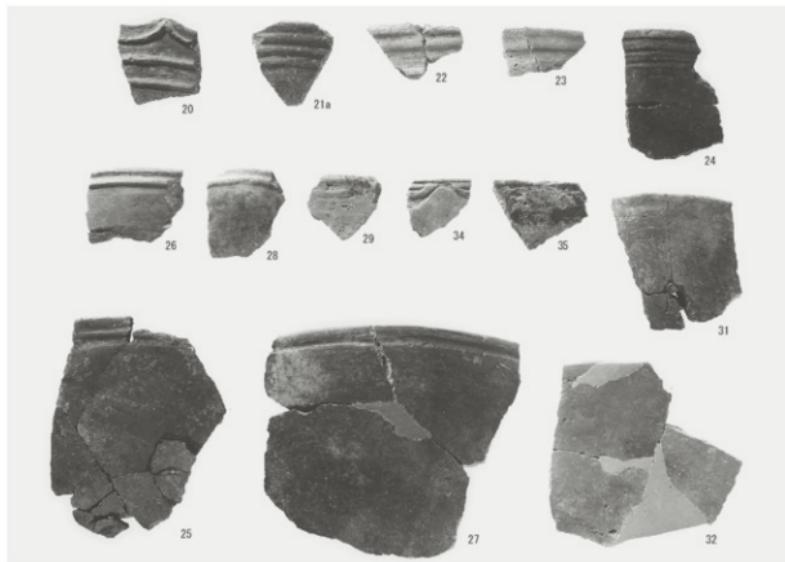


縄文時代早期 土器



縄文時代晩期 浅鉢

図版 13 宮ノ台遺跡

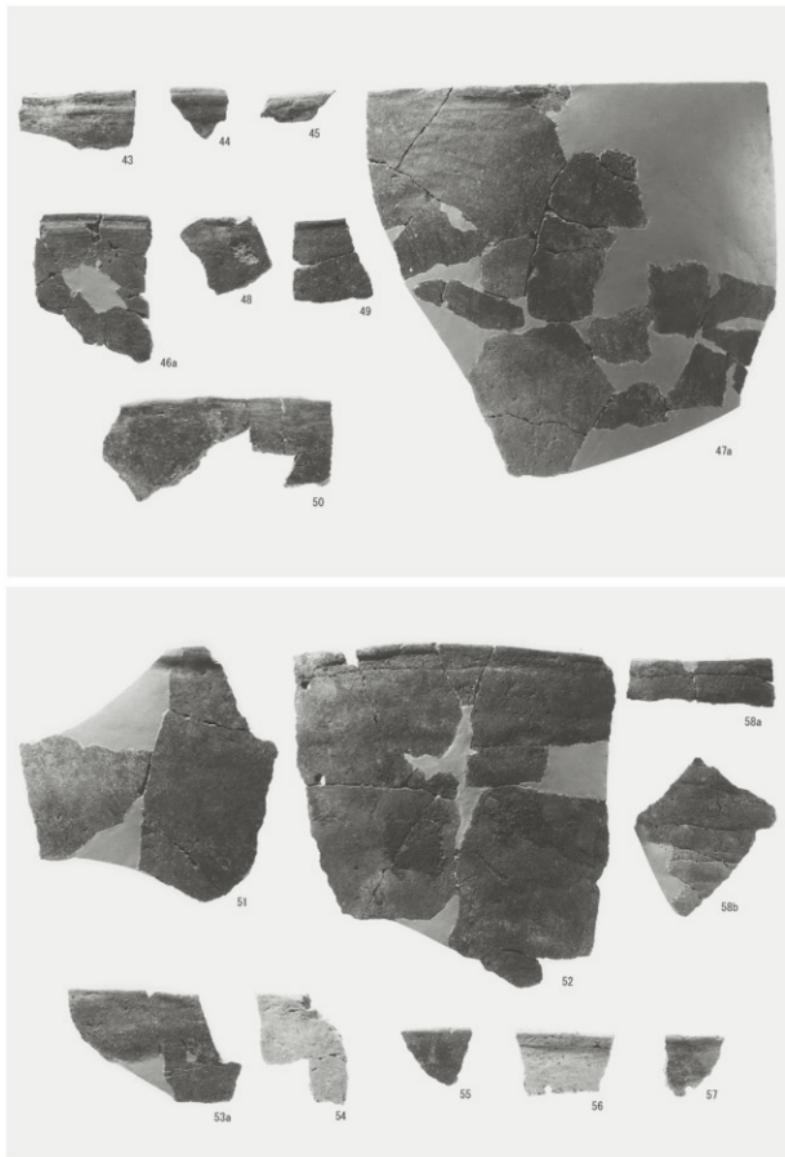


縄文時代晩期 浅鉢



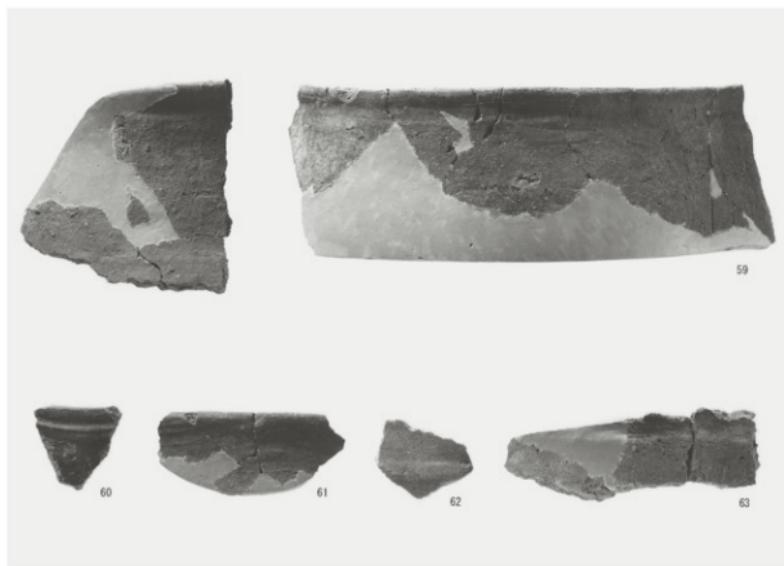
縄文時代晩期 深鉢

図版 14 宮ノ台遺跡



縄文時代晚期 深鉢

図版 15 宮ノ台遺跡



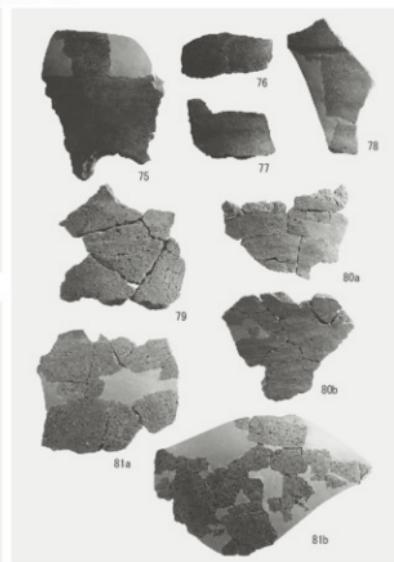
縄文時代晩期 壺



縄文時代晩期 双口鉢

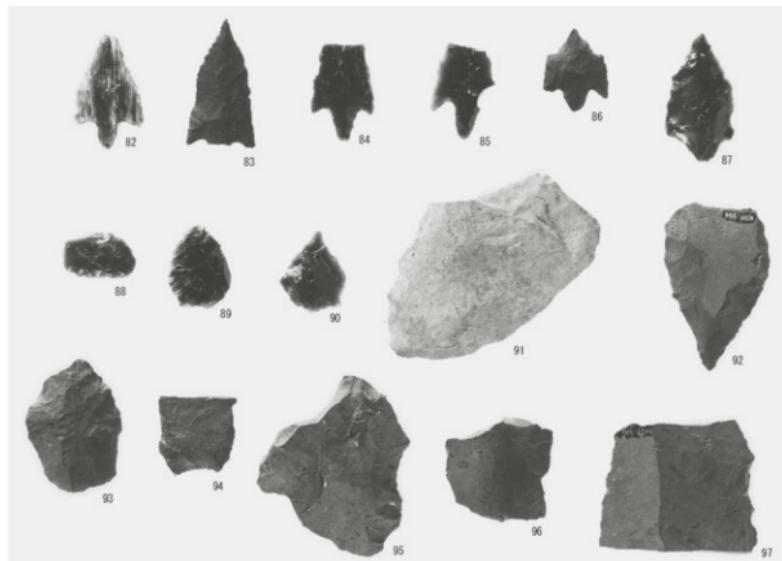


縄文時代晩期 東海系土器

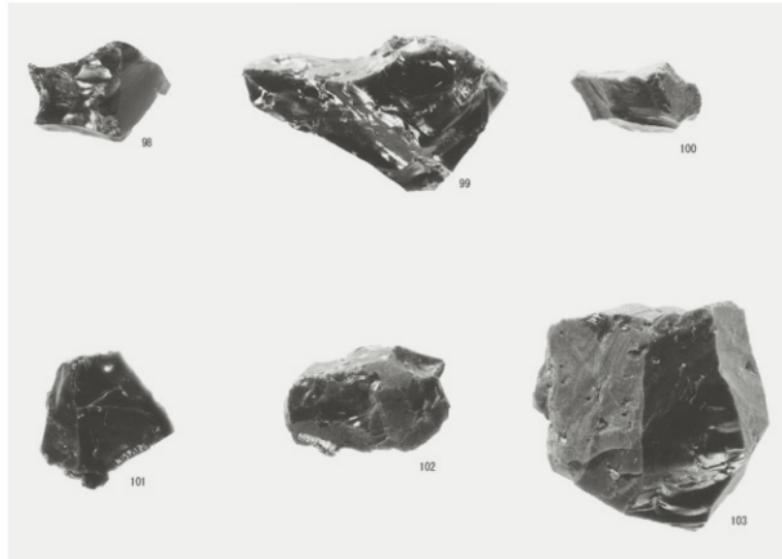


その他の縄文時代晩期土器

図版 16 宮ノ台遺跡



縄文時代晩期 剥片石器



縄文時代晩期 石核

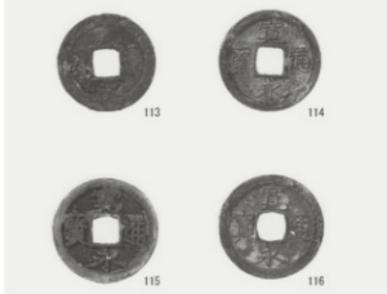
図版 17 宮ノ台遺跡



縄文時代晚期 碓石器



縄文時代晚期 台石



近世金属製品

報 告 書 抄 錄

ふりがな	ごてんばしこうやま・こまかどのいせきぐん
書名	御殿場市神山・駒門の遺跡群
副書名	第二東名建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ名	静岡県埋蔵文化財センター調査報告
シリーズ番号	第42集
編著者名	勝又直人・岩崎しのぶ・望月明彦（独立行政法人沼津高等工業専門学校名誉教授）
編集機関	静岡県埋蔵文化財センター
所在地	〒422-8002 静岡県静岡市駿河区谷田23番20号 TEL 054-262-4261㈹
発行年月日	2014年3月31日

静岡県埋蔵文化財センター調査報告 第42集

御殿場市神山・駒門の遺跡群

第二東名建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

御殿場市

平成26年3月31日発行

編集・発行 静岡県埋蔵文化財センター
〒422-8002 静岡県静岡市駿河区谷田23-20
TEL 054-262-4261㈹
FAX 054-262-4266

印 刷 所 みどり美術印刷株式会社
〒410-0058 沼津市沼北町2丁目16番19号
TEL 055-921-1839㈹